

～目次～

巻頭言（はじめに）

I	令和6年度の校内研究について	研1～4
II	令和6年度 研究実践	
	「小学部」研究グループ	小1～13
	「中学部」研究グループ	中1～12
	「高等部」研究グループ	高1～12
	「寄宿舍」研究グループ	寄1～12
III	1年次研究のまとめ	研1～4
IV	令和7年度の校内研究について	
V	研究実践	
	「小学部」研究グループ	小1～16
	「中学部」研究グループ	中1～12
	「高等部」研究グループ	高1～10
	「寄宿舍」研究グループ	寄1～10
VI	2年次研究のまとめ	研1～4

あとがき

研究同人

巻 頭 言

校 長 小嶋 加津美

本校ではこの二年間、「情報活用能力の育成」を研究の柱として、授業や生活の場面における実践を積み重ねてきました。本研究は、各学部や寄宿舎において、目の前にいる子供たちの姿を丁寧に見つめ、「子供たちにとって、どのような情報活用能力を育てることが必要であるのか」という問いを出発点として進めてきたものです。そして、ICTを活用すること自体を目的とするのではなく、子供一人一人が、主体的に必要な情報をどのように受け取り、どのように表現し、どのように活用しようとしているのかということに着目し、事例研究を中心に各グループでの協議と授業改善を重ねてきました。このような実態把握を基盤とした授業づくりこそが、一人一人の学びを支える「個別最適な学び」の確かな土台となっていることを実感しています。

一方で、こうした授業づくりを継続し、さらに深化させていくためには、教職員が子供たちの姿について語り合い、教材研究や授業準備に十分に取り組む時間を確保することが不可欠です。本年度は、学校全体で働き方改革に関するワークショップを実施し、業務の見直しや効率化を進めることで、授業づくりの時間を確保する環境整備を図ってきました。これらの取り組みは、子どもたちの学びの充実に資するのみならず、教職員一人一人のウェルビーイング、さらには学校全体の活力向上につながるものと考えています。

今後も日々の実践で積み重ねてきた成果や明らかになった課題を教育活動に生かし、教師集団としての授業力向上を図り、子供たちが安心して学び、自分らしく成長していける学校づくりを、教職員一丸となって推進してまいります。

最後に、本研究を進めるにあたり、山梨県教育委員会特別支援教育・児童生徒課主幹・指導主事の山下英志先生には、折に触れて貴重な御指導、御助言をいただきました。ここに厚く御礼申し上げます。

また、本研究紀要を御高覧いただきました関係者の皆様には、忌憚のない御意見や御教示をいただけましたら幸いです。

令和8年3月

1 研究主題

「情報活用能力の育成を目指した授業づくり」

2 研究設定の理由

これまで本校では指導と評価の一体化を目指し学習評価の充実を図るための取り組みとして評価規準の妥当性の検証を目的とした授業実践を行ってきた。3年間の取り組みの中で育成を目指す資質能力の3つの柱を意識した単元計画やその評価を行うこと、授業づくりの際に大切にすべきことについて私たち教師の意識の変化へとつなげることができた。教師がチームとなり「何が身についたか」を複数の視点で確認し授業づくりを行うことができ、授業改善や指導改善へとつながったことは大きな成果であった。

今年度の研究主題として教師へのアンケートを行った。その中で様々な意見があった。その中で上記の取り組みを経た上での学校教育目標の具現化に向けた新たな実践研究を行っていくことが必要であると考えた。

本年度の山梨県立やまびこ支援学校教育計画に示された指導重点は

- | |
|--|
| <ul style="list-style-type: none">(1) 基礎的・基本的な知識及び技能の習得と情報活用能力の育成(2) 自ら考え、判断、表現する力の育成(3) 学びに向かう力、社会と関わりながらよりよく生きるための人間力の育成(4) 豊かな心と健やかな体の育成 |
|--|

の4点とされている。今年度初めの職員会議にて校長よりその中で特に「情報活用能力」とはどのような力を指すのか、また目指す児童生徒像とはどのようなものかについて考えていってほしいとの話があった。

情報に関する教育については学校教育の中において以前よりその取り込みについて必要性が言及されている。「情報活用能力」とは令和元年12月「教育の情報化に関する手引き」によると「世の中の様々な事象を情報との結び付きとして捉えて把握し、情報及び情報技術を適切かつ効果的に活用して、問題を発見・解決したり自分の考えを形成したりしていくための必要な資質・能力」とされている。また、予測困難な未来社会を切り拓くには汎用性の高い資質・能力の育成が不可欠であることをコロナ渦で実感したところであった。平成28年12月中央教育審議会答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」において「言語能力」等と同様に「教科を超えた全ての学習の基盤として生まれ活用される資質・能力」の一つとして掲げられ、「教育課程全体を見渡して組織的に取り組み、確実に育んでいくことが重要である」と学習指導要領等に反映されていくように提言され、実施されていることは周知の通りである。文部科学省「新しい時代の特別支援教育の在り方に関する有識者会議報告本文（令和3年1月）Ⅳ ICT利活用等による特別支援教育の質の向上」において「1 特別支援教育におけるICT利活用の意義と基本的な考え方 ○ICTは、障害の有無を問わず、子供が主体的に学ぶために有用なものであるとともに、特別な支援を必要とする子供に対しては、その障害の状態や特性及び心身の発達の段階等に応じて活用することにより、各教科等の学習の効果を高めたり、障害による学習上又は生活上の困難を改善・克

服するための指導に効果を発揮したりすることができる重要なものである。また、合理的配慮を提供するに当たっても必要不可欠なものとなりつつある。」としている。また同会議にて「2. ICT活用による指導の充実と教師の情報活用能力（ICT活用による指導の充実）○ 指導内容や指導方法の充実の観点からは、ICTは、例えば、タブレットを使った授業などで、自分の考えをタブレットに書いて自らの意見を視覚的に表現しやすくなるなど、集団学習における個に応じた支援に生かすことができる。将来的には、例えば、障害のある子供の個々の教育的ニーズに応じた適切な指導の観点から、教材等の使用状況を自動的に記録し、取組の過程や解答状況等をデータとして蓄積することにより、エビデンスに基づいた指導の質の向上を目指すことも期待される。こうした活用の前提として、子供たち一人一人の障害の状態等や育成を目指す資質・能力、学習の習得状況等と照らし合わせながら、どのようにICTを活用した授業を実施していくことが適切なのか、ICTを活用した授業の在り方を引き続き検討していく必要がある。」と指摘されている。このように特別支援教育においてもICT利活用を含めた情報活用能力の育成について研究と実践を重ねていく必要があると考える。

さらに、育成に係る力について、文部科学省「教育の情報化の手引き追補版（令和2年6月）」の「第2節 学習の基盤となる資質・能力としての情報活用能力 1. 資質・能力の三つの柱と情報活用能力」の中で「これまでの「情報活用の実践力」「情報の科学的な理解」「情報社会に参画する態度」の3観点8要素だけでなく、各教科等において育むことを目指す資質・能力と同様に、「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」の三つの柱によって捉えていくことが提言され、以下のように整理された。」としている。

○知識及び技能(何を理解しているか、何ができるか)

情報と情報技術を活用した問題の発見・解決等の方法や、情報化の進展が社会の中で果たす役割や影響、技術に関する法・制度やマナー、個人が果たす役割や責任等について、情報の科学的な理解に裏打ちされた形で理解し、情報と情報技術を適切に活用するために必要な技能を身に付けていること。

○思考力、判断力、表現力等(理解していること、できることをどう使うか)

様々な事象を情報とその結びつきの視点から捉え、複数の情報を結びつけて新たな意味を見いだす力や問題の発見・解決等に向けて情報技術を適切かつ効果的に活用する力を身に付けていること。

○学びに向かう力、人間性等(どのように社会・世界と関わりよりよい人生を送るか)

情報や情報技術を適切かつ効果的に活用して情報社会に主体的に参画し、その発展に寄与しようとする態度等を身に付けていること。

(「教育の情報化の手引き追補版」より抜粋)

また、文部科学省委託事業「次世代の教育情報化推進事業『情報教育の推進等に関する調査研究』（以下、IE-School という。）を手掛かりに、情報活用能力に関する指導項目の分類や系統を整理した例示がされている。以下にその図を示す。

分類		
A. 知識及び技能	1	情報と情報技術を適切に活用するための知識と技能 ①情報技術に関する技能 ②情報と情報技術の特性の理解 ③記号の組合せ方の理解
	2	問題解決・探究における情報活用の方法の理解 ①情報収集、整理、分析、表現、発信の理解 ②情報活用の計画や評価・改善のための理論や方法の理解
	3	情報モラル・情報セキュリティなどについての理解 ①情報技術の役割・影響の理解 ②情報モラル・情報セキュリティの理解
B. 思考力、判断力、表現力等	1	問題解決・探究における情報を活用する力 (プログラミング的思考・情報モラル・情報セキュリティを含む) 事象を情報とその結び付きの視点から捉え、情報及び情報技術を適切かつ効果的に活用し、問題を発見・解決し、自分の考えを形成していく力 ①必要な情報を収集、整理、分析、表現する力 ②新たな意味や価値を創造する力 ③受け手の状況を踏まえて発信する力 ④自らの情報活用を評価・改善する力 等
C. 学びに向かう力・人間性等	1	問題解決・探究における情報活用の態度 ①多角的に情報を検討しようとする態度 ②試行錯誤し、計画や改善しようとする態度
	2	情報モラル・情報セキュリティなどについての態度 ①責任をもって適切に情報を扱おうとする態度 ②情報社会に参画しようとする態度

また、本校でも指導主事を招聘してのICT授業研究会を教務部の計画のもと行っており、そこで山梨県教育委員会特別支援教育・児童生徒支援課より山梨県特別支援教育における「ICT活用能力実態チェックシート（令和6年7月第3版）」が示されている。

「情報活用能力」の捉えについては以上のように山梨県教育委員会の体系表など、様々な文献や資料が示されている。その捉えについては多岐にわたり、煩雑となるため、本研究における情報活用能力について今一度考えていく必要がある。そして学習のねらいを達成するために必要な情報活用能力の育成場면을蓄積していくことで具体的な手立てについて考えていきたい。各学部の学びの場면을共にリンクさせながらこれまで取り組んできた活用場面と今後の授業実践により活用場면을蓄積していくことで本校の児童生徒のそれぞれの学部段階、発達段階において育成すべき情報活用能力がより明確化していくのではないかと考える。

これらの国の動向や時代の流れを受け、本校においてもICT利活用のみにとどまらない、情報活用能力の育成について、それを着実に児童生徒に身につけていけるような授業実践を重ねていくことが必要であると考え。特にタブレット端末等の活用が難しい実態の児童生徒への支援、学習場面ごとの様々な「情報」を効果的に活用することができるようになるか考えていけるとよい。それにあたりまずは児童生徒にとって必要な「情報活用能力」とはどのような力なのかを考察していきたい。「言語能力」と同様に発達段階や障害の状況によっても捉えが違ってくるであろう。本研究では授業実践を通して明らかにしていくため学部ごとの研究としたい。本校児童生徒の各学部の「情報活用能力」の捉えを明らかにしたのち、育成に有効な、授業における手立て、題材、支援方法等をPDCAサイクルにて考えていきたい。

3 研究目標（2年計画で研究を行う）

- (1) 本校児童生徒に必要な情報活用能力はどのようなものか、それを育成するにはどのような方法があるか実践を通し、検証していく。（1年次）
- (2) 本校児童生徒に必要な情報活用能力を育成するために必要な手立てについて授業実践を通し、児童生徒の変容を観察、考察していきながら育成を目指した授業づくりについて明らかにする。（2年次）
- (3) 授業研究を通して、授業の質や教職員の授業力を向上させる。

4 研究内容・方法

- (1) 本校児童生徒に必要な情報活用能力に関する考え方や捉え方について既存資料、実践成果等を基に整理を行いながら教師間の認識を揃える。
- (2) 情報活用能力を育成するための授業づくりについてPDC Aサイクルにて実践する。また、実践にあたり(1)で示された理論との双方を往還させながら研究を進めていく。

5 研究組織

- (1) 各学部及び寄宿舎での研究会（月1、2回程度の校内研究日）

6 研究計画

本研究は2年計画で行うものとし、令和6年5月から令和8年3月までの2年間を研究期間とする。

【令和6年度（1年次）】

	日にち	内容
全体研究会①	5月9日（木）	今年度の校内研究の方向性、計画等の提案、意見交換。
研究日①	5月16日（木）	学部研究テーマ、研究計画・内容の確認など
研究日②	5月27日（月）	グループ別計画による実践
研究日③	6月6日（木）	グループ別計画による実践
研究日④	7月23日（火）	グループ別計画による実践
全体研究会②	8月23日（金）	中間報告
研究日⑤	8月28日（水）	グループ別計画による実践
研究日⑥	9月20日（金）	グループ別計画による実践
研究日⑦	11月19日（火）	グループ別計画による実践
研究日⑧	12月25日（水）	グループ別計画による実践のまとめ
研究日⑨	1月17日（金）	学部まとめ、来年度に向けてのアンケート
全体研③-1	2月5日（水）	実践報告
全体研③-2	2月6日（木）	実践報告
全体研④	2月17日（月） 職員会議終了後	今年度の課題と成果、来年度へ向けての方向性の意見交換

寄宿舎は別途研究日を設定する。

「小学部」研究グループ

1 研究テーマ

『小学部段階における情報活用能力を育成する指導場面の検討』

2 研究テーマについて（設定の理由）

今年度の小学部は、16名の児童が在籍している。知的障害単一（12名）と重複障害（4名）の2つの教育課程に基づき、個々に応じた学習が組み立てられている。学級編成や各教科等の学習グループは、生活年齢を意識したものとされており、各学級・グループの中で児童それぞれの実態に応じた指導の工夫がなされている。1～6年という広い幅の中で、児童自身から学年を意識した発言が聞かれたり、学年をまたいだ交流では下級生に優しく接したりと、学年の区別があるからこそ自分の立場や役割の自覚が感じられる。児童らは、実態や生活年齢の差のある中で、小学部という集団で日々学習を積み重ねている。

特別支援学校要領・学習指導要領解説総則編（以下、学習指導要領総則）によると、“情報活用能力”は学習の基盤となる資質・能力（教科横断的な視点に立った資質・能力）の一つであり、自立活動とともに、小学部児童の教科等の指導を支える力であり、私たちが意識して育まなければならない資質・能力である。その一方で、教科等と同じように“時間における指導”ではない点や情報活用能力の内容の広義さからか、意識が向きにくい点ではあった。これまで「情報活用能力」と聞くと、普通小学校のように、一人一台用意されたiPad等のICT機器の活用のイメージも強く、小学部の児童の実態にそぐわないように見え、ICT機器の活用へのハードルの高さにもつながっていた。そのような状態を受けて、私たちが今一度、小学部の児童に対する“情報活用能力”とは、どういったものなのか、改めて捉え直す必要があると考えた。そうすることで、各教科等の学びがよりよくなり、子どもたち一人一人の生きる力の育成につなげていきたい。

そのために、「小学部段階における情報活用能力とは何か」「その指導の際に大切にしたいことは何か」を明らかにしたいと考えた。先にも示した通り、“情報活用能力”とは、学習の基盤となる資質・能力であり、学校での様々な指導場面で育まれるべきものである。このことを確認の上、児童の具体的姿をもとに文献等を読み解くこと、そして実際の指導場面の検討を通して、その読み解いたことを実践をもって確かなものにしていくことが必要だと考えた。その上で、次年度の授業づくりにつなげていきたい。

実際に、小学部の教員からは、特別支援学校、特に小学部においての“情報”という言葉の捉えが難しく、“情報を使う”ということとICT機器を使うということの区別がつきにくく混乱しやすいとの意見が挙がった。学部研究を通して、文献の読み解きや事例検討を重ねる中で、今現在ははっきりとしていない“情報”という言葉の意味をより明確に捉える場となるとよいと考える。また、“情報活用能力”の意味はとても広く、小学部としてどれが大切なことなのか、しぼる必要性がないか、との意見も挙が

った。この点についても、文献の読み解きの後、ICT活用チェックシート等を参考に、小学部段階で重要視したい内容について、明確化するよう努めることとしたい。

3 研究目標

(1) 本校小学部の児童に必要な情報活用能力はどのようなものかを捉え、それを育成するにはどのような方法があるか、また指導において大切なことは何かを検討する。

(2) 学部研究(文献から読み解く、事例検討等)を通して、情報活用能力に関する考えを深め、小学部の教員としての指導力を向上する。

4 研究目標及び方法

(1) 情報活用能力を捉える(自身の担当の児童を通して「学習指導要領総則」「教育の情報化に関する手引」「ICT活用チェックシート」の文献を読み、情報活用能力を具体的に捉える)

(2) 事例検討(低学年、高学年各1名、事例対象児童を挙げて、情報活用能力の育成の視点から授業場面を切り取り、観察や指導方法の検討・改善を行う。)

(3) まとめ(事例検討で出た意見をもとに、「小学部段階における情報活用能力とは」「指導の際に大切にしたいこと」を“小学部段階の情報活用能力”として抽象的に捉える)

5 研究計画

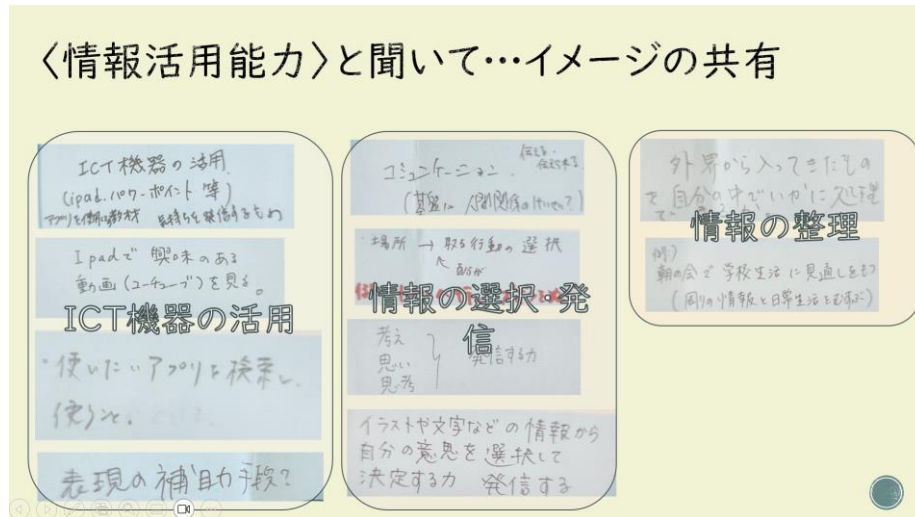
5月9日	第1回全体研－今年度の研究について(提案)
5月13日	学部研(1)－小学部研究の提案、情報活用能力に関するイメージの共有
5月27日	学部研(2)－情報活用能力を捉える(「学習指導要領総則」より)
6月7日	学部研(3)－情報活用能力を捉える(「教育の情報化に関する手引」より)
7月23日	学部研(4)－情報活用能力を捉える(「ICT活用チェックシート」より) 事例対象児童と指導場面の選定
8月23日	第2回全体研－中間報告会
8月28日	学部研(5)－事例対象児童の情報活用能力の目標の設定、指導の検討
9月27日	学部研(6)－事例検討①
11月19日	学部研(7)－事例検討②
12月25日	学部研(8)－事例検討③ 学部まとめ①「小学部段階における情報活用能力とは」 「指導の際に大切にしたいこと」
1月16日	学部研(9)－学部まとめ②

6 研究実践

(1) 情報活用能力を捉える

① 学習指導要領総則より

まず初めに、“情報活用能力”と聞いて、どのような力なのか、小学部教員の率直なイメージを共有した。そこには、意見の多い順番に、iPad等のアプリを活用する力として「ICT機器の活用」、場所に応じた行動をとったり、思いを発信したりする力として「情報の選択や発信」、学校生活への見通しをもつ力等の「情報の整理」が挙げられた。



そのイメージの上で、学習指導要領総則 P. 207 に示されている「情報活用能力」について読み進めた。

イ 情報活用能力

情報活用能力は、世の中の様々な事象を情報とその結び付きとして捉え、情報及び情報技術を適切かつ効果的に活用して、問題を発見・解決したり自分の考えを形成したりしていくために必要な資質・能力である。将来の予測が難しい社会において、情報を主体的に捉えながら、何が重要かを主体的に考え、見いだした情報を活用しながら他者と協議し、新たな価値の創造に挑んでいくためには、情報活用能力の育成が重要となる。また、情報技術は人々の生活にますます身近なものとなっていくと考えられるが、そうした情報技術を手段として学習や日常生活に活用できるようにしていくことも重要となる。

特別支援学校学習指導要領総則 p. 207

ここに示されている通り、上記の下線部「世の中の様々な事象を情報とその結び付きとして捉え」「情報及び情報技術を適切かつ効果的に活用して」「問題を発見・解決したり自分の考えを形成したりしていく」は、情報活用能力を育む目的、必要性和読み取れる。私たちがもっていた“情報活用能力”のイメージを、この3点に照らし合わせると、4点の気づきがうまれた。

- (a) 近年の「ICT 機器の活用」の流れと「情報活用能力」の区別をつける必要性があること。
- (b) 五感を使って感じたり、気付いたりすることが情報を得る基礎ではないかということ。
- (c) 得た情報を生活の中で使うことが大事であること。
- (d) 得た情報を伝える、発信する場があることが大切であること。

自分たちの現時点でのイメージを振り返り、情報活用能力を育む視点として、これらのことを前提として検討を進める必要性がわかった。

次に、情報活用能力をより具体的に捉えるために、P. 208 に進んだ。

情報活用能力をより具体的に捉えれば、学習活動において必要に応じてコンピュータ等の情報手段を適切に用いて情報を得たり、情報を整理・比較したり、得られた情報を分かりやすく発信・伝達したり、必要に応じて保存・共有したりといったことができる力であり、さらに、このような学習活動を遂行する上で必要となる情報手段の基本的な操作の習得や、プログラミング的思考、情報モラル、情報セキュリティ、統計等に関する資質・能力等も含むものである。

特別支援学校学習指導要領 総則 p. 208

ここに示されている、下線部 9 つの具体的な資質・能力について、担当児童にとって、どんな姿かを考え、共有した。

グループ共有 「情報活用能力」を捉える		学年 G ・ 高学年 G	学部研②R6.5.27
① 学習活動において必要に応じてコンピュータ等の情報手段を適切に用いて情報を得る	① どの情報(情報源)の信頼性(信頼性)を確認する(信頼性評価)	② 情報源(信頼性)の信頼性(信頼性)を確認する(信頼性評価)	付箋の内容を共有して、気付いたこと(なんで付箋が多い?少ない?、小学部で大切な情報源(信頼性)の信頼性(信頼性)について情報手段で?
② 情報を整理・比較する	② 情報源(信頼性)の信頼性(信頼性)を確認する(信頼性評価)	③ 信頼性(信頼性)を確認する(信頼性評価)	④ 信頼性(信頼性)を確認する(信頼性評価)
③ 得られた情報を分かりやすく発信・伝達する	③ 信頼性(信頼性)を確認する(信頼性評価)	④ 信頼性(信頼性)を確認する(信頼性評価)	⑤ 信頼性(信頼性)を確認する(信頼性評価)
④ 必要に応じて保存・共有したり	④ 信頼性(信頼性)を確認する(信頼性評価)	⑤ 信頼性(信頼性)を確認する(信頼性評価)	⑥ 信頼性(信頼性)を確認する(信頼性評価)
⑤ このような学習活動(①～④)を遂行する上で必要となる情報手段の基本的な操作の習得	⑤ 信頼性(信頼性)を確認する(信頼性評価)	⑥ 信頼性(信頼性)を確認する(信頼性評価)	⑦ 信頼性(信頼性)を確認する(信頼性評価)
⑥ プログラミング的思考に関する資質・能力等	⑥ 信頼性(信頼性)を確認する(信頼性評価)	⑦ 信頼性(信頼性)を確認する(信頼性評価)	⑧ 信頼性(信頼性)を確認する(信頼性評価)
⑦ 情報モラルに関する資質・能力等	⑦ 信頼性(信頼性)を確認する(信頼性評価)	⑧ 信頼性(信頼性)を確認する(信頼性評価)	⑨ 信頼性(信頼性)を確認する(信頼性評価)
⑧ 情報セキュリティに関する資質・能力等	⑧ 信頼性(信頼性)を確認する(信頼性評価)	⑨ 信頼性(信頼性)を確認する(信頼性評価)	⑩ 信頼性(信頼性)を確認する(信頼性評価)
⑨ 統計等に関する資質・能力等	⑨ 信頼性(信頼性)を確認する(信頼性評価)	⑩ 信頼性(信頼性)を確認する(信頼性評価)	⑪ 信頼性(信頼性)を確認する(信頼性評価)

この作業を通しての気付きとしては、以下の 3 点が挙げられた。

- (e) 小学部における「情報」「情報手段」は広義であるということ。
- (f) 低学年からは「外界のものを取り入れる、五感から試す」、高学年からは「言葉、言葉にのる思いをくみ取る、伝えたいという思いをもつ」等がキーワードとなること。
- (g) 外界に関心を向け、情報を取り入れたい、知りたい、伝えたいといった思いを育てることが大切ではないか、ということ。

りである。

低学年

〈知〉 情報を得る、外へ意識を向ける（気付く）、機器に親しむ

〈思〉 情報を選択する、イラスト・写真と事象を結び付ける

〈学〉 事象・物事に興味をもとうとする、外へ疑問をもとうとする、気付きを共有しようとする

高学年

〈知〉 教師（人）を含め外の環境から情報を得る

〈思〉 自分にとって必要な情報を「…ということはこうかな？」と考えるために使う

〈学〉 教師（人）を含め外の様子を意識して「こうかな？」と思おうとする。

これらのことを、仮説として立て、これを事例検討の際の指針として活用することとした。

③ ICT活用チェックシートより

①②の学部研究での成果をもとに、山梨県教育委員会作成の「ICT活用チェックシート」を用いて、小学部における情報活用能力の育成において重要視したいことを、広義にわたる中から、可視化をした。

項目	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	1-1-1	1-1-2	1-1-3	1-1-4	1-1-5	1-1-6	1-1-7	1-1-8	1-1-9	1-1-10	1-1-11	1-1-12	1-1-13	1-1-14	1-1-15	1-1-16	1-1-17	1-1-18	1-1-19	1-1-20	1-1-21	1-1-22	1-1-23	1-1-24	1-1-25	1-1-26	1-1-27	1-1-28	1-1-29	1-1-30	1-1-31	1-1-32	1-1-33	1-1-34	1-1-35	1-1-36	1-1-37	1-1-38	1-1-39	1-1-40	1-1-41	1-1-42	1-1-43	1-1-44	1-1-45	1-1-46	1-1-47	1-1-48	1-1-49	1-1-50	1-1-51	1-1-52	1-1-53	1-1-54	1-1-55	1-1-56	1-1-57	1-1-58	1-1-59	1-1-60	1-1-61	1-1-62	1-1-63	1-1-64	1-1-65	1-1-66	1-1-67	1-1-68	1-1-69	1-1-70	1-1-71	1-1-72	1-1-73	1-1-74	1-1-75	1-1-76	1-1-77	1-1-78	1-1-79	1-1-80	1-1-81	1-1-82	1-1-83	1-1-84	1-1-85	1-1-86	1-1-87	1-1-88	1-1-89	1-1-90	1-1-91	1-1-92	1-1-93	1-1-94	1-1-95	1-1-96	1-1-97	1-1-98	1-1-99	1-1-100

これまで検討されてきたことから、私たちが、小学部段階でより重要視したいと考えたのは、知識・技能では「(2)問題解決・探究における情報活用の方法の理解①情報収集／②整理・分析・表現／③発信」、思考力・判断力・表現力では「(1)問題解決・探究における情報を活用する力②新たな意味や価値を創造する力」、学びに向かう力・人間性では「(1)問題解決・探究における情報を活用する力①多角的に情報を検討しようとする態度」であった。広義な情報活用能力の中から、これらに焦点の当たった事例検討を目指すこととした。

(2) 事例検討

低学年グループと高学年グループに分かれて検討を行った。これまで文献を通して、情報活用能力を捉えてきたことを活かして、事例対象児童の2つの指導場面を選定した。その指導場面を撮影した動画を使って、小グループでの検討を重ねた。

指導場面を2つとしたのは、情報活用能力が“教科等横断的な視点に立った資質・能力”であり、自立活動の上にくる学習の基盤となる力として位置づけられているものであるからである。複数の場面を検証していくことで、その事例対象児童の各教科等の“学びを支える大きな力の一つ”として情報活用能力についての検討がしやすくなると考えた。

① 低学年グループ

(a) 事例対象児童について

1年生 N.M

- ・情報収集の点で、低学年の中で一番の困難さをもっているのではないか。(授業中の離席＝することがわからない、近距離での観察＝提示されているものへの関わり方等)
- ・本人が、状況を捉えて、理解し、活動に参加するため支援や学習に向かおうとする環境づくりが必要。それは、どの授業場面にも通ずるのではないか。
- ・外（こちらの示すもの）への関心をもってほしい、見ようとしてほしい。

(b) 指導場面について

国語・算数／体育

(c) 事例検討のまとめ（別添資料①：事例検討の過程を示すワークシート）

<p>指導場面の検討（1年 N.M）まとめ</p> <p>場面① 国語・算数の指導場面で気づいたこと(情報活用能力に関わって)</p> <p>「同じものを合わせる」という学習内容が伝わっているか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・運動感覚をたよりにした手段(入れる、はめる)に着目してしまっている。入れたら終わりになって見分け課題になっていない。やってほしいことが伝わっていない。 ・自分の顔写真を選ぶ様子が見られたから課題を設定してみたが、そもそも児童の実態に合っていなかったかもしれない。 →運動感覚の手立てがやることを伝える手段にならず、邪魔になってしまった。まずは、児童に合った課題の見直しを行う。
<p>場面② 体育の指導場面で気づいたこと(情報活用能力に関わって)</p> <p>よく前(集団の方)を見ている。→情報(みんなのいる方向が自分が歩く方向)を得ようとしている。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・道を間違えた時に、教師が壁となり、集団のいる方へ視線が向くと、方向を直す→言葉かけ(「Nさん、こっちだよ」)の支援のみというより、物理的支援も必要か。 ・特別活動(この授業とは違う場面)でも集団について歩いていく様子も見受けられた。本児にとって目印となる人がいれば、みんなについて歩いていくことができる。
<p>N.Mさんにとっての情報活用能力とは…(参考:総則 P.207,208)</p> <p>○情報を得ようとする(見ようとする、聞こうとする、触ろうとする、やろうとすること等)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・見ようとする…周りの人の動きをよく見る様子がある。 ・聞こうとする…本児の言葉(内言語)が増えていくと、聞く意味が見いだされ、より聞こうとするようになるのでは。 ・やろうとする…日常生活の流れ、授業の流れ等、わかった上で「次はこれかな」「あれだろうな」と思ってやろうとする様子が見られるとよい。
<p>研究で検討したことを通して、情報活用能力を育むために、N.Mさんに必要な手立ては?指導の際に大切にしたい視点は?</p> <p>・繰り返し取り組むこと</p> <ul style="list-style-type: none"> ・言葉をわかりやすく使うこと(言語環境の整備) ・“今できること”を活かした新しい学習の設定(ex.体育の実践での、歩く方向を変えていったこと等) ・下を向いて自己刺激(発声、手遊び)に没頭しやすいので、物理的に視線をあげられるような支援、あげたくなるような支援をして、世界を広げて情報を得られるように

○本児にとっての情報活用能力とは

- ・情報を得ようとする力(見よう、聞こう、触ろう、やろうとすること)

○本児にとって必要な手立て、指導において大切にしたいこと

- ・繰り返し取り組むことで、“やってほしいこと(授業の流れ等)”を伝えること
- ・本児にとってわかりやすい言葉を使うこと、また言葉数を精選すること
- ・下を向いて発声や手遊び(自己刺激)をしていることが多いので、物理的に視界を広げる手立て(教材の提示位置、書見台の活用等)
- ・“今できること”をベースにした授業づくり、活動設定をすること

② 高学年グループ

(a) 事例対象児童について

6年 Y.S

- ・ある程度、言葉が使えるようになってきているところである。(2語で話そうとする)
- ・最近“周囲の影響を受けてそれが表に出る”ことが多く、周囲からの情報収集が活発になっていると考えられる。

(b) 指導場面について

国語／日常生活の指導（朝の係活動場面）

(c) 事例検討のまとめ（別添資料②：事例検討の過程を示すワークシート）

指導場面の検討〈6年 Y.S〉まとめ
場面① 日常生活の指導の指導場面で気づいたこと(情報活用能力に関わって)
・“天気調べ”…調べたことを活かせる場を教師が意識して作りたい。本児も「ここに書いてる」と言うように、指さして伝えられるので、新聞から情報を得ている。
・“ニュース調べ”…写真をそれなりに選んでいる。当てずっぽうではない。地震の記事等、印象に残ったものを選んでいる。その際に「漢字教えて」と教師に尋ねる姿もあり、“知りたいから聞く”という姿勢が感じられる。(漢字に興味があるなら、iPadでの検索や漢字辞典等の活用も考えられるか。手段の広がりが)
場面② 国語の指導場面で気づいたこと(情報活用能力に関わって)
・日常生活とつながることが大事だと思った。
・関心のあるもの、実感のあるものを扱う。
Y.Sさんにとっての情報活用能力とは〈参考:総則 P.207,208〉
○情報を自分から得にいくこと
・こういう姿勢を広げる、その手段を広げることが大切になる。
○得た情報を使おうとすること
研究で検討したことを通して、情報活用能力を育むために、N.Mさんに必要な手立ては?指導の際に大切にしたい視点は?
・教師が意識的に“ちょっと困りポイント”をつくる。(いつもと違う解決法を提供する。Ex.先に出た漢字の調べ方等)
・本児が本当に気になること、関心のあること、困ったことを題材にする。

○本児にとっての情報活用能力とは

- ・情報を自分から得にいく力

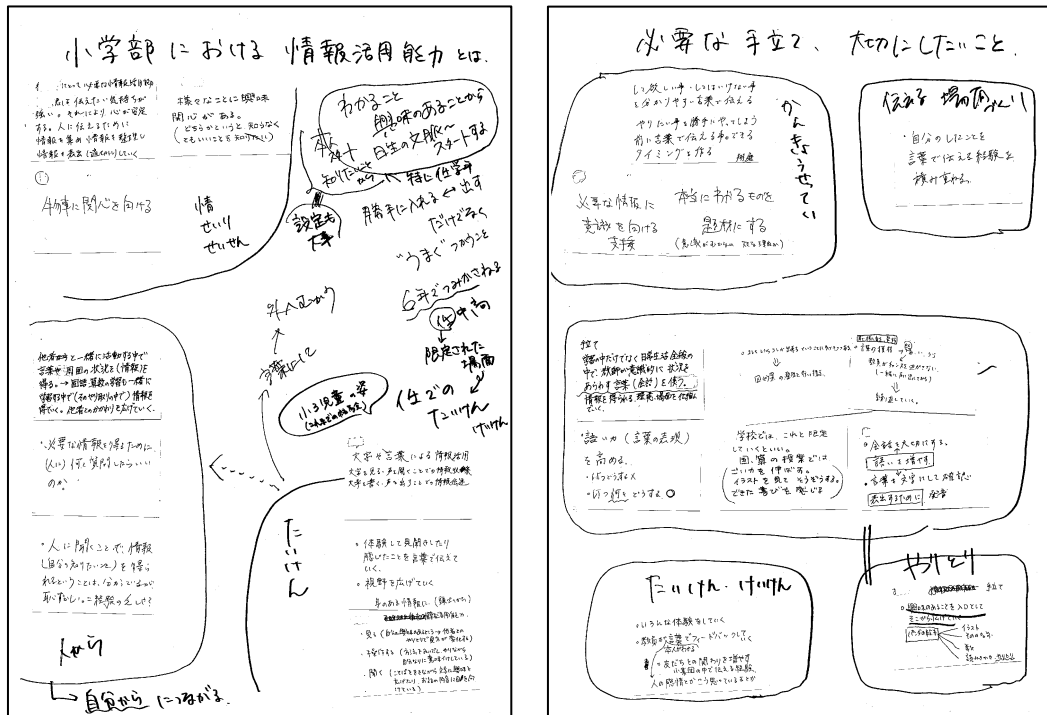
○本児にとって必要な手立て、指導において大切にしたいこと

- ・“天気調べ（新聞から天気予報を見つける）”をしているが、調べるだけで終わらずに、得た情報（天気）に意味付けをしていくこと
- ・知らない漢字と出会うと「漢字教えて」と言ったり、気になっている先生が出勤しているかどうか聞いたり、本人の自発的な行動が見られる。もっている力をいかして、手段（ex.漢字なら iPad や辞書での検索方法を教える等）を広げていくこと
- ・“いつもと違う”状況を意図的につくり、情報活用能力の育成にいかすこと

7 研究のまとめと今後の課題

事例検討を通して、事例対象児童2名の情報活用能力について検討を重ねてきた。そこで考えてきたことを通して、もう一度、“担当の児童にとっての情報活用能力とは” “その指導のために大切にしたいこととは” の2点を考えた。その際に、記入する付箋の色を、低学年（青）、高学年（ピンク）、重複生（緑）で分けるようにした。それ

らの意見を KJ 法を用いて整理を行い、これまで個人で検討してきたことを“小学部段階の児童”という大きな視点で捉え直すことで、まとめをしたい。



(1) 小学部段階における情報活用能力とは

- ・情報を整理する力
- ・人（友達を含む）から情報を得る力
- ・体験をもとに情報を得る力

整理をしていく中で、低学年と高学年の違いが顕著に出た。高学年になると、情報を得る対象となる人が徐々に友達まで広がりを見せることもあるようであった。一方で、低学年においては教師から情報を得る場面が多く、学校において身近な人である教師との関係性の大切さや教師がどう意図的かつ適切に情報を扱うかという重要性がわかる。それに加え、低学年や重複生については、体験をすることの重要性が集中している。一方で、高学年はそのような体験的な活動を積み重ねてきた低学年時代を経ているからこそ、対人や周囲の状況からの情報収集をすることができるようになるのではと考えられる。

(2) 指導において大切にしたいこととは

- ・環境設定をすること（情報を得たり、発信したりしやすい環境を意図的に設定する）
- ・得た情報を伝える場面をつくること
- ・言葉の力をつけること（語彙を増やす等）
- ・体験や経験を大切にすること（それを伴った身のある言葉をもつこと）
- ・興味のあることを入口に、やりとりを広げていくこと（人との関わりの基盤づくり）

整理をしていく中で、児童にとってわかること、興味のあることや日常生活の文脈から情報活用能力を育む指導を始めることが大切であるということを変更して感じたという意見が挙げられた。一方で、高学年の事例のような“天気調べ”等の設定された場面も情報収集の手段を広げる際に重要な役割があるという意見も出た。本人の“知りたい”を大切にしつつ、教師の意図した場面の設定も行っていきたい。

また、重複生（肢体不自由を併せもつ）について重点的に話されたのが、一見困難なく情報を得たり発信したりしているように見えるが、その情報に体験や経験が伴っていないと感じられることが多く、得るべき情報の精選が困難であることがうかがえる。そのため、生活の中での経験の積み上げや実感を伴った活動を通して、実のある情報にしていく必要性があることが挙げられた。

さいごに、研究として「情報活用能力」に焦点を当ててきたが、はじめに感じていたような「ICT 機器を使う」「どんなことをすればよいのかわからない」等のイメージとは変わり、これまで自分たちが当たり前に大切にしてきたこと（環境整備、言葉、体験等）がまとめとして挙げられた。それは、私たちが「情報活用能力」という言葉を、児童らを通して読み解き、考えてきたからであると思う。今後、「情報活用能力」のみならず、教育に関する様々な用語が新しく出てくる。その時に、それらの意味や出てきた背景などの自分たちで考えることを大切にしたい。このことは、時代が目まぐるしく変わっていく中で、適切な指導をする際に、必要となってくる教師の資質ともいえるだろう。

（3） 今後の課題

整理をしていく中で、情報活用能力の育成に関して、“小学部”という大きな括りのみならず、そこから更に“低学年”“中学年”“高学年”の違いを意識する必要性も明らかになった。今年度の学部研究では、“小学部における情報活用能力”という大きなまとめとしたが、来年度の研究での授業実践においては、今回明らかになったことをもとに、児童らの生活年齢、もっている経験を意識した情報の扱い（精選、提示、発信の場の設定）を明確にすることが必要となるだろう。情報活用能力を育む側の教師には、児童の学年によって、積み上げられる情報活用能力も変わってくるということを念頭に置くことが求められる。それぞれの児童が6年間を通して、必要な情報を出し入れして使う力をつけていくという観点をもって、その年にどのような目標を立てるのか、そのためにどんな活動や場を設定していくかを考えて、授業実践を重ねていきたい。児童一人ひとりがどのように情報を捉え、活用するのかという視点を持ち、日々の授業づくりや児童との関わり方を教師が意識し、実践することが大切になってくるであろう。

また、今年度の研究のまとめとしては、小学部段階における情報活用能力として、ICT 機器に関することは多く挙げてこなかった。しかし、ICT 機器の利

活用について、小学部段階での活用の方法については、課題が残ることとなった。中、高等部での「学習をより効果的にするための ICT 機器の利活用」に向けて、小学部でどのような力を基礎として培っておくべきか、ICT 機器が「情報手段」として活用できるためには、どのような支援・指導をしていくべきか検討をしていく必要がある。

さいごに、来年度においては、「情報活用能力」と各教科等で育まれる資質・能力との関係性を確認の上、「授業づくり」をする必要があると考える。授業時間はあくまで教科等の時間の指導であり、混同しないように意識をもつことが求められる。「情報活用能力」は、教科等横断的な視点に立った資質・能力であることを念頭に置き、授業づくりの過程での検討が必要であろう。

〈参考文献〉

文部科学省（2018）「特別支援学校教育要領・学習指導要領解説 総則編（幼稚部・小学部・中学部）」P.204-209

文部科学省（2019）「教育の情報化に関する手引」P.23,24

山梨県教育委員会（2024）ICT活用チェックシート

別添資料① 〈N.Mさんの検討過程ワークシート〉

指導場面の検討 〈N.M 国語算数〉

<p>〈身に付けさせたい情報活用能力〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ものや人から、自分のやること(情報)を得る。(本見にとっての情報=自分の直接的に関わること) ・(楽しい経験の上で、流れがわかった上で)知っていること・もの、もの・言葉を結びつける。 ・「やりたい」「たのしかった」を共有しようとする。(相手に向かって発信、その良さを感じる) 	<p>〈指導場面〉 ☆指導方法</p> <p>写真の対応(2学期~の新しい教材)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・友達や教師の名前を聞きながら、写真カードをマッチングさせる。 ☆2枚(二人)の白黒写真を提示して、名前を言いながら、1枚(片方)のカラー写真を渡す。 	<p>教材や教師の関わりから、課題の内容(自分のすべきこと)がわかること。</p>
<p>8/28(①指導場面の設定、その際の留意点等)</p> <p>〈情報活用能力に関わって〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・授業の構成において、流れ(教材1つやったら片付けの場所へ片付け→褒める)を繰り返す形にすることで、環境設定をもって、流れを情報として伝えている。 <p>〈教材に関わって〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・日常生活の指導(朝の会、係活動)とのつながりを意識した学習内容の設定。 <p>〈評価の基となる行動〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「わからない」と思うと、教材を投げる様子あり。→本見が教材に向き合っているか(やる事が伝わっているか)の指標になるか。 <p>〈児童の実態〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・斜視がある ・興味関心の強いもの(水筒等)はみようと <p>する。</p> <p>→教材を繰り返し取り組む必要がある。</p>	<p>9/27(②指導場面動画を見て)</p> <p>〈児童の様子から〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分、担任、授業者の顔を概ね正しく置けている。 ・片方にカラー写真が置かれていれば、空いている方へ置く様子あり。 ・左側に置くことが多い、傾向がある。 ・2学期からイヤイヤ期なのか、座っている時間が減った。 ・教材のおわりがわかっているように思う。 <p>〈生活における言葉(「トイレ」等)はわかっている行動する。〉</p> <p>〈情報活用能力に関わって〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・国語算数の時間になったら、自分で席につく。 ・「同じ顔写真を置く」ということはわかっているのでは。 ・写真を置くと、「褒めて」といわんばかりに、抱っこをせがむ。(終わりがわかっているということか) ・集中力がもつ課題の量の調整が必要。 <p>〈教材に関わって〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分の顔はわかっているのではないかと思う。正しく置ける。 →出席調べでも自分の顔写真だけを手に取る様子がある。 <p>改善点</p> <ul style="list-style-type: none"> ・下地は黒いマグネットボード(見やすくすること) ・2枚の写真の区別をつけて、やること(見分けてほしい)がわかるように、マグネットボードは2つ使用する。 	<p>11/19(③動画を見て、今回の検討(記録))</p> <p>〈児童の様子から〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教材は、机の上ではなく、目線の先に提示した。 →書見台を活用するか。(他教科では使っている) ・「自分とその他」という感覚が強い。はじめに「自分じゃない方」を提示すると、どうか。 →まだやったことがない。 ・2枚のマグネットシートに分けて、やること(見分けてほしい)をわかりやすくしてみたが、どうか。 →一つ一つを見ており、見本合わせみたいになっているかも。 <p>〈日常生活場面から〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・人の動きには反応がよく、目で追う傾向がある。(例:友達が離席すると、着席を促すように聞かれることがある。友達がiPadを観ていると傍に来る。) ・友達の顔を覗き込むような動きが出てきた。 ・給食の下膳(同じお皿を重ねて片付ける)が上手になってきたように思う。 →得た情報(方法??)を活かす場面がある。と言えるか…? <p>次回への改善点</p> <ul style="list-style-type: none"> ・提示位置の工夫(パッと見たときに両方が見えるように工夫する。) ・写真に合わせて置くより、かごに入れる方がやる事がわかりやすいか。 <p>もう一方の指導場面(体育)との共通点</p> <ul style="list-style-type: none"> ・声かけをシンプルに(教師の言葉数) ・名前を呼んでから、やることを伝える。 ・音声言語+身振りを大切に ・繰り返し取り組んで流れを作ること(授業の構成の工夫が大切)

指導場面の検討〈1年 N.M 体育〉

<p>〈身に付けさせたい情報活用能力〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ものや人から、自分のやること(情報)を得る。(本見にとっての情報=自分の直接的に関わること) ・(楽しい経験の上で、流れがわかった上で)知っていること・もの・言葉結びつける。 ・「やりたい」「たのしかった」を共有しようとする。(相手に向かって発信、その良さを感じる) 	<p>〈指導場面〉 ☆指導方法</p> <p><u>集団での歩行</u></p> <p>集団を意識しながら校内を歩く、戻ったら自ら着席する。</p> <p>☆みんなのいる方向を伝える</p>	<p>みんながいる方、言葉がけ、で自分の行くべき方向がわかること。</p>
<p>8/28 ①指導場面の設定、その際の留意点等)</p> <p>〈情報活用能力に関わって〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・授業の構成において、流れ(体操→集団での歩行→メインの活動→片付け(全撤去)→リラクスタイム→振り返り)を繰り返す形にすることで、環境設定をもって、流れを情報として伝えている。 ・集団の動き(情報)に気付かせる(獲得)手立て →言葉がけ「集合ー!」 ・評価の基となる行動) <p>〈教科の特性〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ものがあって、場の設定、やる事がわかりやすい。 <p>〈児童の実態〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・集団歩行については、抱っこから始まった。 	<p>9/27 ②指導場面動画を見て)</p> <p>〈児童の様子から〉</p> <ul style="list-style-type: none"> 「今日もここを歩くんだな」と思っていそう。→流れの理解 教室を通り過ぎて、教師の声掛けて振り向いている <p>〈情報活用能力に関わって〉</p> <ul style="list-style-type: none"> 曲がり角で、皆のいる方へ行くようになった。 手を繋がなくとも、教室移動もついてくようになった。 皆が止まったら止まる、進んだら進むようになってきている。 →みんなと一緒に動くんだという集団の動きに気付いている?? 一個の活動が終わったら座ることも、できつつある。 <p>〈教科に関わって〉</p> <ul style="list-style-type: none"> 1学期は事務室止まりであった。体力がついてきた。 	<p>11/19 ③動画を見て、今回の検討(記録)</p> <p>〈児童の様子から〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・広いところ(玄関)へ出ると、情報(進むべき方向である集団)を見失いやすい。 ・「歩く」こと自体には見通しをもっているし、自信をもって楽しそうに歩いている。 ・分かれ道はどうか、進むべき方向(集団)へ進めるか。 →自分で動く前に声をかけられたり、手を引かれたりしている状態。「歩く」時の教師の立ち位置を整理して、改善していく。 ・声かけて戻ってきている。1学期は、教師が壁になるような物理的な支援をしていた。 ・CTを頼りに歩いている気がする。それた友達についていない。 <p>〈他教科では…〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・朝の体育での外周では、手をつないでいる。この様子を受けて、支援方法を考え直す。外周ではグラウンドよりも歩く道がわかりやすいので、この体育で培ってきた力が生かせそう。 <p>〈何故ここまでできるようになったのか…?〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・1学期から継続してやってきたことで、わかってきたのではないか。 ・授業の構成が同じ(主となる活動が単元ごと変わる)だからか。
<p><u>改善点</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ・「集まれー!」で集まる等、本見にとってやる事がわかる“合図”が必要か。 ・集団歩行は、反対周りを取り入れてみることで、本見が集団についてくということがわかっているか、わかるのでは。 	<p><u>次回への改善点</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ・声かけする人を、CTにしぼる。 ・教師の立ち位置の工夫 ・本児の誘導を減らすため、STは後ろにつく(CTへの注目も促せる) 	<p><u>もう一方の指導場面(国語算数)</u></p> <p><u>どの共通点</u></p> <p>国語・算数 参照</p>

別添資料② 〈Y.Sさんの検討過程ワークシート〉

指導場面の検討〈6年 Y.S 日常生活の指導、朝〉

<p>〈身に付けさせたい情報活用能力〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・情報を得る(キーとなるのは「言葉」?) ・得た情報を使う(知った言葉を使う。「この場面ではこうする」と知ったにもやってみる) ・得た情報を使うよさに気付く(知った言葉を使ってみる、知った「この場面ではこうする」としてみる → 得手が反転してくれた、みないよさに気付く) 	<p>〈指導場面〉</p> <p>係の仕事(天気予報係、今日のニュース)</p> <p>新聞の天気予報欄から当日の天気と翌日の天気を調べ、ボードに書く、屋外への活動予定と絡めることも期待できるか。(例: 明日の校外学習いけるかな?) また、梅雨や台風、雪など季節と絡めることも期待できるか。</p>	<p>新聞から、一日の天気等に関する情報を得て、日常生活と結び付ける。</p>
<p>8/28(①指導場面の設定、その他の留意点等)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・新聞がない時に、タブレットの活用も考えられる。 → 情報を得る手段の広がり ・天気予報の情報から、「○○だから、寒いね」「○○だからできるね/できないね」と、得た情報から考える ・言葉や状況とつなぐ 	<p>9/27(②指導場面動画を見て)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・新聞記事の選択では、1面の写真を撮っていたが、最近はある程度バラバラめくって写真を選んでいる様子が見られる。 → 情報を選ぶ、探すという活動をしていると言えるか。 ・天気調べでは、新聞のように情報を得るために使える物や手段がある、ということにふれていることになるか。この力が広がれば、「○○について知りたいから図書室に行く」というようなことにつながるか。 ・自身が天気を調べたことで何か分かる、というような体験ができれば、得た情報を活用すること及び情報を活用した実感を得ることにつながるのでは。 → インターネットからの情報収集は、小学校でも苦労したことがある。新聞はある程度情報がコンパクトにまとまっていて、良い題材かも。 <div data-bbox="486 689 874 947" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>改善点</p> <p>教員が天気に関連する話題を逃さないようにして、本見が得た情報を活用できる場面を作る。(例: 朝の体育「今日はグラウンドで朝の体育ができていますか?」)</p> <p>発表する機会があれば、得た情報を発信する体験になるか?</p> </div>	<p>11/19(③動画を見て、今回の検討(記録))</p> <ul style="list-style-type: none"> ・新聞記事の選択では、適当ではなく、ある程度、関心があるものを選んでるように見える。 ・調べたこと(天気予報調べ)を使う、得た情報を使う、ということをするために、朝の体育は外でできるか、中でやるか、というのを朝の会で紹介している。 ・本人的には、ルーティンとしてやっている、という感じではあるが、何か必要があって本見に調べたことを聞いたり、本見にみんなに対して発表させたり等、少しずつ調べるごとの意味づけをしていくとよいか。 <div data-bbox="896 763 1129 947" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>次回への改善点</p> <ul style="list-style-type: none"> ・天気を調べる、ということへの意味づけをしていく。 </div> <div data-bbox="1134 763 1361 947" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>もう一方の指導場面(国語)との共通点</p> <p>得た情報を使う場面の設定の重要性。</p> </div>

指導場面の検討〈6年 Y.S 国語〉

<p>〈身に付けさせたい情報活用能力〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・情報を得る(キーとなるのは「言葉」?) ・得た情報を使う(知った言葉を使う。「この場面ではこうする」と知ったにもやってみる) ・得た情報を使うよさに気付く(知った言葉を使ってみる、知った「この場面ではこうする」としてみる → 得手が反転してくれた、みないよさに気付く) 	<p>〈指導場面〉</p> <p>なにが書いてあるかな(説明文、物語文)</p> <p>問いと、それに対する答えがある、という状況に慣れる。(目的意識をもって読む姿勢を育てたい) 簡単な説明文を読むことにつなげていく。</p>	<p>文章から必要な情報を読み取る。</p>
<p>8/28(①指導場面の設定、その他の留意点等)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・文章から、情報を読み取る ・教員 A と教員 B の二人の教員についての問題(「○○先生の好きな食べ物はなんですか」等)が書かれたシートを提示し、さらに見える位置にその二人の教員をタイトルとした文章が書かれた紙を提示する。 ・簡単なストーリー、物語から因果関係にふれるのもよいかもかもしれない。 	<p>9/27(②指導場面動画を見て)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教員 A に関する問題を答える際には、「教員 A の話」と書かれた紙を自ら取り、教員 B に関する問題を答える際には、「教員 B の話」と書かれた紙を自らとった。 → 自身に必要な情報を選んで情報を得ようとしている(得ている)、ということをしていると言えるか。 <div data-bbox="491 1585 874 1845" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>改善点</p> <p>今は、2枚の紙のそれぞれ別のことが書かれており、これらから選んでいるが、一枚の紙に2つの情報が載っている形にすると、文の読み取り方(=情報の得方)をさらに学べるのでは。</p> <p>・国語科は、文から情報を得る力を育てたり、目的意識をもって情報を得ようとする姿勢を育てたりするのに適した教材といえるのかもかもしれない。(教科等横断する中で国語の役割…??)</p> </div>	<p>11/19(③動画を見て、今回の検討(記録))</p> <ul style="list-style-type: none"> ・はじめに、A 先生のことを書いてあり、その次に B 先生のことを書いてある文を読んだ。「A先生の好きな食べ物は?」「B先生の好きな食べ物は?」いずれも正しく答えることができた。「前半にA先生のことを、後半にB先生のことを書いてある」ということがわかっていて、書いてある食べ物をとりあえず言ってみたのか…という理解をしているのかははっきりとわからないが、ある程度のアタリはついているよう。 ・まどめの際に、前半部・後半部を囲って「□せせい」と書く、正しく先生の名前を入れている。 ・本文中は「B先生の苦手な食べ物はありますか。」とあり、「苦手な食べ物は?」と聞かれて、食べ物を探していた本見にはなかなか難しそう。やりとりの中で、「ありません」という言葉にいきつき、なんとなく「わかったような、わからないような…」といった感じ。 → このような「わかったような、わからないような…」ようなものをまた別の場面を使う(「～はありません」という言葉を求面でも使う)機会があると、得た情報を使う、ということになる。これは「学び」の大事なポイントだろう。国語的には、言葉を新たに使えるようになり、言葉の意味をより確実に捉えたりすることにつながるか。 <div data-bbox="896 1675 1129 1845" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>次回への改善点</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「～はありません」等の今回の学習の中で「わかったような、わからないような」表現を、別の場面でも活用する。 </div> <div data-bbox="1134 1675 1361 1845" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>もう一方の指導場面(日生)との共通点</p> <p>日生参照</p> </div>

「中学部」 研究グループ

1 研究テーマ

情報活用能力に着目した授業づくり
～情報機器等の利用を含めた情報活用能力の育成に必要な手立てを考える～

2 研究テーマについて

今年度の中学部は14名の生徒が在籍している。1年生が3名、2年生が6名、3年生が5名である。14名が知的単一、主障害が知的障害の重複障害、知的障害を併せ有する肢体不自由、肢体単一と4つの教育課程に基づき学習しており、それぞれの理解度や生活年齢に配慮しながらグルーピングし、指導計画に基づき各授業を行っている。様々な教育課程にて学習しているという実情もあり、学部の中での実態の幅は校内でも広いと感じている。中学部主事、教務主任と10名の担任を合わせ12名の教師で生徒の変容や学習状況などについて共通確認を図りながら日々指導にあたっている。障害特性からの様々な行動、思春期特有の心と体の変化等指導上の悩みは様々あり、生徒とその行動の背景となる家庭事情にも真摯に向き合いながら丁寧な指導を展開しようとしているところである。少人数の学部集団であるが故、学年を超えての生徒同士の関わりも多い。お互いの様子をよく見ており、休み時間にはそれぞれが違う遊びを展開しながらも同じ空間でルールを変えながら共に遊びを展開していくような様子も見られるようになった。

「情報活用能力」については「教科を超えた全ての学習の基盤として育まれ活用される資質・能力」の一つとして掲げられており、その重要性については周知の通りである。

「情報活用能力」はどのようなものかについては様々な捉え方があり、例えば、「身の回りの情報から状況判断をしていく力」「予測不能な社会を生きていくための汎用性の高い力」などが挙げられる。つまり、生徒の学習の中においては視点を持ちポイントを絞りながら見取る必要がある。本校の学校指導重点の中では「基礎的・基本的な知識及び技能の習得と情報活用能力の育成」それを受けて系統的に指導していくため、中学部段階においては「学習場面において情報機器を利用し、基本的な操作能力を育てる。」と中学部指導重点に掲げられている。本研究ではこれらの力を授業の指導場面のポイントを絞り、見取りながら、活用させていくためにどのような授業づくりをするのか考えていくこととした。研究を進めるにあたりまず、基礎的・基本的な知識及び技能の習得のため、これまでの実践の中で活用されてきた紙媒体の教材や具体物等の操作を通じた体験的な学習活動の必要性を教師間で再確認していくこととした。また、ICT活用を含めた情報活用能力について、チェックシートを活用しながら生徒の実態把握を複数の教師の目で行っていきたい。そしてICTを含めた情報機器を「使えない」から「使わない・触らせない」のではなく、指導上のねらいを達成するために「どう使わせるか」について私たち教師が意識を向けながら、その活用について考えを深めていきたい。

3 研究目標

(1) 情報活用能力育成のための手立てを教師間で考察、実践、検証していきながら育

成のための手立てを探る。そして手立てが生徒の情報活用能力育成へ妥当であったか検討し、授業改善を行い、教師の指導力向上を図る。

(2) グループの中で、それぞれの教師の指導実践や生徒の学習の様子を教師間で共有して、行った指導に対しての評価を複数の教師で行い、日々の学習場面や生活場面に反映させることで、生徒に対する深い理解を進める。

4 研究内容及び方法

(1) ICT活用を含めた情報活用能力育成について対象生徒と指導場を設定し、指導の手立てを考察、生徒の変容から手立ての検証を図る。

(2) 設定した指導場面において指導上のねらいを達成するために ICT 機器をどう使うのかについて教師が意識を向け、生徒に適した活用方法について考えを深め情報活用能力育成への手立ての一助とする。

5 研究経過

	日にち	内容
研究日①	5月16日(木)	学部研究テーマ、研究計画・内容の意見交換
研究日②	5月27日(月)	学部研究テーマ、研究内容の確認、グループごとに対象生徒の選定
研究日③	6月6日(木)	チェックシートを用いた実態把握、研究対象とする指導場面における実態把握と共有、指導目標の設定①
研究日④	7月23日(火)	研究対象とする指導場面の実態把握、指導目標の設定② 指導実践の振り返り・次回に向けての手立ての話し合い①
全体研究会②	8月23日(金)	中間報告
研究日⑤	8月28日(水)	グループごと指導実践の振り返り・次回に向けての手立ての話し合い②
研究日⑥	9月20日(金)	グループごと指導実践の振り返り・次回に向けての手立ての話し合い③
研究日⑦	11月19日(火)	グループごと指導実践の振り返り・次回に向けての手立ての話し合い④
研究日⑧	12月25日(水)	グループ別計画による実践のまとめ
研究日⑨	1月17日(金)	学部まとめ、来年度に向けてのアンケート

6 研究実践

(1) 「情報活用能力」について

今年度は生徒の個の課題に焦点を当て「情報機器等の利用を含めた情報活用能力の育成

に必要な手立て」についてまとめていくこととした。次年度は集団のグループにおける「学習の中で必要な情報活用能力、その育成に必要な手立て」についてまとめていくこととしたい。見取りの指導場面を1年ごとに変えて考えていき、年ごとの指導体制での考えをまとめ、在籍している生徒へ還る研究を行うこととした。

第1回の学部研究での意見交換にて本校中学部生徒の「情報活用能力」とはどのような力を指すのかを考えていこうと話し合いを進めた。その中で「生徒の実態差が大きく情報活用能力として定義づけるには幅が大きく難しいのではないか」「情報活用能力の定義については様々な文献等のものが参考になるため、学部研究で取り上げていく必要性がないのではないか」といった意見が挙げられた。

この意見を受け、情報機器をどのように活用すると課題としている個の目標に迫っていくのかについて考えていくこととした。「身のまわりの情報から状況判断ができるようになる力」「予測不可能な社会を生きていくための汎用性の高い力」といった力が挙げられた。中学部の教師で話し合い、中でも『「考えや思い」を生徒自身が他者へ伝える力』つまり「情報発信スキル」について着目し育成していくこととなった。

(2) 指導場面と対象生徒について

見取りを行う指導場面について話し合いを行い、着目したい力が「他者へ発信する力」であることから教科学習グループより少人数で生徒によってより身近であり安心できる集団の学習であることから「日常生活の指導」で行うこととなった。具体的には活動固定化しており形式化される場面である「朝・帰りの会」生徒の自由な活動の中でより思いが出しやすい「昼休み（日常生活の指導）」を中心に見取りを行うこととした。

対象生徒については2年の研究計画であることから研究成果が次年度へ生かしやすい1・2年生がよいとの意見があった。話し合いの中で中学部の日課に慣れ、見通しをもって落ち着いて学習している2・3年生から2名挙げることにした。2名とも情報の受信、発信方法について課題をもつ生徒である。2名の生徒について6月からもう一度実態把握を行い、今できていることと課題について再考した。実態から課題を導き出し2学期始業に合わせ、実践を開始しPDCAサイクルを11月まで行った。以下、実践についてまとめる。

対象生徒	MT（2年生 男）
実態把握	<ul style="list-style-type: none"> ・発語がなく、身振り、サイン、筆談等でコミュニケーションを取っている。 ・難聴である。 ・聞く経験が不足している。 ・情報を周りから得ようとする力が少ない。知りたいという気持ち、関心が少ない。自分が言いたいことだけを伝えて満足する場面が多く、他者とのコミュニケーションのやりとりが一方的になりがちである。 ・知っている言葉が少ない。

	<ul style="list-style-type: none"> ・抽象的な言葉の理解が困難である。 ・文字（ひらがな、カタカナ、漢字など）を音声で認識することが困難である。 ・ICTの操作はできる。※インターネット検索、アプリの使用など ・便器で排便することが難しく、自宅で自分からオムツに履き替えてオムツで行っている。排尿は小、大便器で行うことができる。
実態から導き出される指導すべき課題	<ul style="list-style-type: none"> ・簡単な言葉を用いて、2語文で他者に伝えられるようになると良い。 ・語彙を増やす。（動詞、名詞） ・周りのことに興味、関心を持てるようになると良い。 ・会話のやりとりを楽しいと思える経験を増やす。 ・わかることを増やす、わかることが増えることによって知りたい気持ちが増えていく。
設定した指導場面	<ul style="list-style-type: none"> ・日常生活の指導（朝の会、帰りの会）
指導の経過 1次（学部研③、④位の時期での取り組み）	<ul style="list-style-type: none"> ・個別の指導計画を見ながら実態把握した。ねらいが高かったので生活科1～3段階に下げて計画を立て直した。 ・自分から気付いてやるのが難しい。 ・小学部の時はうごきのことばの本を基に、物事の事象を言葉とイラストで示すことができた。
2次（学部研⑤、⑥位の時期での取り組み）	<ul style="list-style-type: none"> ・実態に沿って話し合いを進めた。（個別の指導計画参照） ・朝の会では始まりの時間に合わせて、自分から友達に声をかけることが出来ている。教師からの促しがきっかけで、友達に声掛けできるようになった。朝の会前のルーティンとなっている。 ・簡単な言葉を用いて、2語文で他者に伝えられるようになると良い（身振り、筆談など）。 <p>目標の再設定</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ICTの有効な使い方を本人もまだわかっていない。iPadを使いコミュニケーションで使えたら良い。 ・自分が使う言葉等がパターン化されがちである。例えば質問「どこ？」に対して、繰り返し学習して覚えた質問（例：住んでいる市はどこ？）であれば答えられるが、ちがう言葉を「どこ？」の質問に含めると答えられなくなる。パターン化されることを崩すため、他者との会話のやりとりをする経験を増やしていく等の取り組みが必要であると考える。 ・他者とのやりとりを設ける機会として、朝の会の流れに変化をつけていけると良い。例えば朝の会において、クラスみんなで話をするような内容の項目を追加する等。 ・経験したことを言葉に置き換えていく。（どの授業でも） ・本人の課題からみていくとICTを第一に持っていない。（補助手段）そ

	<p>の場その場でコミュニケーション手段を選んでいけると良い。</p>	
3次(11月現在)	<ul style="list-style-type: none"> 朝の会、帰りの会で予定や目標を発表する際や授業での号令の際に、ドロップタップを活用しながら自分自身や他者に分かりやすく(イラスト、音声で)伝えることを行っている。 ICT機器(iPad)をコミュニケーションツールとして活用することを目的としているが、現状としてICT機器(iPad)をコミュニケーションの目的として自分から活用しようとする場面が日常生活の中では見られない。授業の中では見られ始めた。 iPadを使い相手に伝えようとしたが、音声途中のままiPadを閉じてしまうことがあった。iPadを介してやりとりすることは難しい。 やりとりを本人が楽しいと思えるようにしていきたい。伝えたい、伝わった経験を増やす。 他者とのコミュニケーションの際、本人が従来のコミュニケーション手段として使っている身振り、サイン、筆談等で他者とのやりとりを楽しむ経験を積んでいくことに重点を置くことが良いのではないかな。 	
生徒の様子と有効であったと思われる手立て、教材等	手立て	生徒の様子
	<ul style="list-style-type: none"> 朝の会、帰りの会において、iPad(ドロップタップ)を活用して授業の予定を発表する。 	<ul style="list-style-type: none"> 1日の授業予定について本人がドロップタップで音声を流した際、それを聞いて復唱しようとする生徒が見られた。周りの生徒にとっては音声が聞き取れて分かりやすかった等の良い効果をもたらしたが、本人にとっては相手にしっかり伝えられたという意識があまりなかったため、他者とのコミュニケーションのやりとりとしては少し不十分であったと思われる。
	<ul style="list-style-type: none"> 朝の会において「※みんなのはなし」の項目を追加し、実施した。※テーマ(例:昨日食べた夜ごはん)を日直が決め、そのテーマに沿って皆で話す。 朝の会の「みんなのはなし」において、友だちと筆談したりiPadを介してやりとりをしたりする。 	<ul style="list-style-type: none"> 本人が日直の際、自分でテーマ(すきなアニメはなに?)を決めることができた。そのテーマを友達に投げかけてやりとりを行った。しかし、友達の話の話を遮って次に進もうとする等、他者との会話のやりとりに課題が見られた。本人に対し教師が身振りや筆談等で丁寧に支援し、それを見た友達の一人が身振りや筆談で助けようとする

		<p>る場面が見られた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・朝の会の中では本人が進んで iPad を使おうとする様子はあまり見られなかった。筆談や身振りでのやりとりがスムーズであり、本人や周りにとってもコミュニケーションのやりとりとして分かりやすかった。
<p>考察 まとめ</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ ICT 機器 (iPad) を、他者とやりとりをする (自分の思いを伝える、相手の反応を感じる、相手の話を聞く、相手の話に応える) 意識を高めるためのコミュニケーションツールとして活用することを目的とし、研究を進めてきた。しかし、取り組み当初は iPad を自分からコミュニケーションの目的として活用しようとする場面が見られず、他者とのやりとりのために使うものとしての意識が向かなかった。 ・ コミュニケーションに必要な言葉の数が少ないため、言語理解などの指導が必要である。そのため現時点において ICT 機器 (iPad) をコミュニケーションツールとして活用するよりは、日常生活に必要な言葉の数を増やす (インターネット、アプリのドロップタップ等を活用) ためのツールとして授業等の指導の中で活用することに重点を置く方が良いのではないかと考える。また昼休みにおける余暇時間においても、教師の支援を介して iPad を活用出来ると良い ・ みんなに伝わるコミュニケーション手段を獲得できると良い。筆談でのやりとりを行った際に、文字を書くことと同時にイラストを示すことが本人にとって有効であった。 ・ 他者とのやりとりを楽しむ手立てとして、ICT 機器 (iPad 等) にこだわる必要はないが、必要に応じて iPad を利用しながら、今後それをコミュニケーションツールの一つとして活用していくきっかけになると良い。 ・ 教科学習の中で挙手して教師を呼び、自ら iPad を取り出し、発言する場面が多く見られ始めた。発言内容は学習の中で得たことを確認するようなことや授業の振り返りで「楽しかった!!」と自分の気持ちを伝えようとすることが多い。(特に自分の気持ちが大きく動いたときにこの行動が見られた。) ・ 授業にてホワイトボードにグループの生徒の考えを記すと、自ら前に出てペンをとり自分の考えを記す場面が見られた。 	

対象生徒	TK（3年生 男）
実態把握	<p>言葉の表出が増えてきている。</p> <p>文が定型文ではなくなってきた。</p> <p>確認行動が多い。</p> <p>学校生活で困ったことを言語化できるようになってきている。</p> <p>言葉での発表が上手になってきている。</p> <p>これまでの学習を実際の生活の中で生かせるようになってきている。</p> <p>3年生ゆえの余裕や自信がでてきている。</p> <p>会話の中で、本人の思いを言語化する場面が増えてきている。</p> <p>教師や友達とのやりとりの中で、間を怖がる様子がある。</p>
実態から導き出される指導すべき課題	<p>発表場面で、みんなに共感してもらえる嬉しさを感じさせたい。</p> <p>自信をもたせたり、自己肯定感を高めたりしていきたい。</p> <p>聞き返される経験を減らしてあげたい。</p> <p>話す内容について、項目立てて考えられるようになると、やり取りをする上での引き出しが広がるのではないかな。</p> <p>より豊かに言語でのやり取りができるようになってほしい。</p>
設定した指導場面	<p>日常生活の指導</p> <p>土日の出来事から伝えたいことを考え、国語数学でまとめて火曜日の朝の会に発表する。</p> <p>何をポイントにして伝えるかをまとめる。</p>
指導の経過 1次(学部研③、④位の時期での取り組み)	<p>ワークシートで話す内容をまとめた。</p> <p>モスバーガーに行ったことを伝えたいと思い、口頭で教師に伝えることができた。「モスバーガー」と書いていたため、誤字の修正をした。</p> <p>朝の会で発表を行った。</p> <p>徐々に定着しており、現在は「きのうのはなし」として朝の会に位置付けている。</p>
2次(学部研⑤、⑥位の時期での取り組み)	<p>夏休み明けに夏休みの思い出を、資料なしで発表する場面を設定した。</p> <p>他の生徒に対しての教師の質問に同調する場面が見られた。(友達のホテル、修学旅行とどう違ったか)</p>

3次（11月現在）	<p>伝えたいことや記したいことをはじめに質問し、書くことを決めたあとはアプリの立ち上げ、画像検索、保存などを生徒自身が行えるようにした。</p> <p>メモアプリでの取り組みと紙媒体の課題で「いつ」「だれが」「どこで」「なにをした」等の単語を並び替えて文章を作る取り組みを行った。</p>	
生徒の様子と有効であったと思われる手立て、教材等	手立て	生徒の様子
	<ul style="list-style-type: none"> ・日誌に一文を手書き、それをもとに発表する。 	<p>メモは「モスバーガーに行きました」だけだったが、他に食べたものや美味しかったという感想も話していた。</p> <p>他の生徒の発表に対しては、疑問を持ち、聞くことができている。徐々に定着しており、現在は「きのうのはなし」として朝の会に位置付けている。話す内容のバリエーションや、メモにない補足事項をその場で付け加えたりすることができている。</p>
	<p>目標を再設定</p> <ul style="list-style-type: none"> ・いつ、どこで、だれと、なにをした（項目数は3～5つ）について、自分で（支援具を活用して）項目を意識して話す内容を考えられる。 ・教員が聞き取り、疑似的な音声入力になることで、本人の入力の不自由さを補うことができる。 ・Class notebookを活用し、本人は自分の端末で確認しながら教師がワークシートに記入する。 	<p>夏休み明けに夏休みの思い出を、資料なしで発表する場面を設定した。</p> <p>教師の共感に対して嬉しそうにしていた。</p> <p>自分で感じた楽しかったことや印象に残ったことを話すことができた。</p> <p>他の生徒に対しての教師の質問に同調する場面が見られた。（友達のホテル、修学旅行とどう違ったか）</p>
<p>iPad「メモ」アプリを使って音声入力をした。</p> <p>「だれと」の要素を話す場面を設定した。</p>	<p>本人が自分の経験を覚えており、表出できるという経験が重ねられれば、伝えたい気持ちが大きくなっていくのではないかと。なにより本人が楽しそうである。</p> <p>自分が文を作って考えることが</p>	

		<p>自己肯定感や自尊心の育成につながる。</p> <p>音声入力のみではなく自分で手入力したい内容については入力を促した。</p> <p>画像を添付し、より伝わりやすい文書を作ることを意識させていった。メモアプリでの取り組みと紙媒体の課題で「いつ」「だれが」「どこで」「なにをした」等の単語を並び替えて文章を作る取り組みを行った。</p> <p>アプリ操作が見守りでできるようになってきた。</p> <p>教師の見守りや簡単な質問にて自分から話したい内容を考え入力を行うことができた。50音を正しく理解しているからか、文字入力の際にスムーズに次の文字を探したり、予測変換から誤入力を減らしたりすることができた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・プリントでの取り組みで「いつ…あとはだれがだ」と口にしながら単語を探して並び替えようとする姿が見られた。
<p>考察 まとめ</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・CTとのやり取りの中で、コミュニケーションの経験を重ね、自分の発表に対する様々なフィードバックを経験できた。こうした内容によって、コミュニケーションの意欲が高まっていると考えられる。一方、授業中の発言では「正しい答えは何か」を考えてしまい、意欲が優先される場面ではないと考えられる。社会参加を考える上で非常に大切なコミュニケーションの一步になったのではないか。(例：体育での思いやりのある一言、本生徒とかかわっていて気持ちの良い一言が増えてきている) 50音表の定着については、実際にiPadを使用することで理解していたことがこちらへ伝わった。 ・機器の活用については、音声入力からキーボード入力(予測変換込み)発展した。情報機器を使うことにより文字を書く負担を軽減でき、音声入力、予測変換を活用することでより正しく自分の言葉を入力して表現できるようになったのではないか。また、文章に画像を添付することにより自分自身が伝えたいことを自身が再確認でき、他者にもより分かりやすい方法で伝えることができるようになった。 ・本単元に対して、題材設定が有効であった。自分の考えに情報を肉付けしていく作業を行い、自分の思いを他者に伝える力や文章を構成する力が高まった。情報発信スキルの基礎的な能力を高めることにつながった。情報の収集では画像を収集したり、必要な情報を検索したりできるようになった。メモアプリと紙媒体、口頭での教師とのコミュニケーションを通じ、自分の伝えたいことをうまく文章化することにつながったと考えられる。発表の内容がパターン化せず、自分が話したいことを考えられている。語彙の増加(例：「気を取り直していき 	

	<p>ましよう」の発言)が見られる。知識を結び付ける力がついてきていると感じる。50音表が定着していることによって、入力の際にどの文字がどこにあるかを見つけられる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・授業中に発言を求める際には、スムーズに発言をすることはまだ難しい印象がある。→学級の中では、発言が受け入れられる安心感があるのかもしれない。伝わる楽しさや、自分の発言をきっかけに会話が弾むことに対する楽しさを感じられるようになってきているのかもしれない。 ・自分の経験したことを具体的に振り返ることができるようになってきている。また、自分の思いを、資料を活用することで詳しく伝えられるようになってきている。確実な理解や力につながってきていると感じる。自信をもってコミュニケーションに望んでいる。朝の会の場面でできていることが、より般化されていくことに期待したい。
--	--

7 研究のまとめと今後の課題

研究のまとめを行うにあたり情報機器を使用する中で

- ① 使用させる場面 (どの場面が適していたか)
- ② 指導すべき課題に対する手立ての成果
- ③ 教科学習へつなげるための視点

について2名の指導実践を振り返り考えていくこととした。

MT (2年生 男)	
使用させる場面	<ul style="list-style-type: none"> ・日常生活の中では身振りと筆談でのやり取りは即興性があり使いやすかった。 ・教科学習の中では iPad を使い (メモ機能のようなアプリ) 自分の考えを記すことができるようになってきている。
成果	<ul style="list-style-type: none"> ・コミュニケーションに必要な語彙が少ないため、言語理解などの指導が必要である。そのため現時点において ICT 機器 (iPad) をコミュニケーションツールとして活用するよりは、日常生活に必要な言葉の数を増やす (インターネット、アプリのドロップタップ等を活用) ためのツールとして授業等の指導の中で活用することに重点を置きながら指導に当たる。 ・場面ごとにより正確に本人の考えや意見を発進できるような支援を行った。身振り、イラストを用いこちらの言いたいことがより明確に伝わるようにしていった。お互いの言いたいことが正しく伝わっているか再確認することも必要であった。
課題	<ul style="list-style-type: none"> ・発信方法として発話のみでなく情報機器を活用し選択して

	伝える場面を設定するのがよい。
--	-----------------

TK（3年生 男）	
使用させる場面	・個別に学習する時間に使用することが有効であった。本人のペースで使用でき、落ち着いて学習することができた。
成果	<ul style="list-style-type: none"> ・情報機器を使うことにより文字を書く負担を軽減でき、音声入力、予測変換を活用することでより正しく自分の言葉を入力して表現できるようになり、発表場面で、みんなに共感してもらえる嬉しさを感じるようになった。 ・文章に画像を添付することにより自分自身が伝えたいことを自身が再確認でき、他者にもより分かりやすい方法で伝えることができるようになった。 ・情報機器を使い、話したい内容について、形式化し整理しながら項目立てて考えられるようになったことで、より豊かなやり取りができるようになった。
課題	・学習の中で自信をもって発言することが課題となる。慣れている教師と友達との関係性の中でできることを違う場面でもできるようになることが課題となる。できたことを実感させていき自己肯定感を高めることが必要。また、知識の定着を本人が実感できるように授業の中で「前にやったことを覚えているかな？」等の振り返りを行っていくことが必要である。

以下に今年度の成果と課題について3点挙げる。

（1）生徒の表現方法の選択肢を設定する。

1年間情報発信スキルについて2名の実践を通し、考えてきた。その中で2名とも特に「自分の知識（言語）を使い、他者へ発信する力」について成長が見られた。発語に課題のある生徒が発信する際にどうすれば他者へ伝わるか情報機器を使いながらやりとりを重ねた。その中で生徒自身が「こうすれば伝わった」と経験の中で気づき、同じ場面を教師が設定することでどのように発信するかを自ら考えて伝えようとする姿が2名とも見られた。また、情報機器のみではなく身振り、筆談などの発信方法を教師とのやり取りの中で使いながらその良さ（より伝わりやすいと感じる）を知ることで様々な方法で伝えようとする様子が見られ始めている。生徒が発信する際にその生徒にとって何が最適かを考えていく中で「発信方法の選択肢を設定すること」さらに「発信する場面に応じ臨機応変に発信方法を選び、使っていく力を生徒につけさせること」が必要であることが考えられる。また、発信する場面を教師が意図して設定し、そのやり方について枠組みを作り、発信方法を導くことも必要である。発信方法を構造化し、見通しをもって安定した気持ちで発言

できるようにしていき、その方法に慣れたころに違う方法を提示することが必要である。

(2) 実践についての見取りの評価

情報機器の利用を含めた実践であったが、生徒の実態や変容を動画やエピソードを集めていくことで成長を見取ってきた。生徒の見取りの方法について学部研究のように時間を設定し実践内容を伝えあい複数の教師の目で見えていく必要を強く感じた。また、情報活用能力のどのスキルを育成するかの見取りの視点をもっていることも重要であると改めて分かった。さらに教師間のみではなく客観的に評価できるような体系表などのツールの必要性も感じた。

(3) 家庭を含めた生活につなげていくこと

最後に、学校での実践をこれからの生活へ般化していくことが課題として挙げられる。特別支援学校で課題となる「学校ではできるが…」という視点である。特に発語に課題のある生徒について本当に伝えたいことが何かを受信する側が正確に見取ることが難しいことがある。生徒が学んだことをアプリや画像等に残した記録を残しておき、端末を持ち帰り家庭へフィードバックすることが考えられるかとの意見も出された。毎日の取り組みとなると難しい面があるが、単元の終わりや、学期末に行うことが現在の中学部の中では可能ではないかとの意見が挙げられた。今年度の研究での取り組みを踏まえ、まずは学校での取り組みを構築していくことが重要である。そして今後は家庭との連携のために学習の記録を生徒自身が残し、振り返ることができること、その振り返りを家庭でも行えるとよいと考える。

(4) 次年度へ向けて

以上のように情報機器を利用しながら2名の生徒の「情報発信スキル」について考えていった。発語に課題のある生徒については情報機器の活用が非常に有効であった。その反面、生徒の課題について「どのように伸ばしたいか」、情報機器を使用して「どの力を伸ばしたいか」を教師が明確に設定する重要性もあった。次年度については教科学習の中で必要な情報活用能力、その育成に向けての手立てを考察していく。前述に挙げられた3点を念頭に置き、来年度の中学部生徒にとって必要な情報活用能力は何か、どの力を育成していきたいかを考え、手立てについて検証していけるとよい。

「高等部」研究グループ

1 研究テーマ

卒業までに身につけさせたい情報活用能力の整理

2 研究テーマについて

今年度高等部には29名の生徒が在籍している。1年生が5名、2年生が14名、3年生が10名である。高等部は知的障害単一、主障害が知的障害の重複障害、知的障害を併せ有する肢体不自由の教育課程で学習を行っている。本校高等部への進学にあたり、中学部から進学してきた生徒、地域の中学校から進学してきており、幅広い実態の生徒が在籍している。

情報活用能力については、学習の中で、自らICT機器などを用いて得た学習内容に関する情報を自分なりにまとめて表現することができる生徒や、学習内容に関する情報を得るためには教師の手助けが必要であり、取捨選択などが難しい生徒、視覚的、聴覚的な情報に向きあうことに支援が必要な生徒まで幅広い実態の集団である。また、授業の中でもタブレット端末などのICT機器を扱う場面が増えており、様々な授業で情報活用能力の育成を行っている。授業のみでなく、生徒にとっては、情報機器は身近な存在であり、卒業後社会に出た際にも、仕事や余暇活動の中で情報機器を扱うことが増えることが予想される。

そこで、今年度の高等部の研究では、高等部の生徒にとって、卒業までにどのような情報活用能力を身につけておく必要があるか検討・整理を行っていく。山梨県教育委員会特別支援教育・児童生徒支援課から出されている既存の体系表である「ICT活用能力実態チェックシート（第3版）」を用いて、それぞれの段階の生徒が卒業時にどこまでできるようになっているとよいのかについてまとめ、それをもとに授業の単元計画を立てる。単元計画の中に、どのように情報活用能力を育成する内容を扱うかについても明記し、それをもとに授業を行い、授業の振り返りを行ないながら、行った手立てが適切であったか、改善が必要かなどについてまとめ、授業づくりを行っていきたい。

3 研究目標

(1) 身につけさせたい情報活用能力について、授業の単元計画の中で扱う内容を検討し、授業づくりを行い、情報活用能力を育成するための手立てを検討する。

(2) 授業実践後に手立てや目標について適切であったかどうかを検討し、授業改善につなげ、教職員の指導力と専門性の向上を目指す。

4 研究内容及び方法

(1) 卒業までに身につけさせたい情報活用能力の検討
・「ICT活用能力実態チェックシート」を用いて、生徒を療育手帳の等級ごとに分け、そのグループごと、卒業までにどのような情報活用能力を身につけているとよいか検討する。

(2) 社会／自立活動の授業での検討

情報活用能力について手立てや授業づくりを行うため、授業のなかで調べ学習や調べた内容を発表するなど、ICT機器などを用いて情報収集や発信を行う機会が多い社会科を対象教科として選定した。

- ・上記でまとめた内容をもとに、社会の授業の中で取り扱う情報活用能力について検討する。
- ・授業の単元計画を作成し、単元計画に情報活用能力について明記し、授業後にどのような手立てが適切であったかについて検討し、改善を図る。授業グループ毎に情報活用能力の視点を含めて単元計画を作成し、授業の振り返りを行う。

5 研究計画

	日にち	内容
研究日①	5月16日(木)	学部研究テーマ、研究計画・内容の確認など
研究日②	5月27日(月)	検討グループの決定 卒業までに身につけさせたい情報活用能力の検討①
研究日③	6月6日(木)	卒業までに身につけさせたい情報活用能力の検討② グループごとの検討内容の共有
研究日④	7月23日(火)	対象授業の決定 各学習グループで単元計画の作成①
研究日⑤	8月28日(水)	ICT研究授業についての検討 各学習グループで単元計画の作成②
研究日⑥	9月20日(金)	各学習グループで単元計画の作成② 各学習グループの学習内容の共有
研究日⑦	11月19日(火)	学習グループ毎に授業の振り返り① 授業の様子についての共有
研究日⑧	12月25日(水)	学習グループ毎に授業の振り返り② 学習グループ毎のまとめ
研究日⑨	1月16日(木)	学部まとめ、来年度に向けて

6 研究実践

(1) 卒業までに身につけさせたい情報活用能力の検討

情報活用能力について、学習指導要領総則には「生徒の障害の状態や特性及び心身の発達の段階等を考慮し、言語能力、情報活用能力(情報モラルを含む。)、問題発見・解決能力等の学習の基盤となる資質・能力を育成していくことができるよう」との記載がある。また、「教育の情報化の手引き-追補版-(令和2年6月)第2章」には情報活用能力について定義された内容が記されている。教育の情報化に関する手引から、情報活用能力について、「情報手段を適切に用いて情報を得」る力や「情報を整理・比較」する力、「得られた情報を分かりや

すく発信・伝達」する力、「必要に応じて保存・共有」する力、「情報手段の基本的な操作」を行う力、「プログラミング的思考，情報モラル等に関する資質・能力」と捉えて研究をすすめていくこととした。

卒業までに身につけさせたい情報活用能力を検討するための指標として、山梨県教育委員会特別支援教育・児童生徒支援課から出されている既存の体系表である「ICT活用能力実態チェックシート（第3版）」を用いることとし、生徒を実態毎のグループに分けてそれぞれの段階の生徒にどのような力が必要か検討を行った。検討にあたっては、校内の学習グループでの実態分けではなく、療育手帳の等級ごとに生徒を分け、その中で必要な力について検討を行った。以下にグループ毎にまとめた内容を示す。

① 療育手帳 A-1 グループ（生徒3名）

卒業までに身につけさせたい情報活用能力	
知技	(生徒 A) ・興味をもって画面に注目する。 ・画面にタッチしスワイプできる。 ・タッチペンを使用して画面を操作する。 (生徒 B) ・興味をもって画面に注目する。 ・画面にタッチしスワイプできる。 (生徒 C) ・画面に触れると音や曲が流れることがわかる。
思判表	(生徒 A、C) ・発信された情報に気づき選択する。 (生徒 B) ・発信された情報に気づき表現する。
学	(共通) ・自分で操作して達成感や満足感を得ることができる。 ・タブレットに興味をもち使おうとしている。

○ ICT機器の活用について

自ら積極的に ICT機器を活用しようとする姿は見られず、音楽を聴くことや画像を見る等の受け身的な使用が主な生徒である。あえて ICT機器を活用したデジタル教材を使用するよりも、アナログ教材を活用することで理解につながる生徒である。そのため、ICT機器の活用については、教師が使用場面を精選することが大切である。授業の様子を撮影し振り返りの際に動画や写真を見せるなどといった使い方で使用することは有効であると考えられる。

② 療育手帳 A-2 グループ（生徒4名）

	卒業までに身につけさせたい情報活用能力
知技	(生徒 D) ・タブレットのどこを押せば好きな曲が流れるか、わかる。 (生徒 E) ・タブレットのどこを押せば遊べるか、わかる。 (生徒 F) ・検索アプリがわかる。 ・タブレットを使用して、意思を表示することができるようにする。 (共通) ・情報を大まかにとらえることができる。
思判表	・タブレットに表示された情報に気付き、注目する。
学	・自分で操作して、満足感を得る。

I C T機器の利活用に限らずに、教室掲示等からの情報を読み取ることができるかどうか考える必要がある。I C T機器から読み取れるようになることも大切であるが、日常生活の中で教師から提示された教材から情報を読み取る力が大切である。そのため、I C T機器を使用せず、情報を収集し活用していく方法を考える必要がある。

A-2 グループの生徒にとって、日常的に用いる日付や曜日などの情報を自ら得ることができることが大切である。掲示物やカレンダーなどの活用ができるようになると、週や時間などで固定された活動内容などがわかり、見通しをもって作業することができる。そのため、自立活動や個別活動の指導で情報を集める能力を育てていく必要がある。

自分から発信、表現しようとする力や発信を受け止めて理解する力、指示や話を受け取る、収集する力が高まるとよい。

③ 療育手帳 B-1 グループ (生徒 8 名) ④療育手帳 B-2 グループ (生徒 1 4 名)

B-1、B-2 グループについては、「I C T活用能力実態チェックシート」上にまとめて掲載した(図 1、図 2 次ページ参照)。チェックシート上、実線で囲んだ部分が療育手帳 B-1 グループ、点線で囲んだ部分が療育手帳 B-2 グループである。

B-1 グループの生徒にとっては(4)、(5)が主になっているが、チェックシートの内容では(1)～(3)は大枠になっている。そのため、このグループではその部分をさらに整理して必要な情報活用能力について当てはめていく必要がある。

B-2 グループの生徒にとっては、(7)の段階が主になっている。図 1 (1) ⑧については分類が難しく、段階に沿った内容を検討することが難しかった。

(2) 社会／自立活動の授業での検討

(1) で検討した内容をもとに、2学期の社会科の学習の単元について計画を立て、授業を行った。グループごとの単元計画とまとめについて以下に示す。(単元計画については別資料参照)

①自立活動 (A組)

(a) 2学期単元計画

「季節を感じよう」、「家事に挑戦しよう」の単元で学習を行うことを確認した。「季節を感じよう」の単元では、生徒が好きな場面でボタンを押して写真を撮ることを目標とした。「掃除」では、水拭きと乾拭きの違いを感じることを、生徒が活動したことを受けて誰かが喜んでくれることがわかること、五感で感じた情報を適切に処理することを目標とした。

自立活動の学習であるため、感覚を広げる、感覚を得る、感覚を高める、人との関わりをもつことなど、個別の目標で行っていく。それぞれの生徒の目標については、生徒の実態に応じて設定した。

I C T機器を活用することで、生徒が情報収集をする手助けになるのではないかと考える。受信については、教師がI C Tを用いて、生徒に情報を入れる方法をとることができるのではないかと。発信を行う事も可能であるが、生徒の実態として、I C Tを用いた発信を行う必要はない。

生徒にわかりやすく提示するために実物と映像を組み合わせ活用し、情報を受け取るための手段として音楽や映像を通してI C T機器を活用していくこととした。グループとして、実体験を通して確かめながら学習する段階である。実物に触れることを通して、実物に興味や関心をもつことができる授業を行う必要がある。

(b) 授業についての振り返り

「家事に挑戦しよう」の単元では、モップやほうきを使ってごみを集めたり塵取りに入れたりという活動を行った。教師と一緒にごみを拾う生徒もいたが、「素材に触れる」といった目標にとどまる生徒もいた。

「季節を感じよう」の単元では、落ち葉に触れたり、紅葉を見たりする活動を行った。生徒の実態として、同じ場所で季節ごとに写真を撮ることで、季節の変化を感じることができるかという部分に疑問が残った。

(c) 単元を通してのまとめ (成果と課題)

単元の学習を通して、生徒の実態としてI C T機器を活用することには難しさがあることを改めて確認することができた。生徒自身が活用するのではなく、教材として、教師が提示し、情報を提示するためのツールとして有効に活用することができた。一方で、季節の変化について生徒に伝えたい際に、I C T機器を用いてイラストや写真を提示して伝えることは難しく、不向きであった。生徒に視覚的な情報を提示したい場合は難しかったが、聴覚的な情報を提示する場合には有効であった。

生徒の実態に応じてI C T機器の活用の方法が変わってくる。このグループの生徒にとっては、五感を活用して学習を進めていく必要のある実態であった。情報を得る手段として、

I C T機器の活用が有効であるかどうかを検討して活用する必要がある。

②社会 A グループ

(a) 2 学期単元計画

社会科「自然災害から人々を守る行動」の単元から、身近に起こる災害として火事と地震について取り扱うこととした。生徒の実態を考慮し、映像、写真、音など視覚や聴覚といった五感を使って授業が展開できるように意識した。

導入として、火事や地震とはどんな状況のものを映像や写真を見て確認した。また、生徒自身がイメージする火事や地震の写真をインターネットから選択する活動をした。そして、各災害から自分の身を守るためには、どのような行動があるかを教師と一緒に実体験をした。学習を通して安全に避難できる方法を身に付けることを目的として取り組んだ。

教科等	社会 A	単元名	災害から自分の身を守ろう	指導時期 指導時数	2 学期前半 9 時間
単元 目標	知識及び技能		災害の種類によって取るべき行動が変わることがわかる。		
	思考力・判断力・表現力等		校内の非常持ち出し袋や避難経路等を確認し、防災グッズについて調べたり考えたりする。		
	学びに向かう力・人間性等		災害が危険であることを理解し、緊急時に適切な行動を取る態度を養う。		
情報活 用能力	知識・技能		どの情報を活用するか選ぶことができる。(1・2・3) 身近な物事へ関心をもつことができる。(1・2・3)		
	思考・判断・表現		話を聞いたり、写真等を見たりして情報を得る。(1・2・3) 入力した文字や文章を注目したり読んだりする、(0)		
	学びに向かう力・人間性等		うまくいかないときに繰り返し取り組もうとしている。(1・2・3)		

(b) 授業についての振り返り

授業を展開していく中で、「写真」と「イラスト」など提示する物を変えることで注目が変わる生徒や、映像に着目することが難しい生徒でも、音には反応を見せるなどのことがわかった。

本グループは、自分から情報を収集することが難しい生徒なため、基本的には教師が情報を用意し、選択肢の中から選べるようにしていった。選択肢から選ぶことによって、生徒も自信をもって答える場面が増え、獲得した知識や技能を発信することにも繋がることとなった。

(c) 単元を通してのまとめ (成果と課題)

生徒一人ひとりによって、「情報」の捉え方が異なったため、デジタルや紙媒体など、個に応じた教材を用意したり、提示方法を工夫したりした。それにより、生徒が積極的に発言し

たり、行動したりすることに繋がり、理解が深まっていることを教師が実感することができた。また、提示方法の工夫や発問する順序等においては、他の教科にも活かすことができた。学習内容について、生徒の発言等、意思の発信に課題のあるグループなので、どのように情報を伝えるか、どのように発信させていくかは今後も課題となってくる。

また、ICT活用能力実態チェックシートでは、「0」の部分に属する実態の生徒たちであるが、「0」の部分は大枠であるため、今後は細かく整理していく必要がある。グループの生徒の実態として、情報を得て活用するための前段階である。基礎的基本的な知識・理解を進めるとともに、質問されている意図を読み取ったり理解したりする力が必要である。

このグループの生徒にとって、「知識・技能」も大切ではあるが、「学びに向かう力・人間性」が大事になってくる。知りたいことや必要な情報を自分で見つけようとする力やうまくいかない時に繰り返し取り組もうとする力、自分の意思を表現できるようにする力などが必要である。

③社会 B グループ

教科等	理科社会 B	単元名	地域の安全を考えよう	指導時期 指導時数	2 学期 6 回
単元 目標	知識及び技能		地図の情報の読み取り方や、それぞれの地町村の避難場所を知る。		
	思考力・判断力・表現力等		地図の情報を読み取り、学校周辺や生活している市町村の避難場所がなぜそこにあるのか考える。		
	学びに向かう力・人間性等		地図を使ったグループワークや調べ学習に積極的に取り組む。		
情報活用能力 情報活用能力	知識・技能		タブレットや本などの媒体から情報を収集する。(4) 収集した情報を絵や図、写真などを用いてまとめる。(5)		
	思考・判断・表現		提示された情報から、必要な情報を探し出す。(4) 声の大きさなどに気を付けて調べたことを発表する。(4)		
	学びに向かう力・人間性等		調べるためのキーワードなどを自分で考えて情報を見つける。(3)		

(b) 授業についての振り返り

6 時間の設定で単元を計画した。単元の始めに、グーグルマップを用いて地図の要素（国道、高速道路、山、川、線路）について確認を行なった。その要素を学習した上で、ハザードマップを取り扱い、ハザードマップ上の洪水や土砂災害について学習した。また、ハザードマップ上で家の周辺の地図を見て、近くの避難所や災害が起こりそうな場所について確認した。単元のまとめでは、自分たちの居住する地域について、ハザードマップを見て災害が起こりそうな場所を探し、グーグルマップのストリートビューの機能を用いて同じ場所を見つけ、その周辺を写真から山の近くであるから土砂災害の危険があるなどについてグループ活動を通してまとめ、発表を行なった。情報活用能力としては、タブレット端末を用いて情

報を得ること、学習内容やタブレット端末から得た情報を整理し、発表することを目標として取り組んだ。

(c) 単元を通してのまとめ (成果と課題)

地図の学習を行う上で地図の要素やハザードマップ上の災害の見方について、丁寧に学習したことで、自ら地図やハザードマップの読み取りを行うことができる生徒が増えた。単元を通して、毎時間の始めに繰り返し地図の要素などについて確認することを通して、地図の要素などについての知識が定着し、グーグルマップやハザードマップから情報を得ることができた。また、教師がハザードマップの検索の方法を提示したことで、タブレットを操作し、ハザードマップのページを出し、必要な情報を得ることができた。ハザードマップとグーグルマップを見比べ、災害の危険がある場所を教師の手助けを借りながらストリートビューを見ることを通して、山や川の付近で土砂災害や洪水が起こりやすいことを確認し、グループでまとめて発表することができた。

今回の単元では情報活用能力の目標として、タブレット端末を用いて情報を得ること、学習内容やタブレット端末から得た情報を整理し、発表することをあげて学習内容を計画した。繰り返し地図の要素やハザードマップ上の災害の見方についての学習を行なったことで、正しい知識を身に付けさせることができた。一方で、グーグルマップとハザードマップを見比べた際に、生徒が同じ場所の地図であることがわからず、教師が教えてしまったことや、ハザードマップ上の災害についても、生徒が自分でタブレット端末を操作してハザードマップを見て、「山の近くであるから土砂災害で危ない」といったことを考える時間を確保できず、知識を教え込むような学習が多かった。生徒がどの程度、タブレット端末で得た情報を元に自分で考えることができるか、自分で考えるためにはどの程度時間が必要であったかについて詳しく把握した上で授業を計画する必要がある。

③社会Cグループ

教科等	社会 C	単元名	自然災害と自分にできること	指導時期 指導時数	2 学期後半 7 時間
単元 目標	知識及び技能	身近な地域の自然災害について調べ、災害から身を守るための行動と災害から人々を守るための活動を知っている。			
	思考力・判断力・表現力等	地域のハザードマップから安全な場所や危険な場所を読み取り、場面ごとに、どこに避難するかを考え、グループや全体に共有している。			
	学びに向かう力・人間性等	調べたことを振り返り、災害時や現在に備えとして、自分や家族を守るために何ができるのかを考えようとしている。			
情報活用能力	知識・技能	知りたい情報を組み合わせて検索できる。 効果的なプレゼンテーションの方法を知っている。			

情報活用能力	思考・判断・表現	情報をもとに意見を出すことができる。 表現方法を相手に合わせて選択し、相手や目的に応じ、自他の情報を組み合わせて適切に表現する。
	学びに向かう力・人間性等	必要に応じて自分からタブレットなども活用しようとしている。

(b) 授業についての振り返り

日本の災害について調べる学習において ICT を活用して情報収集を行った。テーマを提示して、そのテーマに応じたキーワードで検索することはできたが、検索した情報の中から必要な情報を抜き出すことができず、すべて抜き出してしまいう生徒が多かった。必要な情報を見やすいようにまとめられた生徒は数名であった。数多ある情報の中から自分に必要な情報を選択して抜き出すことに難しさを感じている生徒が多い様子であった。

URL を打ち込んで、必要な情報ページにたどり着くよう学習を設定した。はじめは、URL の入力に難しさを感じつつも理解して取り組めた生徒もいた。災害に対するシミュレーションゲームとハザードマップの読み取りを設定した。シミュレーションゲームのタブレットの操作は問題なく行えていた。ハザードマップの土砂災害の部分の読み取りについては、地図から自宅を見つけることができている。色が示すものや地図の中から避難所を見つけ出す活動に難しさを感じる生徒もいた。

QR コードの読み取りは経験している生徒が多くスムーズにできた。噴火、洪水、土砂災害など様々な災害を想定して行った。地震だったらどのような災害が発生するか考える活動を行なった。土砂災害の中でも動画、ハザードマップなど様々な情報から災害を想定できる生徒もいた。どの資料を活用していくか選択することが難しい生徒がいる一方、読み取ることができる生徒もいた。

(c) 単元を通してのまとめ (成果と課題)

生徒の実態差はあるが、生徒に様々な情報収集の手段を伝えることができたことで、これからの生活の中で、生徒自身が自分に合った情報収集の方法を選択することが期待できる。一方で情報を集めることはできるが、教師が提示した情報を要点を絞って集めることは難しかった。自分が調べたい情報だけを得られる力を身につけられるとよいか。

情報活用能力について、教師自身の基本的な内容の理解、解釈のすり合わせが必要であった。また、指導方針を固めた上で、授業計画を進めていく必要がある。加えて、生徒の情報活用能力に関する実態把握を丁寧に行なった上で授業計画を立て、適切な指導を行えるとよい。教科等横断的な視点を持ち、他の教科の学習の中でも ICT 機器を活用する機会を増やしていくことが必要である。

7 研究のまとめと今後の課題

(1) 今年度の研究の成果

「情報手段を適切に用いて情報を得」る力や「得られた情報を分かりやすく発信・伝達」する力についてそれぞれグループの実態に応じた支援や手立てを検討することができた。情報の受け取り方として、自らICT機器を活用して情報を得る実態のグループや教師からの手助けを受けて情報を得る実態のグループ、ICT機器を使わずに、感覚的なものを大切にする必要のある実態のグループなど、情報活用能力に関する生徒の実態を改めて把握することができた。その上で、どのような手立てで学習を進めることで身につけさせたい情報活用能力の育成を図ることができるかについて、社会／自立活動の学習で有効な手立てを検討することができた。

どの実態の生徒についても、学習の中では特に情報をどのように受け取るか、相手に伝えるかの力が重要であることが各グループで検討され、その力をつけるための学習を計画して行ってきた。視覚的な支援として基本的なことであるが、生徒の情報活用能力の実態について、丁寧に読み取ることとともに、実態に応じた適切な手立てを設定する必要がある。

自立活動グループや社会Aグループでは、どちらの力についても、その力を身に付けるための前段階が大切であることが検討された。物に触れたり聞いたり見たりすることで、感覚的な情報を得、それに対して生徒が反応することが大切であった。また、教師が生徒の実態からその生徒にとって受け取りやすい方を検討し、写真やイラストなどから必要な情報を得られるよう教材の工夫を行っていた。情報活用能力を身に付ける上で、学に向かう力・人間性の育成が大切であることがわかった。自ら知りたいことを見つける力や繰り返し取り組む力を育てていくことが学習内容の理解や情報活用能力を高めるために必要であることが分かった。

社会Bグループや社会Cグループでは、情報活用能力として「情報手段を適切に用いて情報を得」る力、「得られた情報を分かりやすく発信・伝達」する力について主に検討された。

「情報手段を適切に用いて情報を得」る力としては、タブレット端末で調べ学習を行う際、必要な情報を取捨選択することが難しい生徒もいるため、必要な情報が出てくるウェブページを指定するために、URLやQRコードを用いたり、検索ワードなどを提示したりすることを通して、必要な情報を読み取ることにつなげることができた。要点を絞って情報を集めることが難しかったため、自分が調べたい情報が何か理解し、調べたい情報に絞って調べる力を身につける必要がある。また、「得られた情報を分かりやすく発信・伝達」する力としては、学習内容を確実に理解できるよう、毎時間の始めにこれまでの学習内容を確認することによって、正しい知識をもとに情報を収集し、教師や友達と共同してまとめ、発表することができた。

(2) 今後の課題

卒業までに身につけさせたい情報活用能力の整理として研究を進めてきた。「ICT活用能力実態チェックシート」を用いて卒業までに身につけさせたい情報活用能力を整理したが、実際に授業を行った上で改めて検証することができなかった。高等部の実態の生徒につい

て、改めて、どのような情報活用能力が卒業時まで身に付けてほしいかについて、今回まとめた内容やその他の指標を用いながら整理していく必要がある。

(3) 来年度に向けて

「ICT活用能力実態チェックシート」を用いてまとめた卒業までに身に付けさせたい情報活用能力を引き続き活用し、整理を続ける必要がある。今年度の検討と授業実践を受けて、特に「情報手段を適切に用いて情報を得」る力や「得られた情報を分かりやすく発信・伝達」する力が学習において大切な部分であることがわかった。情報活用能力の中の情報を得る力や情報を発信する力に焦点をあて、授業づくりの一環として、「情報手段を適切に用いて情報を得」る力や「得られた情報を分かりやすく発信・伝達」する力を育成するためにどのような手立てを用いるか、また、どのような学習内容を設定するかについて検討してけるとよい。高等部として、卒業する際に「情報手段を適切に用いて情報を得」る力や「得られた情報を分かりやすく発信・伝達」する力をどの段階の生徒にどこまで身に付けさせておく必要があるかについて「ICT活用能力実態チェックシート」を用いてまとめていけるとよい。

〈参考文献〉

文部科学省（2018）「特別支援学校教育要領・学習指導要領解説 総則編（幼稚部・小学部・中学部）」

文部科学省（2019）「教育の情報化の手引き-追補版-(令和2年6月)第2章」

山梨県教育委員会（2023）「ICT活用能力実態チェックシート」

「寄宿舍」研究グループ

1 研究主題

余暇の充実を目指して
～情報活用能力を生かした寄宿舍生活～

2 研究テーマについて（設定の理由）

今年度は高等部生6名が寄宿舍で生活している。2年生が3名（男子1名・女子2名）、3年生が3名（男子1名・女子2名）である。全員が昨年度から継続して寄宿舍を利用しており、慣れた環境の中で生活している。しかし、コロナ禍の影響で活動が制限されてきたことへの慣れや各舎生の実態などもあり、舎生同士の自然なやりとりが少なくなり、余暇の過ごし方がパターン化されている。なつまつりやクリスマス会など年間行事として実施している舎生会活動では、係ごとの話し合いや準備、活動を通してお互いかかわっている様子が見られるが、日々の生活では、興味関心がそれぞれ異なっていることもあり、集団生活という環境の中では舎生同士でかかわることが少ない。

昨年度は『舎生の主体性をはぐくむために～舎生会活動を通して経験を広げる実践～』の研究テーマのもと舎生会役員2名を事例対象として舎生会活動に焦点をあてて実践を重ねた。舎生会活動に焦点をあてたことで企画・運営する方法を舎生会役員が学び、経験を広げることができた。事例対象以外の舎生も公共機関の利用や買い物など経験することができた。PDCAサイクルシートを活用したことは、課題点や目標などを指導員間で共通確認することができ、指導する上で有効であった。一方で主体性をはぐくむには、経験により得られた知識や自信の積み重ねが必要であり、時間をかけていくべきであると再確認することができた。

今年度、本校の校内研究テーマとして『情報活用能力』が示された。昨年度の研究テーマとして取り上げられた舎生会活動の経験から学んだことを役立てながら情報活用能力を生かすことで余暇の過ごし方を考えられるようにしたい。その際、余暇について選択肢を増やし、舎生の主体的な行動を引き出すことが余暇の充実を図ることに繋がるのではないかと考え、本研究主題に設定することにした。寄宿舍生活の中で情報活用能力をどのように使っているのか分析し、余暇の充実について検証していきたい。

3 研究目標

- (1) 寄宿舍における情報活用能力とはどのようなものか整理する。
- (2) 整理した情報活用能力をもとに舎生の理解を深めながら指導方法を探る。
- (3) 余暇に関する情報を得たり、活用したりしながら過ごし方の幅を広げる。

4 研究内容及び方法

- (1) 寄宿舍における情報活用能力や余暇の過ごし方について舎生の実態を整理する。
- (2) 整理した実態をもとに個別の課題をすり合わせ、指導方法を検討する。
- (3) 情報活用実践シートを使用しながら実践を行う。

5 研究計画

	日にち	内容
研究日①	5月17日(金)	・グループ研究の方向性の確認 ・寄宿舎における情報活用能力と余暇について ・文献研究
研究日②	5月24日(金)	・余暇の過ごし方や興味関心の整理 ・情報活用に関わる実態把握
研究日③	6月14日(金)	・情報活用実践シートについて ・実践に向けて
研究日④	7月19日(金)	・情報活用実践シート「一人一事例実践」 ・今後の取り組みについて
研究日⑤	8月27日(火)	・情報活用実践シート①②
研究日⑥	9月20日(金)	・情報活用実践シート①②
研究日⑦	10月18日(金)	・情報活用実践シート③④
研究日⑧	11月22日(金)	・情報活用実践シート③④ ・寄宿舎研究の成果と課題
研究日⑨	12月20日(金)	・寄宿舎研究のまとめについて
研究日⑩	1月17日(金)	・寄宿舎研究のまとめについて ・次年度に向けて

6 研究実践

(1) 寄宿舎における情報活用能力

情報活用と余暇について考えるにあたって寄宿舎生活の中で情報活用能力がどのように関係してくるかを把握するために『特別支援学校教育要領・学習指導要領解説総則編P208』『小学校各教科版情報活用能力ベーシックの概要』『ICT活用能力実態チェックシート(第3版案)』『特別支援教育情報活用能力を育む授業作り P17～19』を参考にしながら情報活用能力(基本的な操作・情報モラル・情報セキュリティ・収集・整理・保存・発信・伝達・共有・比較・プログラミング・統計)を使っている場面やその内容について考えた。下記は、話し合いの時に出席された意見である。

基本的な操作	パソコンやiPad・スマートフォン・テレビなどのICT機器を使って情報を集める時に操作方法を知る必要がある。
情報モラル 情報セキュリティ	ICT機器を使う時には、インターネット上の危険性を知り、モラルを守って使う必要がある。
収集	ICT機器を使って天気予報や電車の遅延情報、活動内容の検索などをして情報を得ている。また、他舎生や指導員との対話や人が話しているのを聞くことで情報を得ていることもある。
整理 保存	今までの経験を思い返したり、調べたことをメモしたりすることがあたるのではないかと。また、話し合いで出た意見をホワイトボードに書いて他舎生の意見を整理している。それをカメラで撮って記録することで保存している。活動後に感想文を書いていることも活動内容や自分の考えを整理している。
発信	話し合いで自分の意見を伝えることや日常生活の中で会話を通し

伝達 共有	て他舎生と情報を共有している。活動の時には、感想文を書いて発表することで自分が頑張ったことや楽しかったことを共有している。
比較 統計	意見が分かれた時には、多数決をとって票数を計算し、比べている。
プログラミング	計画を立てる時に何時にどこに行き何をするのか、何を何人分用意するのかなどを考えていることがあたるのではないかと考えることができた。

以上のことから情報活用能力のすべての要素（基本的な操作・情報モラル・情報セキュリティ・収集・整理・発信・伝達・共有・比較・保存・プログラミング・統計）が寄宿舍でも関係していることを共通確認することができた。また、様々な場面で複雑に関係し合っているのではないかと考えることができた。

（２）舎生に身に付けさせたい力

余暇の充実に向けて舎生に身に付けさせたい力を検討した。以下は、話し合いの時に出した意見である。

- ・情報を集めることは得意だが、伝えることが苦手な舎生が多い。思っていることを周囲に言えないことが多いため、発信する力をはぐくみたい。
- ・コロナ禍で一人の時間が増え、舎生同士のやりとりが減ったように感じる。また、家庭では同年代の人とかかわることが少ないと思うので、人とかかわりを大切にしながら家庭ではできない経験をしてほしい。
- ・情報の共有は、指導員に対して行うことが多い。舎生同士で相談し合い、もっとコミュニケーションをとってほしい。
- ・指導員が教えるのではなく、舎生が自分で調べて情報を得てほしい。生活の中で気になることを調べる習慣をつけてほしい。

センター研修311『令和6年度ネットトラブル対応について学ぶ研修会スマホ・ネット時代を生きる子どもたち』にて『余暇には「休養」「気晴らし・娯楽」「自己成長・自己啓発」の3つの機能があり、どう人生を楽しむか、仕事だけでなく余暇を楽しむ力を育成することが大切である。楽しいことを探し、楽しむことの幅を広げていきながらやりたいことを選択肢を複数持つておくことが大切』ということだった。卒業後の生活を自分自身で組み立て、人とかかわりを豊かにするためにも大人に頼らず自分で調べることや発信する力をはぐくむこと、舎生同士のやりとりを意識しながら働きかけていくことを確認した。

（３）情報活用と余暇の実態調査

研究対象舎生を決めるにあたり、全舎生の情報活用と余暇の実態調査を行った。生活の中で何を使ってどんなことを調べたのか、その時の様子はどうだったか、余暇の過ごし方について記録し、それをもとに情報活用能力と余暇の傾向や課題について検討した。以下は、その一例である。

利用した情報機器	内容
i P a d	イラストを描くための画像調べ 段ボール工作・フェルト手芸・折り紙の作り方
テレビ	データ放送のミニゲーム・天気予報
本	生き物の特徴について
パソコン	動画鑑賞・パソコンアプリ・なつまつりの遊び調べや景品探し

余暇の選択肢が多い舎生は、それぞれの興味関心に合わせてパソコンや i P a d ・テレビ・スマートフォン・本・掲示物・舎生同士や指導員との会話などを通して様々な情報を得ながら活動的に過ごしていた。また、人が集まりやすい談話室で過ごすことが多く、話をしていても情報量が多かった。反対に余暇の選択肢が少ない舎生は、一人で過ごすことが多く、生活がパターン化されていて情報を得る機会が少なかった。特に自閉症と診断され、こだわりが強い舎生ほどその傾向があった。そのため、生活指導や余暇支援の中でも情報活用の意識や視点をもちながら舎生にかかわることが大切であると共通確認した。

(4) 情報活用実践シートを活用した一人一事例実践

実践に向けて昨年度の研究で使用した P D C A サイクルシートと P D C A サイクルシートを参考にして新たに作成した情報活用実践シートのどちらを使っていくか検討した。情報活用ということをより意識するのであれば、情報について明記した方がよいのではないかと考え、今年度は情報活用実践シートを使っていくことにした。また、各舎生の情報活用の段階を考慮し、それぞれに合ったねらいや目標を定めつつ実践を重ねていくことにした。寄宿舍は生活の流れの中での指導であること、何気ない声かけでも常にねらいをもってアプローチしていることから日々の指導を情報活用実践シートに残すことで実践が積み重ねるのではないかと考えた。そこで指導員が一つずつ事例をあげ、情報共有しながら各舎生の課題について考え、全体での実践に向けて事例対象を決めることにした。

情報活用実践シート

対象舎生	舎生 A (舎生 B・舎生 D も興味を示した)	実施日 題材	6月12日～6月26日 楽しめることを増やす
目標	○評価できるように具体的に 他者からの遊び情報や提案を受け入れながら、違った過ごし方を知ってほしい。		
ゴールイメージ	レゴブロック・ミニ四駆・ビーズアート・あやとり・ミサンガ		
関係する 活用能力	基本的な操作 情報モラル 情報セキュリティ 収集 整理 保存 発信 伝達 共有 比較 プログラミング 統計		
育成したい 情報活用能力	○今回の実践で特に育成したい活用能力は？ 収集		
指導内容	○実施期間ですることとは？ ・本人が好きそうな遊びグッズを舎生に置き、一緒に遊ぶことを誘ってみる。 ・本人が興味を示さず、他舎生が興味を示した場合には、他舎生がやっている姿を見せる。		
評価	(1) 目標に対する評価は？ ・指導員からの提案を受け入れて違った遊びを経験することができた。 ・その場で「楽しかった」と言っているも1回きりで終わることが多く、継続が難しいと感じた。 (2) 指導内容の検証 (情報活用の様子) ・工作系の遊びグッズを中心に様々なことを提示した。ミニ四駆はすぐに興味を持ち、指導員と一緒に作る事ができた。2回目以降は誘っても行かなかった。1回目は真新しきからやってみて、自分がイメージしているものと違ったのかもしれない。 ・レゴブロックは、誘っても興味を示さなかった。舎生 D が「やってみよう」ということで、談話室でやっているとその様子を見た舎生 A が気にするようになり、「やってみよう？」と再度、声をかけるとやりだした。次の日も併走してすぐに「レゴやる」と言って談話室でやっていた。 ・ビーズアートは、興味を示さなかった。レゴブロック同様、舎生 D が興味を示して談話室でやっていたため、その様子を意図的に見せたが、無関心だった。舎生 B は舎生 D に誘われ、一緒にやっていた。 ・ミサンガは、舎生 B と指導員が作っているのをチラチラ見ているので誘ってみるとやりだしたが、少しすると飽きてしまった。 ・あやとりは、父母から好きということを知ったため、誘ってみるとやりだし、指導員にもやり方を教えてくれた。他の遊び道具と一緒に部屋に置いているが、時々一人でやることがある。 (3) 次の課題、改善点は？ ・言葉だけの説明ではどんな遊びかをイメージしにくく、やってみようという気持ちが生まれにくいかもしれない。また、一つのことに対して飽きやすいので、提示の方法を色々試しながらできるとよい。 ・DVD や CD、本以外に自分からやってみようという気持ちは今のところ見られないが、誘われてやってみれば楽しめることもあるので、まずは様々なことをやってみることができればよい。		

図 1

挙げられた事例

- ・ 寄宿舍にある余暇グッズを知る
- ・ かすみそうの芽を調べる
- ・ 楽しめることを増やす 【図 1】
- ・ 寄宿舍を季節に彩る (梅雨・七夕)
- ・ 余暇の過ごし方を選択する
- ・ 推し活について学ぶ
- ・ イオンモールの行き方を考える

舎生名	課題となる 情報活用能力	課題内容
舎生 A	収集	<ul style="list-style-type: none"> ・興味関心の幅が狭く、過ごし方の選択肢が少ない。 ・自室で過ごすことが多く、他舎生とのかかわりが少ない。
舎生 B	収集 保存 伝達	<ul style="list-style-type: none"> ・苦手意識や面倒という気持ちから調べることを避ける。 ・人から聞いたことや自分で得た情報を留めておくことができない。 ・言葉を知らず、間違えて覚えていることが多い。 ・自分の想いを言葉にすることが難しい。 ・複数のことを同時に処理することが難しい。
舎生 C	共有	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の興味関心に特化していて情報収集に偏りがある。 ・指導員に対して話をするが多く、他舎生とかわることが少ない。
舎生 D	整理 伝達	<ul style="list-style-type: none"> ・日常生活の中で発信力に欠ける部分はあるが、余暇に関しては積極的に発信できる。 ・情報を正しく理解することができない時がある。 ・調べたことや自分の気持ちをまとめられず、伝えることが難しい。
舎生 E	収集	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の興味関心に特化していて情報収集に偏りがある。 ・興味関心の幅が狭く、過ごし方の選択肢が少ない。
舎生 F	収集	<ul style="list-style-type: none"> ・手指の過敏があるが、自分から手を出す機会が増えて触ろうという意欲が見られ始めている。

上記の課題内容をもとに検討した結果、舎生 A と舎生 B を事例対象に設定することにした。舎生 A は、図 1 の事例の時に指導員から遊びの提案を受け入れていつもと違った過ごし方が経験できたため、次は自分で楽しめることを探す機会を作ってみてはどうかと考えた。舎生 B は、同じことをして過ごしていることが多いが活動的ではあることがわかったため、きっかけがあれば余暇の幅が広がるのではないかと考えた。また、伝達する力にも課題があったため、自分の気持ちを伝えるための場を設定しながら実践を行うことにした。

(5) 事例研究

舎生 A 高等部 2 年

① 実態の概要

入舎 5 年目。昨年度に引き続き研究対象である。興味関心の幅が狭く、余暇は自室で CD を聞いたり、DVD を見たりして過ごすことが多い。自己中心的な部分が多く、自分はどうしたいという思いの強さから他者の意見を受け入れることが苦手である。また、見通しがもてないことや待つことが苦手でイライラしてしまうことがある。自分から他者とかわりをもつことは少なく、かわることがあっても言い方が一方的で自己完結してしまう。買い物では、目的の物だけを買って、他の商品は見ようとしない。話し合いでは、他者の話を聞いているだけでは集中力が続かずに飽きてしまい、終わることを望むような発言

があるが、見通しをもたせることで最後まで参加できるようになってきている。視覚的な情報が入りやすいため、指導に取り入れている。

② 実践 I 【ダイソーでの買い物～余暇で使えるものを買おう～】

実践 I では「楽しめることを増やす」「興味関心を広げる」ことを目標にした。情報活用能力については、遊び道具を知るという観点から「収集、する力を意識し、視覚情報を与えながら取り組むことにした。

情報活用実践シート①			
対象学生	舎生 A	実施日 題材	9月 9日 外出活動
目標	○評価できるように具体的に 楽しめることを増やす。 興味関心を広げる。		
ゴールイメージ	ダイソー商品		
取り扱う情報	買い物報告会		
関係する 活用能力	基本的な操作 情報モラル 情報セキュリティ 収集 整理 保存 発信 伝達 共有 比較 プログラミング 統計		
はぐくみたい 情報活用能力	○今回の実践で特に育成したい活用能力は？ 収集		
指導内容	○実施期間ですることは？ ・事前学習では、店でのルールやマナーのみを伝える。商品については、事前学習を最小限にし、当日、見てじっくり決めるようにする。 ・色々な商品棚を見る機会を作る。(様々な商品棚を見るような働きかけや工夫をする。)	・事前に他舎生の話をよく聞くように伝えておく。報告会后、他舎生が買ったものの中で興味を持ったものや楽しそうと思ったものを聞く。 ・全員が買ったものの画像を舎内に掲示し、いつでも確認できるようにして余暇の広がり促す。	
評価	(1) 目標に対する評価は？ ・自分で興味のあるものを探したことが外で遊ぶことや普段やらないことを経験することに繋がった。それを楽しんでいる様子もあった。 ・全ての商品棚を見たことが購入するものを途中で変える(取捨選択)きっかけになり、それが興味関心を広げることに繋がったと思う。 (2) 指導内容の検証(情報活用の様子) ・今までは、買い物素早く終わらせるために店内をよく見ずに選ぶことが多かったが、フロアマップや店内看板など視覚情報を与えながらミッション形式の方法を取り入れたことで、全ての売り場を見て回ることができた。 ・売り場では、商品を見た上で「ここにはない」と言っていたり、途中で買いたいものを変えたりしていた。また、選んだ商品の中から金額の範囲内で取捨選択して買う物を決める経験ができた。 (3) 次への課題、改善点は？ ・見比べることや取捨選択できていることが分かったため、選択する場面を増やしながら普段の生活にも繋がられるとよい。	(1) 目標に対する評価は？ ・他舎生の発表を聞いた上で楽しそうと思った遊びを3つ選んでいた。 ・舎内の掲示物で誰が何を買ったかを見ていることが何度かあった。その際、声をかけてみたが遊ぶまでは至らなかった。 ・自分が買ったもの(グライダー)で遊ぶときに他舎生を誘うように促したが行動に移さなかった。 (2) 指導内容の検証(情報活用の様子) ・他舎生の発表した内容を紙に書かせるようにしたこと整理しながら情報を得ることができた。また、書かせるという作業をしたことで聞くだけでなく、飽きずに最後まで集中して参加できた。 ・全舎生が買ったものを写真に撮って視覚的に掲示したことは有効的で、何度か見ていることがあった。しかし、他舎生と一緒に遊んだり、借りてまでやってみることはなかった。 (3) 次への課題、改善点は？ ・意図的に「遊ぶ遊びを体験する日」を設けながら、他舎生から遊び道具を借りたり、一緒に遊ぶなどの体験を増やせるとよい。	

図 2



図 3 フロアマップ



図 4 案内看板

まず、ダイソーにどのような商品があるのか知る必要があると考えた。自分本位な性格であることを考慮しながら目的の物以外の売り場も見ることが必要だと考え、事前指導ではフロアマップ(図3)や案内看板(図4)を提示して全ての売り場を見てから買う物を決める見通しをもたせた。また、楽しみながら店内を見ることができるよう売り

場を3つに分け、各売り場から「1つ以上楽しめることを探そう」とミッション形式を取り入れることにした。今までの買い物では、買う物を即決して会計に向かっていたが、視覚情報を与えながら事前指導を丁寧に行ったことで30分かけて全ての売り場を見ることができた。また、途中で商品を変更し、予算の中で取捨選択する経験ができた。情報活用能力を活用したことで新しい遊びの情報を得ることに繋がり、今まで経験のない遊び（グライダー）を体験して「楽しかった」と感じることもできた。しかし、他舎生を誘って一緒に遊ぶことや他舎生が買った物の中で鉄砲・虫のカードゲーム・恐竜のプチブロックが楽しそうという気持ちがありながらそれらを体験するまでには至らなかったため、意図的に他舎生と遊ぶ機会を作る必要があると感じた。

③ 実践Ⅱ【外で遊ぼう～鬼ごっこ・しっぽとりゲーム・野球～】

指導員間でアンケートをとり、実践場面の検討を行った。集団生活という環境を生かし、外で遊ぶことが楽しいと感じることができるよう全員で遊ぶ機会を作ることにした。実践Ⅱでは、「外で遊べる活動を知る」「他舎生と遊ぶことを経験し、楽しさを感じる」ことを目標にした。自室で過ごすことが多い本生にとって新しい遊びを知るという観点から「収集」する力を意識し、ワークシートを活用したり、外で遊べることについてのプレゼン大会を実施したりしながら遊びの情報を得られる機会を作ることにした。

情報活用実践シート③

対象舎生	舎生 A	実施日 題材	11月18日 プレゼン大会・外で遊ぼう
目標 ゴールイメージ	○評価できるように具体的に 外で遊べる活動を知る。	他舎生と遊ぶことを体験し、楽しさを感じる。	
取り扱う情報	障害者スポーツ・スポーツ種目・外で遊べること・集団で遊べること		
関係する 活用能力	<div style="display: flex; justify-content: space-around; text-align: center;"> 基本的な操作 情報モラル 情報セキュリティ 収集 整理 保存 </div> <div style="display: flex; justify-content: space-around; text-align: center; margin-top: 5px;"> 発信 伝達 共有 比較 プログラミング 統計 </div>		
はぐくみたい 情報活用能力	○今回の実践で特に育成したい活用能力は？ 収集		
指導内容	○実施期間ですることは？ ・調べ学習では「みんなと一緒に外でできること」「障害者スポーツ」などテーマを与えて本生が何を遊ぶか様子を見る。また、複数の活動案を調べ、比べるようにして選んだ理由を聞くようにする。 ・全員での話し合い（プレゼン）では、メモとるようにして他舎生の意見も意識させる。	・事前にルールや順番を待つことについて確認する。また、活動中、他舎生に意識が向くように他舎生の様子をよく見ておくように伝えておく。 ・活動終了後、他舎生のどんな様子が印象に残ったか、他舎生と一緒に遊んでどうだったかについて感想を聞く。	
評価	(1) 目標に対する評価は？ ・調べ学習を取り入れたことで外で遊べる活動を知ることができた。また、プレゼンで他舎生の発表内容をメモするようにしたことで様々な遊びを知ることができ、意識することにも繋がった。 (2) 指導内容の検証（情報活用の様子） ・調べ学習では、テーマを与えたことで主体的に調べるきっかけになった。また、テーマをたよりに自分で調べて様々な活動を知ることができた。 ・調べ学習やプレゼン大会、ルール決め、振り返りにおいてそれぞれワークシート使ったことで見直しを持たせながら視覚的に情報を整理し、比べることができた。 (3) 次への課題、改善点は？ ・今回の経験を日常生活に生かすためにも調べ学習やプレゼン大会で出した活動内容を舎室に掲示して今後の余暇に繋げていく。	(1) 目標に対する評価は？ ・他舎生と一緒に初めてのことで経験の少ないことをして遊ぶことができた。遊んでいる最中もよく笑っていて楽しそうな様子がうかがえた。 (2) 指導内容の検証（情報活用の様子） ・事前に設定していた順番を守ることや他舎生をよく見ることは概ねできていたが、遊び自体のルールの提示が曖昧だったので理解が難しかった。しかし、ルールを堅苦しくなかったことが気軽に遊ぶことにも繋がった。 ・遊び中に度々声掛けして他舎生の様子を見るように意識づけさせた。何をしている時にどのような表情だったのかをワークシートを使いながら振り返った結果、一人一人違う場面や表情を答えていて十分意識していた様子がうかがえた。 (3) 次への課題、改善点は？ ・今後も様々な遊びを経験しながら他舎生と遊ぶ機会をもとるとよい。「普段と違うことをする日」を火曜日に設定したため、活用していく。	

図 5

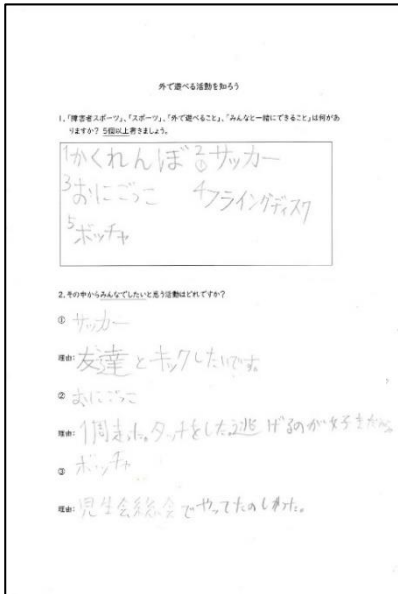


図6 調べ学習

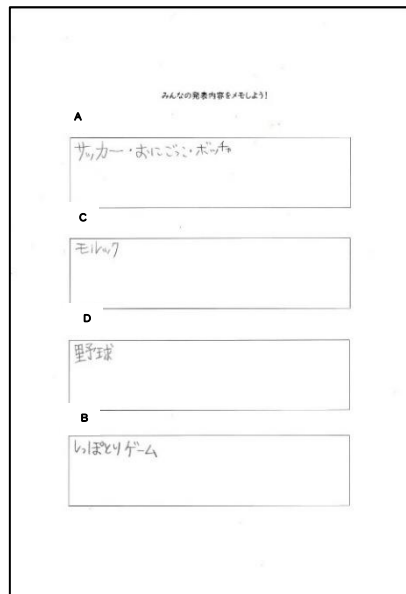


図7 プレゼン大会のメモ

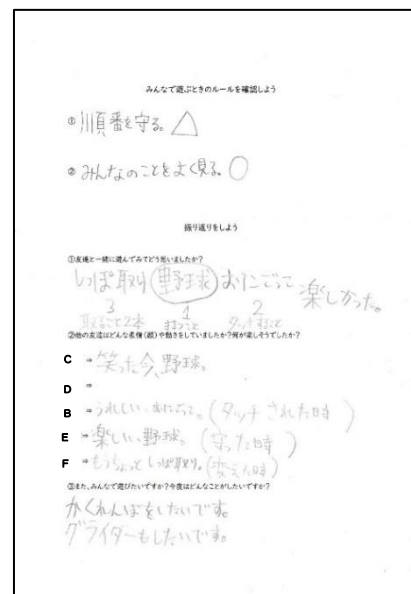


図8 ルールと振り返り

事前指導ではワークシート（図6）を提示し、iPadを使って外で遊ぶことや障害者スポーツなどについて調べ学習をした。調べ学習では、サッカーや鬼ごっこ、ボッチャを選び、「〇〇さんと一緒にチームでキックしたい」「〇〇さんをタッチしたい」と言って他舎生を意識する発言や「児生会総会でやって楽しかった」と学校の経験に基づく発言があった。プレゼン大会を行った時には、他舎生の発表からも情報を収集できるようにメモ（図7）をとるようにした。イヤマフを取って他舎生の意見を聞く姿が見られ、情報を得たことでプレゼンの前後で自分の考えを変えていることがあった。実践当日、鬼ごっこをしている時には「待てー」と言って追いかける場面やよく笑っている姿が見られた。野球は、初めての経験だったと思うが、「野球が一番楽しかった」「今度はかくれんぼやグライダーをしたい」と振り返りの時にワークシート（図8）に書いていたことから今まで選択肢になかった遊びを意識させることができた。また、他舎生の様子についてどのような場面が印象に残っているか聞いたところ、守った時やタッチされた時など場面を明確に伝えていて周りを意識できた様子がうかがえた。外で遊ぶことの情報収集し、他舎生を意識させながら一緒に遊びを経験することで楽しいと感じることができ、余暇を広げるきっかけを作ることができた。

④ 舎生Aのまとめ

視覚情報を与えて見通しをもたせることを2回の実践で取り入れた。途中で飽きてしまうことやイライラすることも予想されたが、楽しみながら取り組めるようにミッション形式を取り入れ、ワークシートを活用して遊びの情報を収集するようにしたことで他者の意見に耳を傾け、興味のなかったことにも意識を向けることができた。外で遊んだ時には、他舎生と遊ぶ実体験が少ない本生にとって一緒に体を動かして遊べたことは貴重な経験だったのではないかと。また、他舎生と一緒に外で遊ぶことが楽しいと感じることができ、今後の余暇を広げるためのきっかけになったのではないかと。実践を通して他者へ意識が向くようになったことで日常生活の中でも帰舎時のあいさつやお礼の言葉、配膳に行く時の言

葉かけなど自発的な行動が増えた。また、今までは、不本意なことがあるとすぐイライラしてしまい、理由を説明しても受け入れられないことが多かったが、受け入れられることの幅が広がったように感じる。今回の経験を日常生活に般化させるためにも今後も他舎生と遊ぶ機会や新しい遊びの場を意図的に作りながら寄宿舎にいるからこそできることを経験させていきたい。

舎生 B 高等部 2 年

① 実態の概要

高等部から本校に入学し、入舎して 2 年目である。入学してすぐに寄宿舎に泊まることになったため、入舎当初は戸惑う場面が多かったが、寄宿舎の環境や人にも慣れはじめ、余暇は自室よりも談話室で過ごすことが多い。指導員や身近な舎生を誘って遊ぶことが好きではあるが、余暇の過ごし方の選択肢が少なく、同じことをしていることが多い。周りを見る力は高く、人の話をよく聞いていて相手の様子をうかがいながら気を配ることができる。しかし、言葉を間違えて覚えていたり、話が断片的に入っていたりするなど正しく理解できておらず、日常生活の中でも伝えたいことをうまく言葉にできない。また、改まった場面で気持ちを伝えることや説明することも苦手であり、声が小さくなってしまふ。

② 実践 I 【ダイソーでの買い物～余暇で使えるものを買おう～】

実践 I では「欲しいものを見つけて一人で買い物ができる」「自分の思いを伝える」ことを目標とし、新しい遊びのきっかけを作ることと自分の思っていることを伝える機会を作ることとした。買い物と買い物報告会を実施し、色々な商品を見て欲しいものを探すという観点から「収集」する力と報告会では「発信・伝達」する力を意識しながら指導を行うことにした。

情報活用実践シート②

対象舎生	舎生 B	実施日	9月 9日
		題材	外出活動
目標	○評価できるように具体的に欲しいものを見つけて一人で買い物ができる。		自分の思いを伝える。
ゴールイメージ			
取り扱う情報	ダイソー商品		買い物報告会
関係する活用能力	<div style="display: flex; justify-content: space-around; font-size: small;"> 基本的な操作 情報モラル 情報セキュリティ 収集 整理 保存 </div> <div style="display: flex; justify-content: space-around; font-size: small; margin-top: 5px;"> 発信 伝達 共有 比較 プログラミング 統計 </div>		
はぐくみたい情報活用能力	○今回の実践で特に育成したい活用能力は？ 収集		発信・伝達
指導内容	○実施期間ですことは？ ・事前学習を通してダイソーで買いたいものを探し、その商品が店内のどこにあるか場所を確認させる。当日は、店内の看板を頼りに商品を探すようにする。 ・本人に買い物経験を確認した上で必要に応じて調べの機会を作る。		・事前に本生の思いを確認しておく。買い物報告会では、買った理由を伝えるように促す。 ・必要に応じて報告会で発表しやすいようにメモをさせる。
評価	(1) 目標に対する評価は？ ・店内看板は見えなかったが、おもちゃコーナーにすくたどり着き、欲しいもの(ミニ四駆やカードゲーム)を見つけて買うことができた。 (2) 指導内容の検証(情報活用の様子) ・パソコンでダイソーのホームページを見る機会を作ったが、欲しいものが決まらなかった。そのため、売り場について調べなかったが、店内ではスムーズに商品を見つけることができた。 ・報告会後は早速、舎生や指導員を誘って遊んでおり、余暇の広がりを感じられた。 (3) 次への課題、改善点は？ ・予算内でのお金の使い方や、買うものバランス、お金の計算に課題が見られたので経験を振り返ってほしい。 ・買うものを探すことはできるが、お金の価値(〇〇が大体いくらくらいか)を知らないと思われたので指導員からアドバイスを受けながら学んでほしい。		(1) 目標に対する評価は？ ・最初は、買ったものしか伝えなかったが、指導員が「なんで買ったの？」とフォローしたこと理由まで言うことができた。 (2) 指導内容の検証(情報活用の様子) ・買い物や報告会前に「理由も伝えるように」と話をしてしたが、「理由」の意味を知っているのか疑問に感じた。本人に意味が通じているのか確認した上で分かるように言うべきだった。 ・報告会は、5番目で他舎生の発表も聞いている中で、端的な報告になってしまった。他舎生の話を聞いていないことや緊張感があったことが原因と考えられる。 ・具体的な伝え方をアドバイスし、本人にもどのように言うのかを確認しておけるとよかった。 (3) 次への課題、改善点は？ ・メモの取り方(紙・ケータイ・録音など)や活用方法を教え、本人に合った方法を探る。 ・自分の気持ちを伝える場を作りながら経験を増やしていく。練習の場も作っていく。

図 9

事前指導では、ダイソーのホームページを見るように促してどのような商品が売っているか情報を集める機会を作った。当日は集めた情報をもとに予算1,000円の中で、自分でお金の配分を考えながらイオンとダイソーで夕食と遊び道具を買うことにした。ダイソーでの商品探しは、家庭での経験から店内看板を見なくてもおもちゃコーナーに向かって欲しいものを見つけることができた。しかし、2つの店で違った目的で商品を選んだため、お金の配分を考えながらの買い物は経験の少なさから難しく、ダイソーで予想以上にお金を使ってしまった。夕食と遊び道具のどちらに比重を置くべきなのかを考えると、予算の中でバランスを考えながら買い物するためにも経験が必要だと感じた。買い物から帰ってきた後には、買い物報告会を行い、自分の思いを伝える機会を作った。事前に「なぜそれを買ったのか理由を伝えるように」と話をしていたが、「ミニ四駆と虫のカードゲームを買いました」と言って終わりにしようとしていた。そのため、指導員が「なんで買ったんですか？」と質問したことで「前に作ったことがあってまた作りたいと思ったから」「時間がかかって買った」と理由やその時の状況を言うことができた。指導員から促されなくても伝えることができるように内容を整理する方法を教え、伝えるための練習をする場が必要であると感じた。報告会后には、他舎生や指導員を誘って買った物で遊ぶ様子が見られ、情報を収集しながら遊び道具を買ったことで余暇を広げることに繋がった。

③ 実践Ⅱ【外で遊ぼう～鬼ごっこ・しっぽとりゲーム・野球～】

実践Ⅰにおいて内容を整理して伝えることが課題点だった。そのため、実践Ⅱでは、「自分の意見を伝える」ことを目標とした。外で遊ぶことについてICT機器を使って調べ学習をし、プレゼン大会を通して自分の意見伝える場を作ることにした。情報活用能力については、「基本的な操作・収集・整理・発信」に着目して実践することにした。

情報活用実践シート④

対象舎生	舎生B	実施日 題材	11月18日 プレゼン大会・外で遊ぼう
目標	○評価できるように具体的に 自分の意見をまとめ、相手に伝える。		
ゴールイメージ	自分の意見をまとめ、相手に伝える。		
取り扱う情報	障害者スポーツ・スポーツ種目・外で遊べること・集団で遊べること		
関係する 活用能力	<div style="display: flex; justify-content: space-around; border: 1px solid black; padding: 2px;"> 基本的な操作 情報モラル 情報セキュリティ 収集 整理 保存 </div> <div style="display: flex; justify-content: space-around; border: 1px solid black; padding: 2px; margin-top: 2px;"> 発信 伝達 共有 比較 プログラミング 統計 </div>		
はぐくみたい 情報活用能力	○今回の実践で特に育成したい活用能力は？ 基本的な操作・収集・整理・発信		
指導内容	<p>○実施期間です。ことは？</p> <p>調べ学習をする時は、「何を使ってどのように調べたのか」「検索ワードは何を入力するのか」を観察する。検索ワードがわからず、アドバイスを必要とした場合は、直接的な答えは言わず、連想できるような言葉かけをする。また、自分の意見をまとめた時には選んだ理由を聞くようにする。</p> <p>必要に応じてメモを取らせる。その時はメモの手段や取り方を教え、本人がやりやすい方法を探る。</p> <p>プレゼンについて、言い方のアドバイス(こう言うとかわりやすいなど)をしながら、どのようなことを言うか(伝える項目や内容、理由など)を自分で考えさせる。また、必要に応じてメモやワークシートを活用し、プレゼン終了後は、フィードバックを行う。</p>		
評価	<p>(1) 目標に対する評価は？</p> <p>過去の経験を生かしながら、パワーポイントやメモ帳を使って自分の意見をまとめ、他舎生に伝えることができた。その反面、今回はパワーポイントがあったからこそ伝えられたとも感じた。</p> <p>日常生活の中でも以前に比べて伝えることに対して諦めることが少なくなった。</p> <p>(2) 指導内容の検証(情報活用の様子)</p> <p>「外遊びについて調べに行こう」と女子舎生に呼びかけて調べ学習を行った。呼びかけの言葉をたよりにパソコンで「外」「遊び」と検索し、楽しい理由にしっぽとりを選んでいた。</p> <p>遊びについて調べることから自分の意見をまとめてプレゼン内容を作るまでの一連の作業を一度チャレンジさせてみて足りない部分やわからないことをアドバイスするようにした。その結果、実物をより把握することができた。</p> <p>プレゼン大会ではパワーポイントで発表を行うことにした。はじめは画像を見せるだけで終わるつもりだったが、指導員から画像だけでなく、言葉でも説明した方が良いことをアドバイスされるとパワーポイント内に言葉を入れ、ノートやタブレット(メモ帳機能)に自分の考えをまとめて伝える内容を書いていた。</p> <p>フィードバックでは「緊張せずにうまくできた」と言っていて今回の経験が自信になったようだった。</p> <p>(3) 次の課題、改善点は？</p> <p>伝えたいことがあっても言葉が出ず、抽象的な表現になってしまうことが多いので、伝えるための有効な手段を学んでいけるとよい。(スマホで調べて見せるなど)</p> <p>余韻の選択肢を増やすには楽しむことが大事になってくるので、プレゼンの段階で自分だけでなく、みんなが楽しめるルールまで考えられるようになるとうい。</p>		

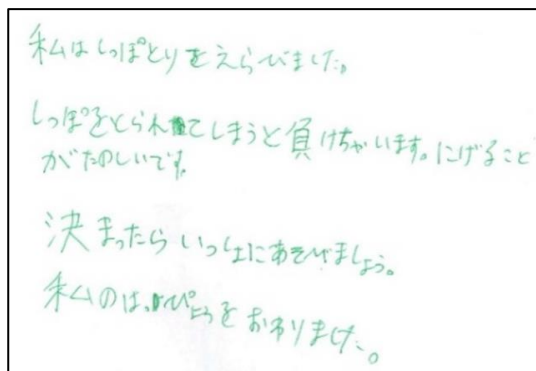


図 1 1 メモ帳



図 1 2 パワーポイント

指導員からプレゼン大会をすることを伝えられた時は、過去の経験から難色を示していることがあったが、苦手なことの先に楽しいことがある取り組みだったため、積極的にプレゼンの準備をしていた。プレゼン発表は、過去の経験を生かしてメモ帳（図11）やパワーポイント（図12）を活用して原稿の準備をしていたが、言葉を知らない実態があるため、自分の思いをどのように伝えればいいのか考えるのが難しかった。それでも指導員からアドバイスを受けながら発表内容を整理し、自分の思いを伝えることができた。発表をやり遂げ「寄宿舍では緊張しない」といった本生の発言もあることから思った以上に自分を出せる場であることに気付くことができたように感じる。活動当日は、自分が提案していた遊び（しっぽとり）が採用されたこともあり、準備やルール説明、片付けなどを積極的にしていた。活動後の振り返りではプレゼン発表に対して「うまくできた」「苦手意識はない」と言っていて自信が付き、自己肯定感を高められることに繋がった。

④ 舎生Bのまとめ

今回の経験を通して自信が付き、寄宿舍で寝食を共にしていることで環境や人にも慣れて心を開くことができ、小中学生の時は喋れなかったことや過去の経験からプレゼンが苦手なこと、家族のことなど自分の話をしていくようになった。余暇時間にも話をしたくて指導員や他舎生のところに行ったり、倉庫から遊び道具を取ってきて自分から「○○しませんか？」と誘ったりしてることが増えた。また、他舎生が裁縫や絵を描いているのを見て「私もやりたい」と言って余暇を過ごしていることから自発的な行動が増えた。

言語力が低く、検索するにしても言葉が出てこなかったり、ICT機器を使って情報を集めることができて伝えたりすることにつまずいていることが日常生活の中でもよく見られている。今回の実践で正しい言葉を理解していないことや言葉数が少ないなどの課題を再確認することができた。自分の気持ちをうまく言葉にできないことはあるが、寄宿舍に対して思った以上に自分の気持ちを出せる場であると気付くことができたことで伝えることに対して途中で諦めることが減り、苦戦しながらも身振り手振りを交えて最後まで一生懸命伝えようとするが増えた。安心できる場であることがわかると積極的な様子も見られているので、本生の気持ちに寄り添い、自信がつけられるようなかわり方をしていきたい。

7 研究のまとめと今後の課題

今年度は『余暇の充実を目指して～情報活用能力を生かした寄宿舍生活～』の研究テーマのもと、舎生2名を事例対象に設定して実践を行ってきた。情報活用実践シートを通して様々な場面で情報活用能力（基本的な操作・情報モラル・情報セキュリティ・収集・整理・保存・発信・伝達・共有・比較・プログラミング・統計）が複雑に関係し合っていることがわかった。情報活用の幅が広く、情報活用能力が関連し合っていることから難しさを感じたが、各実践で関係する情報活用能力と、はぐくみたい情報活用能力を明記してどこに注目するのかポイントを絞って取り組んだことで指導員の情報を活用することに対する意識が高まり、どの情報活用能力に対してどのようにアプローチするのかを見失わずに指導することができた。また、指導員間で何を狙うのか、どのような支援や手立てを行う

かを共通確認しながら丁寧に指導を行うことができた。そして、今回の実践では情報活用を意識するために情報活用実践シートを作成して取り組んだが、すべての場面で使うのは難しいと感じたため、いつどのような場面で使用することが効果的なのか整理していけるとよい。

今年度の研究を通して遊びの情報を収集し、過ごし方の幅を広げるきっかけを作りながら集団で遊ぶことの楽しさを感じさせることができた。余暇の充実は、様々な遊びや活動を経験することで得られるものであり、今回の経験を今後の生活の中でどう繋げていくかが大切である。実践の中では、余暇の充実に迫ることができたが、舎生たちは、まだ経験が浅く、過ごし方の手段が少なく、自分から周囲の人を誘うことに対する抵抗感がある。日常生活の中で様々な情報や話題を舎生に触れさせ、舎生同士でやりとりする機会や舎生の主体的な場面を見逃さないようにしながら今回の研究で取り組んだことが自然な形で繋がっていくことを期待したい。

ただ端末を使って調べたりするだけでなく、調べた情報をもとに自分の考えをまとめ、話し合いやプレゼン発表する機会を作りながら気持ちを伝える経験を増やすことができ、情報活用能力を活用することに繋がった。今回の実践では、情報活用を促すために意図的に指導員が介入したが、舎生が自分から調べたり、考えたりしながら「やってみたい」と思い、その気持ちを発信できる環境づくりとそのような言葉があったときに実際に経験する場を作れるようにしていく必要がある。その積み重ねによって余暇を広げられる可能性があることが事例研究でわかった。余暇の充実は、自分で生活を組み立てながら豊かな生活を送ることに繋がるのではないか。生活の場である寄宿舎だからこそ気軽にチャレンジできるメリットがあるため、舎生の何気ない言動を見逃さないようにしていきたい。

寄宿舎は、決められた日課やルールの中で基本的な生活習慣を身に付けながら社会性やコミュニケーション力を養うことができる貴重な場である。今後も集団生活の中で他者とかわりを持ちながら経験を積み重ね、生活指導目標でもある自分の意志や感情を表現する力・互いに伝え合う力を身に付けながら余暇の幅を広げられるように支援していきたい。

<参考文献>

- ・文部科学省（2018）「特別支援学校教育要領・学習指導要領解説 総則編（幼稚部・小学部・中学部）」P208
- ・一般社団法人日本教育情報化振興会（2021）「小学校各教科版情報活用能力ベーシックの概要」
- ・山梨県教育委員会（2023）「ICT活用能力実態チェックシート」
- ・菊池哲平・小林祐紀監修 熊本大学教育学部附属特別支援学校編著（2024）「特別支援学校教育情報活用能力を育む授業作り」P17～19
- ・令和6年度山梨県総合教育センター研修会7月31日実施 静岡大学教育学部准教授 塩田真吾「ネットトラブル対応について学ぶ研修会スマホ・ネット時代を生きる子どもたち」

1年次 研究のまとめ

本校においてICT利活用にとどまらない情報活用能力の育成について、それを着実に児童生徒に身につけていけるような授業実践を重ねていくことが必要であると考え、2年計画にて情報活用能力育成のための授業づくりに焦点を当てながら研究を進めてきた。

小学部では「小学部段階における情報活用能力とは何か」「その指導の際に大切にしたいことは何か」を明らかにしていくこととした。取り組みの中で事例対象児童2名の情報活用能力について検討を重ねてきた。そこで考えてきたことを通して、もう一度、“担当の児童にとっての情報活用能力とは”“その指導のために大切にしたいこととは”の2点を考えた。実践の中で情報活用能力をとらえていく中で低学年と高学年の違いが顕著に出た。高学年になると、情報を得る対象となる人が徐々に友達まで広がりを見せることもあるようであることが分かった。一方で、低学年においては教師から情報を得る場面が多く、学校において身近な人である教師との関係性の大切さや教師がどう意図的に適切に情報を扱うかの重要性について再確認できた。そして指導上大切にしたいことが①環境設定をすること（情報を得たり、発信したりしやすい環境を意図的に設定する）、②得た情報を伝える場面をつくること、言葉の力をつけること（語彙を増やす等）、③体験や経験を大切にすること（それを伴った身のある言葉をもつこと）、④興味のあることを入り口に、やりとりを広げていくこと（人との関わりの基盤づくり）の4点であることを改めて共有することができた。

中学部では情報機器をどのように活用すると課題としている個の目標に迫っていけるのかについて考えてきた。多岐にわたる情報活用能力の中でも『「考えや思い」を生徒自身が他者へ伝える力』つまり「情報発信スキル」について着目し育成してきた。PDCAの中で特に「自分の知識（言語）を使い、他者へ発信する力」について成長が見られた。発語に課題のある生徒が発信する際にどうすれば他者へ伝わるか情報機器を使いながらやりとりを重ねた。その中で生徒自身が「こうすれば伝わった」と経験の中で気づき、同じ場面を教師が設定することでどのように発信するかを自ら考えて伝えようとする姿が見られた。また、情報機器のみではなく身振り、筆談などの発信方法を教師とのやり取りの中で使いながらその良さ（より伝わりやすいと感じる）を知ることによって様々な方法で伝えようとする様子が見られ始めている。生徒が発信する際にその生徒にとって何が最適かを考えていく中で「発信方法の選択肢を設定すること」さらに「発信する場面に応じ臨機応変に発信方法を選び、使っていく力を生徒につけさせること」が必要であることを確認することができた。

高等部では生徒にとって、本校卒業までのどのような情報活用能力を身につけておく必要があるか検討・整理を行った。「ICT活用能力チェックシート」を用いて、それぞれの段階の生徒が卒業時にどこまでできるようになっているとよいのかについてまとめ、それをもとに授業の単元計画を立てることとした。そして単元計画の中に、どのように情報活用能力を育成する内容を扱うかについても明記しそれをもとに授業を行い、授業の振り返りを行ないながら、行った手立てが適切だったか、改善が必要かなどについてまとめ、授業づくりについて考えていった。今年度は「社会／自立活動」の授業について学習グルー

プごとに話し合い、実践を進めた。取り組みの中で情報の受け取り方や情報を相手に伝える方法についてそれぞれグループの実態に応じた支援や手立てを検討することができた。情報の受け取り方として、自らICT機器を活用して情報を得る実態のグループや教師からの手助けを受けて情報を得る実態のグループ、ICT機器を使わずに、感覚的なものを大切にする必要のある実態のグループなど、情報活用能力に関する生徒の実態を改めて把握することができた。その上で、どのような手立てで学習を進めることで身につけさせたい情報活用能力の育成を図ることができるかについて、社会／自立活動の学習で有効な手立てを検討することができた。どの実態の生徒についても、学習の中では特に情報をどのように受け取るか、相手に伝えるかの力が重要であることが各グループで検討された。生徒の情報活用能力の実態について、丁寧に読み取ることとともに、実態に応じた適切な手立てを設定する必要性について高等部の教師全員で再確認できた。

寄宿舎では昨年度からのテーマである「余暇の充実」について情報活用能力を生かした寄宿舎生活を過ごしていけるように考えていった。舎生2名を事例対象に設定して余暇の過ごし方について情報活用能力に育成に焦点を当てながら実践を行ってきた。情報活用実践シートを通して様々な場面で情報活用能力（基本的な操作・情報モラル・情報セキュリティ・収集・整理・保存・発信・伝達・共有・比較・プログラミング・統計）が複雑に関係し合っていることが分かった。情報活用の幅が広く、情報活用能力が関連し合っていることから難しさを感じたが、各実践で関係する情報活用能力と、育みたい情報活用能力を明記してどこに注目するのかポイントを絞って取り組んだことで指導員の情報を活用することに対する意識が高まり、どの情報活用能力に対してどのようにアプローチするのかを見失わずに指導することができた。また、指導員間で何をねらうのか、どのような支援や手立てを行うかを共通確認しながら丁寧に指導を行うことができた。

以上のように教師が同じ視点に立ち、児童生徒の情報活用能力をどう育成していくかについて1年間を通し実践を重ねてきたことは大きな成果であるといえよう。実践を通して見えてきた成果と次年度へつなげていくための課題について以下にまとめていくこととする。

体験的な学習の重要性

情報機器の活用について考えていく中で従来の実践の中で大切にされてきた、「実体験を重ねていき、実感を伴わせながら学習したことを身につけていく」ことの重要性について改めて確認できた。授業の中で得るべき情報を児童生徒が理解し、収集するために、ことばや数につながる基本的な概念を身に付けることが必要となる。概念形成の手立てとして教材のやり取りを通し児童生徒の見方・考え方を整理していくことが大切にされてきた。具体物の操作、体験的な学習を通し学習の基盤となる言語能力、問題発見・解決能力等についても育成されている。これまで同様に情報機器を使いながら体験的な学習を大切にしていける視点をもつことが重要となると言える。また、各学部、寄宿舎の実践からも分かるように情報機器活用による知識、経験と体験的な活動の往還により、より深い学習活動の展開が期待される。

授業をはじめとする取り組みの中でどの情報活用能力を身につけさせるか見極めていくこと。

情報活用能力については特別支援学校小学部・中学部学習指導要領解説総則編に「学習活動において必要に応じてコンピューター等の情報手段を適切に用いて情報を得たり、情報を整理、比較したり、得られた情報を分かりやすく発信・伝達したり、必要に応じて保存・共有したりといったことができる力であり、さらに、このような学習活動を遂行する上で必要となる情報手段の基本的な操作の習得や、プログラミング的思考、情報モラル、情報セキュリティ、統計等に関する資質・能力等も含むものである。」と示されている。このような多岐にわたる情報活用能力をバランスよく身につけさせることの必要性が高等部をはじめとし、どの学部においても再確認された。グループや個々の課題によりどのスキルが必要であるかは変わってくる。授業づくりの視点において単元計画の中で何を身につけさせるか、そのために必要な情報活用能力は何かということを考えていく必要がある。この視点は次年度の授業づくりの取り組みにつながれると考える。

児童生徒にとって「情報」とは学習環境すべてから得られるものであり、意図した環境設定が重要である。

周囲の環境、つまり共に学ぶ友達、教師から得られる情報が大きいことが小学部の実践をはじめとし共通確認できた。教材の提示や教室環境のみではなく、活動の見本として周囲の人から情報を収集し見通しにつなげていく姿が多く見られた。すべてが「情報」を得る手段となるものということは、教師が授業の中でどの情報を児童生徒に提示するか考えながら展開していかねばならないということである。児童生徒への教材の提示のタイミング、見本となる人（教師、友達）、見本の活動について、意図をもって授業づくりを行う必要がある。

また、中学部の実践から児童生徒が発信する場面を教師が意図して設定すること、その際に発信方法の選択肢を増やしていくことの必要性があることが分かった。1つの授業の中ではなく単元計画にてどの段階で得た情報を児童生徒に表現させるか、考えていきながらPDCAサイクルにてより深い学習を展開していくべきである。

以上の3点を確認、共有、周知できたことが今年度の成果である。次に課題について示す。

情報活用能力を含めた丁寧な実態把握

今年度の実践の中で教師が話し合いを重ね、対象となった児童生徒の実態について丁寧に見直しを図った。特に学部の中で児童生徒が授業の中でどのように情報収集を行っているか、について考えていった。

生活年齢、学習の内容等によって、求められる情報活用能力も変わってくることを授業づくりの中では考えていく必要があった。得られた情報について分かりやすく発信、伝達していくための力を育成することが求められている。単元計画の中でどんな目標を立て、目標達成のための活動を設定していくかを考えながら、実践を重ねていくことが必要である。これまでの指導の蓄積の中でも挙げられている丁寧な実態把握が重要となりさらに、育成したい情報活用能力についても現段階の様子について教師が改めて見直して評価していくことが必要であると考ええる。

実践についての見取りの評価

実践の評価について児童生徒の実態や変容を動画やエピソードを集めていくことで成長を見取ってきた。生徒の見取りの方法について校内研究のように時間を設定し実践内容を伝えあい複数の教師の目で見ていく必要を強く感じている。また、情報活用能力のどのスキルを育成するかの見取りの視点をもっていることも重要であると改めて分かった。さらに教師間のみではなく客観的に評価できるような体系表などのツールを用いると評価の妥当性が高まると考えられる。

以上の2点について次年度への課題とした。より確実な実態把握、見取りの評価についてはやはり教師の専門性が不可欠であると考ええる。専門性、特に指導力を高めていけるように情報活用能力育成について教師一人一人が意識を向けながら実践を重ねていけるとよい。情報活用能力育成のための授業をさらに蓄積することにより「基礎的・基本的な知識及び技能の習得と情報活用能力の育成」といった学校指導重点の具現化を図る一助となると考えられる。

〈引用・参考文献〉

中央教育審議会答申（2018）「幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」

文部科学省「新しい時代の特別支援教育の在り方に関する有識者会議報告本文（2021）IV ICT利活用等による特別支援教育の質の向上」P. 21-24

文部科学省（2018）「特別支援学校教育要領・学習指導要領解説 総則編（幼稚部・小学部・中学部）」P. 204-209

文部科学省（2019）「教育の情報化に関する手引」P. 23, 24

山梨県教育委員会（2024）ICT活用チェックシート

1 研究主題

「情報活用能力の育成を目指した授業づくり」

2 研究設定の理由

「情報活用能力」とは令和元年12月「教育の情報化に関する手引き」によると「世の中の様々な事象を情報との結び付きとして捉えて把握し、情報及び情報技術を適切かつ効果的に活用して、問題を発見・解決したり自分の考えを形成したりしていくための必要な資質・能力」とされている。平成28年12月中央教育審議会答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」において「言語能力」等と同様に「教科を超えた全ての学習の基盤として育まれ活用される資質・能力」の一つとして掲げられ、「教育課程全体を見渡して組織的に取り組み、確実に育んでいくことが重要である」と学習指導要領等に反映されていくように提言され、実施されていることは周知の通りである。また、文部科学省「新しい時代の特別支援教育の在り方に関する有識者会議報告本文（令和3年1月）Ⅳ ICT利活用等による特別支援教育の質の向上」において「1 特別支援教育におけるICT利活用の意義と基本的な考え方 ICTは、障害の有無を問わず、子供が主体的に学ぶために有用なものであるとともに、特別な支援を必要とする子供に対しては、その障害の状態や特性及び心身の発達の段階等に応じて活用することにより、各教科等の学習の効果を高めたり、障害による学習上又は生活上の困難を改善・克服するための指導に効果を発揮したりすることができる重要なものである。また、合理的配慮を提供するに当たっても必要不可欠なものとなりつつある。」としている。このように特別支援教育においてもICT利活用を含めた情報活用能力の育成について研究と実践を重ねていく必要があると考える。

さらに、令和2年9月「特別支援教育におけるICT活用について」「1. 特別支援教育におけるICT活用の視点」として視点1として教科学習の中での活用、視点2として自立活動の視点として挙げられている。

1. 特別支援教育におけるICT活用の視点

視点1

教科指導の効果を高めたり、
情報活用能力の育成を図ったり
するために、ICTを活用する視点

- 教科等又は教科等横断的な視点に立った資質・能力であり、**障害の有無や学校種を超えた共通の視点。**
- 各教科等の授業において、**他の児童生徒と同様に実施。**

視点2

障害による学習上又は生活上の
困難さを改善・克服するために、
ICTを活用する視点

- **自立活動**の視点であり、特別な支援が必要な児童生徒に特化した視点。

各教科及び自立活動の授業において、
個々の実態等に応じて実施。

✓ 新特別支援学校学習指導要領では

各教科の指導計画の作成に当たっての配慮事項として、**各障害種ごとにコンピュータ等のICTの活用に関する規定**を示し、指導方法の工夫を行うことや、指導の効果を高めることを求めている。

これらの国の動向や時代の流れを受け、本校においてもICT利活用にとどまらない、情報活用能力の育成について、それを着実に児童生徒に身につけていけるような授業実践を重ねていくことが必要であると考えます。情報活用能力は各教科等の特質に応じて適切な学習場面での育成を図るため、想定される学習内容を次の4つに位置付けられている。以下の学習内容についてどの場面で取り扱い、指導すべきかについても検討が必要である。

想定される学習内容	例
基本的な操作等	キーボード入力やインターネット上の情報の閲覧など、基本的な操作の習得等に関するもの 等
問題解決・探究における情報活用	問題を解決するために必要な情報を集め、その情報を整理・分析し、解決への見通しをもつことができる等、問題解決・探究における情報活用に関するもの 等
プログラミング (本事業では、問題解決・探究における情報活用の一部として整理)	単純な繰り返しを含んだプログラムの作成や問題解決のためにどのような情報を、どのような時に、どれだけ必要とし、どのように処理するかといった道筋を立て、実践しようとするもの 等
情報モラル・情報セキュリティ	SNS、ブログ等、相互通信を伴う情報手段に関する知識及び技能を身に付けるものや情報を多角的・多面的に捉えたり、複数の情報を基に自分の考えを深めたりするもの 等

本研究1年次において教師が同じ視点に立ち、児童生徒の情報活用能力をどう育成していくかについて1年間を通し実践を重ねてきた。その成果として3点が挙げられた。

- ① 体験的な学習の重要性
- ② 授業をはじめとする取り組みの中でどの情報活用能力を身につけさせるか見極めていく
- ③ 児童生徒にとって「情報」とは学習環境すべてから得られるものであり、意図した環境設定が重要である

特に「実感を伴った学習」が情報活用能力育成においても重要なものであると、従来私たちが大切にしてきた指導の必要性が改めて理解できた。「情報活用能力」を授業づくりにおいて視点としてもち、意図した環境設定が大切であると分かった。今年度の研究実践ではこれら3点を活かしながら情報活用能力育成を目指した授業づくりについて考えていきたい。また、タブレット端末等の活用が難しい実態の児童生徒についてもその支援、学習場面ごとの様々な「情報」を効果的に活用することができるようになるか考えていけるとよい。

また、どの学習場面での見取りを行うかが前年度の課題として挙げられた。そこで、複雑な要素が絡む「情報活用能力」を、授業で意識して育成しやすくする（授業の構想及び実践に資する）ことを目的に日本教育情報化振興会が整理した「情報活用能力ベーシック」を用い、本校の児童生徒に必要な情報活用能力に関する考え方や捉え方に活用することにしたい。

小学校各教科版情報活用能力ベーシックの概要

情報活用能力ベーシックの開発意図と経緯

本委員会では、2020年全面実施の小学校学習指導要領を対象にして、基本となる学習のプロセスに各教科の特徴をふまえて情報活用能力を位置づけた観点「情報活用能力ベーシック」を公開しました。

小学校各教科版の情報活用能力ベーシックを作成するにあたっては、まず①授業を実施する場面に振り所となる学習指導要領等をもとに、基本となる5つの学習プロセス（[課題の設定] [情報の収集] [整理・分析] [まとめ・表現] [振り返り・改善]）及び13のキーワード（発見・収集・整理・比較・処理・統計・形成・発信・伝達・表現・創造・振り返り・改善）から構成される情報活用能力ベーシックを開発しました。次に②情報活用能力ベーシックを構成する13のキーワードを用いて、各教科・領域の学習指導要領を確認し、最終的に次頁以降に示すように③各教科・領域の学習内容に適用できることを示しました。あくまでも、情報活用能力ベーシックですので、これをもとに、ご自身の担当学年の授業や学校の実態に応じて活用いただけると幸いです。

1 課題の設定 (発見)

- 読書や日常生活や事象、見学、実験・観察などを通して発想を促す(国・社・算・理・生・体・外・道・特)¹⁾
- 横断的な学習や仮説を立て解決方法を考える(理・生・社・特)
- 達成すべき目標を明らかにする(全)¹⁾

2 情報の収集 (収集)

- 実体験や実験・観察、聞き取りなどで複数の一次情報を収集する(自然の変化や社会的現象、材料など)
- 本や新聞、インターネットなどの複数の二次情報を収集する(文章、地図、統計、写真・動画など)(全)

3 整理・分析 (整理、比較、処理、統計)

- 文章などの情報の意味を正確に理解する(全)
- 観点を定めて異なる情報を比較・分類したり関連づけたりして整理する(全)
- 整理できる情報の集める(全)
 - 共通点や相違点を明らかにする(全)
 - 整理比較・関係比較、比較単位を用いた測定による比較をする(算)
 - 集めた情報を整理して考察などに使えるようにする(算)
- 全体の傾向や因果関係を見つめる(算)
- 表現の要素を分析する(国・算)
- 意見や感情なども読み取ったりする(国)
- 必要分情報を中間し取得し整理する(算)
- 情報を整理するより深く、豊か化したりする(算)
- 情報を組み合わせ、新しい関係性を創る(算)
- 対話によって多面的・多角的に捉える(全)
- 表現のよさを判断したり、深く捉えたりする(国、算)
- 自分の考えを形成する(全)

4 まとめ・表現 (形成、発信、伝達、表現、創造)

- 伝える目的を考え、情報を取捨選択し、伝えたい内容を明確にする(全)
- 自分の思いや意図が伝わるような適切な語句や表現を選び工夫して伝える(全)
- 図解したり、議論したり、文章にしたりする(全)
- 音楽や手話、立休表現、動画メディアなどを工夫して表現する(算、国)
- 事実や結論の根拠や理由、思考の過程を明確に示して伝える(全)
- 言葉や図、表、式、グラフなどを用いて表現する(算)
- 数学的な表現を用いて共有したり、数学的に説明したりする(算)
- 日常生活や学業、目標などにまとめる(社)
- 構構のある予想や仮説・解決の方法を表現し表現する(国)
- 周りに働きかけてより良くしようと働きかける(生、特)

5 振り返り・改善 (振り返り、改善)

- 学習した内容を自分の言葉でまとめる(全)
 - 自分の考えを再確認し、さらに深める(国)
 - 生活の在り方や環境・社会の発展について考える(国)
 - どのような状況や価値が取り出されたのかを考える(国)
- 自分の学習方法を評価・改善し、次に生かす(全)
 - 数学的に整理・処理した方法を改善し、生活に生かす(算)
 - 発見の過程や実践などの長處し再検討を行う(理・算)
- 自身の変化や成長について振り返る(全)

課題の解決

1 課題の設定 (発見)

2 情報の収集 (収集)

3 整理・分析 (整理、比較、処理、統計)

4 まとめ・表現 (形成、発信、伝達、表現、創造)

5 振り返り・改善 (振り返り、改善)

【出典】

1) 国語：中川一史、佐藤幸江、梅田真由、小林由紀、中沢静江、渡辺真由美
(2019) 小学校教員と保護者へ「情報活用能力」を高めるための実践的指導法に関する調査、日本教育メディア学会 20 周年記念大会発表資料、94-97
小林由紀、梅田真由、中川一史、中沢静江、渡辺真由美 (2020) 学習のプロセスに「情報活用能力」を位置づけた「情報活用能力ベーシック」の概要、日本教育メディア学会 20 周年記念大会発表資料、1-4

本研究では授業実践を通して明らかにしていくため学部ごとの研究としたい。本校児童生徒の各学部の「情報活用能力」の捉えを明らかにしたのち、育成に有効な、授業における手立て、題材、支援方法等をP D C Aにて考えていきたい。

3 研究目標（2年計画で研究を行う）

- (1) 本校児童生徒に必要な情報活用能力はどのようなものか、それを育成するにはどのような方法があるか検証していく。(1年次) …令和6年度
- (2) I C T利活用に限らない「情報」を活用することにより学習効果の最大化を目指した授業づくりを探求していく。(2年次) …令和7年度
- (3) 授業研究を通して、授業の質や教職員の授業力を向上させる。

4 研究内容・方法

- (1) 本校児童生徒に必要な情報活用能力に関する考え方や捉え方について理論の部分について既存資料、実践成果等を基に整理を行う。

(2) 情報活用能力を育成するための授業づくりについてP D C Aサイクルにて実践する。また、実践にあたり(1)で示された理論との双方を往還させながら研究を進めていく。

5 研究組織

(1) 各学部及び寄宿舍での研究会(月2回程度の校内研究日)

6 研究計画

本研究は2年計画で行うものとし、令和6年5月から令和8年3月までの2年間の研究期間とする。

【令和7年度(2年次)】

	日にち	内容
全体研究会①	5月8日(木)	今年度の校内研究の方向性、計画等の提案、意見交換。
研究日①	5月16日(金)	学部研究テーマ、研究計画・内容の確認など
研究日②	5月30日(金)	グループ別計画による実践
研究日③	7月25日(金)	グループ別計画による実践
全体研究会②	8月21日(木)	中間報告
研究日④	8月27日(水)	グループ別計画による実践
研究日⑤	9月12日(金)	グループ別計画による実践
研究日⑥	10月23日(木)	グループ別計画による実践
研究日⑦	11月6日(水)	グループ別計画による実践
研究日⑧	12月9日(火)	グループ別計画による実践のまとめ
研究日⑨	12月25日(木)	グループ別計画による実践のまとめ、学部まとめ
研究日⑩	1月15日(木)	学部まとめ、来年度に向けてのアンケート
全体研③-1	2月3日(火)	実践報告
全体研③-2	2月5日(木)	実践報告
全体研④	2月24日(火) 職員会議終了後	今年度の課題と成果、来年度へ向けての方向性の意見交換

寄宿舍は別途研究日を設定する。

令和7年度「小学部」研究グループ

1 研究テーマ

『小学部段階における情報活用能力を育成する指導場面の検討』
～2年計画2年目～

2 研究テーマについて

昨年度の研究では、「小学部段階における情報活用能力とは何か」「その指導の際に大切にしたいことは何か」を明らかにすることを目標に研究がスタートした。研究会では、“情報”という言葉の意味をより明確にとらえる場とするために、「学習指導要領総則」「教育の情報化に関する手引」「ICT活用チェックシート」について時間をかけて読み解き、小学部における「情報活用能力とは何か」について考え、低学年・高学年それぞれの情報活用能力の捉えの仮定を行い、研究を進めた。事例検討を行うなかで、情報活用能力が“教科等横断的な視点に立った資質・能力”であり、自立活動の上にくる学習の基盤となる力として位置づけられているものであることを確認した。

また、対象児童を決め事例研究をすることで、小学部段階における情報活用能力とは、**①情報を整理する力 ②人（友達を含む）から情報を得る力 ③体験をもとに情報を得る力**と定義した。

昨年度の実践から、指導において大切にしている視点として以下の5項目がまとめられた。

- ・ **意図的な環境構成**： 情報を得たり発信したりしやすくなるよう、教材教具や学習環境を整える。
- ・ **アウトプットの場づくり**： 得た情報を他者に伝える場面を意図的に設定する。
- ・ **言語能力の育成**： 適切な情報を扱うための基盤となる語彙力等を養う。
- ・ **体験・経験の重視**： 実体験を伴う「生きた言葉」としての情報を大切にする。
- ・ **興味・関心を起点としたやりとり**： 児童の興味を入口にやりとりを広げ、人のかかわりの基盤を築く。

2年計画の2年目となる今年度は、昨年度定義した「小学部段階における情報活用能力」と「指導の視点」を具体的な授業実践の中でどのように具現化していくかに焦点を当てる。具体的には、各教科や自立活動等の指導場面において、どのような環境で情報活用能力が発揮され、どのような手立てによってその力が育まれるのかを抽出・整理する。児童が情報を整理し、人や体験から情報を得て、それを活用・発信する一連の学習プロセスを可視化することで、小学部段階における効果的な指導・支援の方法の検討、実践を目指す。

3 研究目標について

昨年度は、「情報活用能力」の定義について文献研究を行うことや、対象児童を設定して事例研究を行うことで、低学年段階と高学年段階の児童に対して教師の支援などを中心に研究を深めた。一方で、小学部段階でのICT機器の活用方法は課題が残り、ICT機器を「情報手段」として活用するためには、どのような支援・指導をしていくべきか検討をしていく必要があるとの引継ぎがあった。また、低学年・高学年の情報活用能力の捉えが仮定のままであり、児童の生活年齢、もっている経験を意識した情報の扱い（精選、提示、発信の場の設定）を明確にすることや、「情報活用能力」と各教科の関連性を再確認の上、授業場面を検討することなどが課題にあがった。そこで、今年度の目標は以下のように設

定した。

- (1) 本校小学部の児童に必要な“情報活用能力”を育成するための方法や、授業における ICT 活用について検討する。
- (2) 授業研究等の実践を通して、児童の“情報活用能力”を高める。

今年度は、昨年度の研究を踏襲しつつ、新たな視点で授業において活用していくことを目指し、小学部中・高学年グループと低学年グループの 2 グループ体制で昨年度の仮説について授業実践を通して検証していく。

4 研究内容及び方法

昨年度定義した「小学部における情報活用能力」と「指導において大切にしたい視点」を基盤とし、以下の内容及び方法で研究を進める。

- (1) 全体での共通理解と知見の共有
 - ・昨年度の研究成果の振り返りおよび今年度の目標の共通確認。
 - ・学習会や座談会形式による授業改善ディスカッションの実施。
 - ・各グループで見出した「良い実践事例」のシェア。
- (2) 「生活」における授業実践と ICT 活用
 - ・低学年、中・高学年の各グループにおいて、「生活」の授業を対象とした授業研究を実施する。
 - ・各児童の特性に応じた、情報手段としての ICT 活用の在り方を検証する。
- (3) 学習プロセスに基づいた AAR サイクルの活用
 - ・「情報活用能力ベーシック」の学習プロセス（課題の設定、情報の収集、整析、まとめ・表現、振り返り・改善）を枠組みとして活用する。
 - ・AAR サイクル（Anticipation：予見、Action：実行、Reflection：振り返り）を用い、一連のプロセスにおいて児童の力がどのように発揮されたかを分析する。
- (4) 教科等横断的な関連性の整理
 - ・「情報活用能力」と各教科の目標・内容との関連性を再確認し、他教科でも生かせる指導場面の抽出を行う。

5 研究計画

5月 8日	第1回全体研究会 今年度の研究について（提案）
5月16日	学部研①学部全体 今年度の研究について（提案） グループに分かれて方向性と授業実践のディスカッション
5月30日	学部研②－グループに分かれての研究 授業CTからの困り感・課題に対して改善策ディスカッション
7月25日	学部研③－学部全体、グループに分かれての研究 学部研②を受けての実践報告、良い実践のシェア
8月21日	第2回全体研究会（中間報告） 低学年グループの実践をメインに発表
8月27日	学部研④－学部全体 「ICT活用」「情報活用能力」の学習会
9月12日	学部研⑤－グループに分かれて研究

10月23日	学部研⑥－グループに分かれての研究
12月4日	学部研⑦－グループに分かれての研究（前半） 学部全体（後半） それぞれのグループからの実践報告
12月25日	学部研⑧－学部全体 学部研究のまとめと来年度の方向性について
1月15日	学部研⑨－学部全体 全体研に向けて

6 研究実践（小学部中・高学年グループ、低学年グループのそれぞれの研究実践）

（1）小学部中・高学年グループの研究について

本グループでは小学部3年から6年の教師で研究を行い、昨年度の研究を引き継ぎさらに深めていくためにどの授業を研究対象として取り上げるかを検討した。3、4年と5、6年に分かれている授業が多い中、情報活用能力の育成、ICT機器の活用という視点を取り入れた単元を構成していくにあたり、より適している授業として今年度は5、6年の生活科Iグループにおいて検証することとした。

① 生活科Iグループの実態

本校小学部5・6年生の児童は6名で、知的障害学級に4名、重複障害学級に2名が在籍している。生活科も同じメンバーで学習しており、自分の考えを伝えたり調べたりできる児童、書字が難しい児童、作業的な学習は教師の支援を必要とする児童などがおり、ワークシートもいくつかパターンを作って実態に応じた学習を進めている。高学年ということもあり落ち着いてCTの話の聞いたり、教材の提示に注目したりし、授業に向かう姿勢が身についてきており、学習の積み重ねの大切さを実感している。

② 児童の情報活用能力育成に向けたねらい

小学部段階において身に付けたい情報活用能力として「情報を整理する力」「人から情報を得る力」「体験をもとに情報を得る力」などの重要性が昨年度の研究で話し合われた。一方で、ICT機器の活用については十分に考察することができなかつたため、今年度は授業の中で検証していきたいと考えた。先にも述べたように、生活科Iグループでは児童の実態の幅が広く、個々に応じて教材や支援方法を工夫しているので、ICT機器の活用において支援が必要な児童Aと、ある程度自分で扱うことができる児童Bに焦点をあてて検証していく。児童2名の情報活用能力の育成に向けたねらいを以下に示す。

<情報活用能力の育成に向けたねらい>

【児童A】

教師の支援を受けながらICT機器を使って集団授業に参加し、学習内容を確認したり見通しをもったりする。

【児童B】

調べたり確認したりするのにICT機器や図鑑などを必要に応じて選択・活用し、自ら問題を解決しようとする力をはぐくむ。

③ 授業実践

ア 単元名『冬野菜を育てよう』

イ 単元計画

	学習内容
1次	種まきの準備（草取り、土づくり）
2次 ※検証場面	冬野菜について調べる （図鑑やタブレットの活用）
3次 ※検証場面	調べたことをもとにクイズを作る （野菜の特徴、種類、調理）
4次	クイズの発表 各自で調べた野菜の特徴をまとめる
5次	大根、白菜の種を蒔く
6次	収穫、試食、学習の振り返り

また、単元計画に沿って授業を組み立てていくにあたり、「情報活用能力ベーシック小学校各教科版（生活）」で示されている5つの学習プロセスの展開例を参考にした（表1）。

（表1） 情報活用能力ベーシック小学校各教科版（生活）

課題の設定	身の回りの日常の事象から様子や特徴を発見する。
情報の収集	目的を明確にしながらか調べたり体験したりして収集する。
整理・分析	自分の身の回りの自然の変化や成長の様子を比較する。
まとめ・表現	伝える相手や伝える目的を明確にしながらか様々な方法で発信する。 自分自身や自分の生活について考え、表現したり周りに働きかけてより良くしようと創造したりする。
振り返り・改善	自分自身の生活や成長を振り返る。

ウ 授業の様子及び研究会で話し合われたこと

単元計画の2・3次「冬野菜について調べる」授業を研究の検証場面として取り上げた。先にも述べたようにグループ研究では、動画を見ながら授業や児童の様子を話し合う中で、効果的なICT機器の活用方法に焦点をあて、併せて情報活用能力を意識した授業展開についても意見交換を行った。

【児童A】

日常生活場面において教師による介助を必要とする児童であり、朝の会の進行をタブレット内のアプリ「指電話メモリ」を使用して行っている。画面をタッチするとイラストや音声が出るものであり、繰り返し使用することで児童Aも自ら手で触れようとする様子が見られるようになってきている。生活の授業では、「DropTap」というアプリを使用し、児童が画面をタッチすることによって野菜の写真が現れ、名前を音声で聞いたり、形や色を確認したりすることができた。冬野菜を他の児童と同じように調べることは難しかったが、児童Aのねらいにあるとおり、ICT機器を活用することで集団授業に落ち着いて参加し、学習に見通しをもつことについては達成できたと思われる。話し合いの中で、児童Aにとってタブレットは身近な存在であり、手で触れるとリアクションが返ってくことでやることがわかりやすかったり、目の前の画面を注視することで関心が向きやすか


ったりという点から有効であるということが挙げられた。学習活動全体において、このような ICT 機器に親しむ経験を積み重ねていき、将来的に様々な社会活動や余暇活動につなげていけるとよい。

【児童Aの場合】

- ・彼の情報活用能力育成、といわれて やりたいこと
- 「見通しをもって、わかって活動にのぞむこと」

・いろんな場面で、このためにいろんな手立てや本児が見通しをもてる活動を用意している

ICTをつかえないか？



→クリックをすると「だいこん」と発声できる

この仕組みをつくり、教員とやりとりしながら、活動に見通しをもってたのしく活動した

②何したのか、どうだったのか

【児童Aの場合】 どうだったのか

・注視すべきもの、操作すべきものが手元にくる
→関心が向きやすい、持続しやすい

・他の場面でもこういった活動に取り組む
→この形の活動に慣れる、ちょっと高度なことも？
→見通せる活動の幅も広がっていけば・・・
→いろんな社会活動や余暇にもつながる かも

【児童 B】

1学期に春野菜を調べた際には図鑑を選んでいましたが、2学期はタブレットを選択して学習を進めた。タブレットの扱い方を教師と確認しながら、検索サイトを使って教師が指定したキーワード「ふゆやさい」を入力して調べた。文章の読み取りに課題があるため、「画像」を見るようにアドバイスすると、自分で気付いたことを教師に伝える様子が見られた。調べた野菜の特徴（名前、色、形など）について、頭の中でイメージはあるようだが、それを言葉で表現することの困難さを感じた。必要な情報を抽出することは難しかったが、得意な絵を描く中で教師と一緒に確認しながらそれをもとにクイズの問題を作成することができた。児童Bにとって図鑑もタブレットも情報量が多いため、閲覧する範囲を指定したり、サイトを限定したりする支援が必要であった。情報を収集し、適切な内容、表現、タイミングで伝える力を学習の中で身に付けていけるとよい。


【児童Bの場合】

- ・彼の情報活用能力育成、といわれて 生活科でやりたいこと
- 「調べる手段を選択し、調べたことを活用し問題を解決しようとする」

【児童Bの場合】 なにをしたのか

- ・冬野菜についてipadで調べる
- ・調べたことをクイズにする
- ・みんなに出題する

「情報活用能力育成のプロセス」を踏みつつ、ICTも活用した



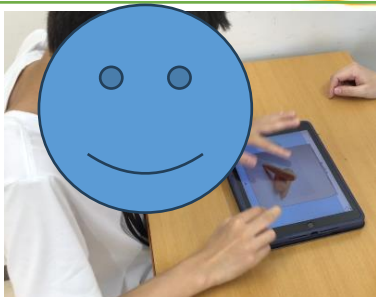
②何したのか、どうだったのか

【児童Bの場合】 どうだったのか

・調べる手段にタブレットを選んだ（1学期は図鑑を選んだ）
→手段の拡大

・画像で調べる
→文章だとわからなくても これなら！（“合理的配慮”的）
・気付いたことを教員に伝える姿もみられた
→情報活用能力が育成されるプロセス「整理・分析」に該当

→収集した情報をもとに、適切に表現する、という経験を重ねたい



④ グループ研究を通して

普段から家庭で ICT 機器に触れている児童もいれば、学校以外ではほとんど自分で触れることがない児童もいる中で、授業でどのように ICT 機器を活用していくか、情報活用能力を高めるための学習指導を展開していくか、難しさを感じながら試行錯誤を繰り返してきた。その中でも ICT 機器を使用してみることで有効であった児童もいたため、きっかけを作っていくことの大切さを感じた。

今回、授業研究をする上で2名の児童を取り上げて文章にまとめたが、グループ研究では他の児童についても授業内で使用した教材や学習の進め方などを取り上げ、話し合いが行われた。実態の幅が大きい授業グループなので、特に情報活用能力という視点においては、単元や題材は同じであってもアプローチ方法はそれぞれに合ったものを準備していく必要があった。

そこで、学習内容を検討するにあたりグループ研究の中で横断的な学習を視野に入れて進めていくことを確認し、意見を出し合った。朝の会の進行でタブレットのアプリを使用したり、筆記が難しい児童はタブレットを使った文字入力の学習を進めたりと、様々な授業において ICT 機器を取り入れることで、生活の授業でもスムーズに学習に入ることができた。また、国語でもものの特徴を言葉で表す学習をクイズ形式で行っていたことを活かして、冬野菜の特徴を表現するのに同じ方法で取り組んだ。他教科と連携することによって学習に見通しをもち、考え方や捉え方を応用していくことが重要であると改めて確認された。

最後に、小学部段階で情報収集の力を育てるために、やはり実体験や実物にふれて五感で確かめることを重視していきたいとの意見が出された。今年度、情報活用能力を育成する指導場面として ICT 機器の活用場面を取り上げたが、②で述べたように昨年度の研究で話し合われた「身に付けたい力」を高めていかないと、次のステップに進むことは難しいと感じた。そのような視点を根底に置いた上で ICT 機器についても授業内で適宜取り扱うようにし、効果的な活用方法を教師間で随時情報共有できるとよい。様々な媒体がある中で、自分で情報を得るためのツールを選択できるようにし、経験を積み重ねていく。児童の実態や学習場面に応じて実物や図鑑、タブレットなどを活用し、必要な情報を収集・整理して適切なタイミングや方法で発信していく力を付けていきたい。

(2) 小学部低学年グループの研究について

① グループの実態について

本校小学部1・2年生の児童は全員知的障害を有している。うち2名は医療的ケアを必要とし、車いすを使用している。低学年という発達段階から、体力や集中力の持続に課題がある児童も多く、認知・言語・コミュニケーション面での実態差も大きい。

学習集団は発語があり認知面が比較的高い2年生中心の「3グループ(4名)」と、喃語段階の1～2年生で構成される「4グループ(4名)」に分けて「生活」の指導を行っている。また、単元によっては8名合同で学習する機会も設けている。

② ICTの活用や授業づくりに関する課題について

1学期は、教師それぞれが感じている ICT 活用の難しさや、担当している授業に関し

ての困り感などについて座談会形式でディスカッションを行った。ICT 活用に関しては、生徒用 iPad が児童にとっては重く持ち運びに向かないこと、写真を撮るなどの操作がしづらく教師の支援が必要であること、児童が操作しやすい無料アプリがあっても広告が多く授業に向かないことなどの話題が出された。教師の活用に関しては、動画再生に関する適切な無料アプリが少ないこと、授業の導入等でスライドを映してもスクリーンに目を向けられない児童がいることなどの意見が出された。ICT 活用に関しては、よりよい授業づくりの一助として、教師がメインで操作や活用を行い、様々な形で児童が ICT に触れる機会を作ること、情報活用能力を高めていく形で良いのではないかという共通確認がなされた。

スクリーンやテレビに注目しづらい児童に関しては、紙媒体を近くで見せたり、PC の画面を目の前で見せたり、スライドに効果音をつけることで注目を促す、というアイデアが出され、実際に授業で活用した。見続けることが難しい児童にとっては有効的で、スクリーンや CT に視線を向けられることが増えた。

③ 情報活用ベーシックの段階における支援やアイデアについて

夏季の全体研究会を経て、これまで研究を行ってきた児童にとっての「情報活用能力」が主に、情報活用能力ベーシックにおける「①課題の設定」、「②情報の収集」という‘インプット（情報を得る）’の段階ではないかということに気付いた。そこで、2 学期以降の研究においては情報活用能力ベーシックにおける「③整理・分析」「④まとめ・表現」「⑤振り返り・改善」の‘アウトプット（表出）’の段階について AAR サイクルで研究を行うことを確認した。（※図 1 参照）



(図 1) 情報活用能力ベーシック

(a) 情報活用能力ベーシックにおける「③整理・分析」について

小学校各教科版情報活用能力ベーシック「生活」において、「自分や身の回りの自然の変化や成長の様子を比較する」とあるが、小学部低学年段階の児童が対話によって多面的・多角的に捉えることや自分の考えを形成するのは難しい。そこで、教員側で植物などの生長の変化や比較については、これまで行ってきた「生活ファイル」を活用して、実物や写真等の記録を比較することで、違いや変化を分かりやすく伝える形で良いという確認を行った。また、実体験（触る、食べる、においを嗅ぐなど）を伴う活動を行ったり、変化が分かりやすい題材（ミニトマトなど分かりやすい）を扱ったりすることで、児童の変化や成長を引き出し、評価できるのではないかとの意見が出された。また、理解力の高い児童には授業の感想を書かせることや、「おもしろかった」「つまらなかった」「またやりたい」「おなじ」「ちがう」などの選択肢から感想を選ばせることなどのアイデアも出された。

(b) 情報活用能力ベーシック「④まとめ・表現」について

小学校各教科版情報活用能力ベーシック「生活」において、「伝える相手や伝える目的

を明確にしながら様々な方法で発信する」「自分自身や自分の生活について考え、表現したり周りに働きかけてより良くしようと創造したりする」と示されている。この段階は、児童からの‘アウトプット（表出）’として最も大切にしたいプロセスである。伝えたい内容を明確にする、思いや意図が伝わるような適切な語句や表現を工夫して伝えることも、すべての教科を通して課題解決に向けて必要な段階でもある。低学年の教員間で、児童自身からの自発的な発信を促すために、2学期に行う単元「絵本遊び」に焦点を絞り様々な工夫や支援方法について考えた。

【「絵本遊び」におけるアイデアや支援方法】…AARサイクルの「見通し」

- ・ 絵本を見る→実際にその絵本に描かれている動きやお話をやってみる。
体験ができると楽しい！
- ・ 絵本は簡単で分かりやすいものから扱う（『おしくら・まんじゅう』『おせんべやけたかな』『りんごがどすん』『あぶくたった』等）
- ・ 発展して遊べそうな絵本の選定をする（『でんしゃはっしやしーす』『パンダくんのおにぎり』等）
- ・ 動きのある遊びができるようにする
- ・ 絵本を読んでいる間に動いたり、決まった台詞を発したりするとよい
- ・ 児童同士がかかわれる遊びを行う
- ・ はじめは教師とのかかわり、次に教師を介して児童同士のかかわり、人数を増やして児童同士のかかわり、とかかわり方の幅を広げていく
- ・ 表情や発声を促すかかわりや、個々の見やすさに配慮した提示の仕方（大型絵本を用いる、ペープサートで示す、スライドと紙芝居を併用する等）を工夫する

(c) 情報活用能力ベーシック「⑤振り返り・改善」について

小学校各教科版情報活用能力ベーシック「生活」において、「自分自身の生活や成長を振り返る」と示されており、概要においては「学習した内容を自分の言葉でまとめる」「自分の学習方法を評価・改善し、次に生かす」「自身の変化や成長について振り返る」とあるが、小学部低学年段階の児童は自分で行うのは難しい児童が多い。そこで、タブレットで撮った動画を授業の終わりに振り返りで使う、児童の成長を褒める、前回の授業の様子を次の授業の導入で見せる、などの工夫により、児童自身が振り返りやすくなるのではないかという意見が出て、実際に実践を行った。また、認知力の高い児童であれば、学習した内容を自分の言葉でまとめることは可能であるので、授業の終わりに感想発表をすることや振り返りワークシートを作成することなどにも取り組んでもよいのではないかという意見も出された。

④ 「絵本遊び」の単元における研究実践

情報活用ベーシックの「整理・分析」「まとめ・表現」「振り返り・改善」の部分についてAARサイクルで研究を行った。特に「表現」の部分について、「このような表出をしてほしい」「このような姿を目指したい」というイメージを児童それぞれ、担任を中心に教員間で話し合った。そこで出た意見を次頁にまとめた。

…AARサイクルの「見通し」

児童名	実態と課題	「絵本遊び」の単元での目指す姿・目標
C 1年	経験が少なく自分からの表出が少ない	様々な経験をすることでできることを増やす、友達や教師と多くかかわることで自分からの表出を増やす
D 1年	模倣が上手、活動を拒否することもあるが切り替えも早い	教師を介して友達とかかわる経験を増やし、良い行動が模倣できるとよい
E 2年	一斉指示が分かりづらく前の画面に注目しづらい	自分の役割に合った動きをする、簡単な因果関係が分かるとよい
F 2年	好奇心が旺盛だが、場にそぐわない行動をすることがある、CTに注目できる	読んだ本の中から好きな本を選ぶ、どんなキャラクターが出てきたかが分かる
G 2年	自分のペースでやりたがり、周りの友達に合わせられないことがある	遊びのルールが分かり、友達に呼びかけをしたり、せりふを覚えたりする
H 2年	理解力は高いが、やりとりが成立しにくい	国語とタイアップしながら学習を進め、語彙力を身に付けたり話の内容を理解したりする
I 2年	理解力は高いが、友達と活動を共有できないことがある、車いす使用	友達と触れ合ったり、本の遊びを実際にみんなでやって楽しんだりする経験をさせる
J 2年	自閉的傾向が強いが、関心がもてたら見て活動ができる	友達を意識して遊ぶ、遊びの中で主体性が出るとよい

⑤ 実践と評価について…AARサイクルの「行動・表現」

「絵本遊び」における実践で、目指す姿・目標として一番中核になったのは「友達とのかかわり」であった。どの児童においても適切なかかわりを中心としてそれぞれ、経験を積む、役割やルールが分かる、楽しさを感じる、ストーリーが分かるなどの目標が設定された。

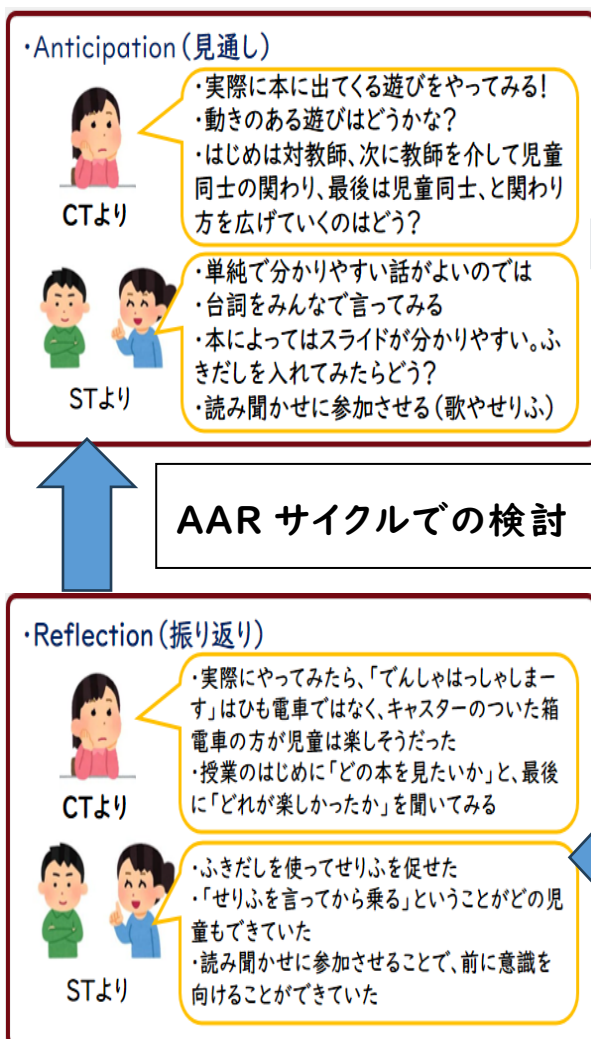
研究会で出た様々な意見やアイデアを基に、児童が関心を示しやすく程よい長さの絵本を選定した。CT 2人がそれぞれ「読み聞かせ」、「遊びのルール説明」と役割分担し、授業にメリハリをもたせた。読み聞かせの間に、皆で一緒に決まった台詞を言ったり歌を歌ったりする活動を設定することで関心を持続させることができた。読み聞かせ後には、どのような話であったか、どのような登場人物がいたかを振り返り、同じストーリーで遊ぶことを伝え、期待感をもたせた。絵本『おしくら・まんじゅう』や『あぶくたった』では、わらべ歌に合わせて実際に友達同士でかかわる遊びを行った。絵本『パンダくんのおにぎり』では、転がっていったおにぎりをみんなで探す、という設定で別室におにぎりの模型を複数隠し、「宝探し」のような感覚で楽しんでおにぎりを探せるよう、場を設定した。おにぎりを見つけづらい児童は、別室で分かりやすい状況で探したり、順番を前にして少人数で探したりするなど、個に応じた配慮を行った。おにぎりをムーブメントスカーフにくるみ、そのスカーフがヒントになるように隠したり、最後の授業ではおにぎりの中におやつを入れ、みんなで食べたりする経験もした。絵本『でんしゃはっしやしまーす』では、紙芝居とスライドの両方用意をしたが、教室を暗くすること、見やすい高さのホワイトボードに投影すること、絵本のイラストにふきだしの効果を入れることなどの工夫

をすることで、児童にとって情報が活用でき注目しやすいことが分かった。電車を運転する主人公の「あかりちゃん」のせりふ「乗る人いますか？」や、乗客の動物たちが発するせりふ「乗せて」と応答のせりふ「いいよ」を吹き出しのペープサートで示しながら教師が促し、児童皆で発した。児童がより楽しく電車ごっこができるよう、絵本に出てくる駅と同様の駅や、場面（トンネル、野いちごのしげみ）を用意した。導入時には二人一組で紐やフラフープを用いて電車ごっこを行っていたが、単の後半では児童が実際に乗れるキャスターがついた箱電車を用意した。児童は、箱電車の登場でより期待感をもちながら電車を待って「乗せて」と言ったり、どの車両に乗ろうか考えたり、友達と一緒に遊ぶ経験を積むことができた。児童の評価については以下のとおりである。…AAR サイクルの「振り返り」

児童名	「絵本遊び」の単元での目指す姿・目標	評価
C 1年	様々な経験をする ことのできることを増やす 友達や教師とかかわる ことで自分からの表出 を増やす	絵本遊びを通して、教師だけではなく友達を意識している様子が見られた。自分から「やりたい」気持ちを表情等で表現できた。今後の単元も実体験を大切にしながら、様々な活動に挑戦させたい。
D 1年	教師を介して友達とか かわる経験を増やし、 良い行動が模倣できると よい	教師からの問いかけに自ら手を挙げて意欲的に参加した。ふれあい遊びでは、他の児童のかかわりを受け入れ、教師の模倣をして友達をくすぐったり優しく押したりできた。友達や示範への賞賛を他のSTが行うことで、良い行動に注目しやすくなり（インプット）、模倣（表出）につながるのではないかと。
E 2年	自分の役割に合った動 きをする 簡単な因果関係が分か るとよい	「あぶくたった」では、手をつないだり、座ってくすぐられるのを待ったりできた。電車ごっこでは、待つと乗れることが分かり期待感をもてた。インプットの時間はCTの声やイラスト、写真に注目して自ら情報を得ようとしたり、動きによる示範にも注目したりすることができるよう、見守りを行う等情報の収集の妨げになるような刺激を与えない環境設定を検討したい。
F 2年	読んだ本の中から好き な本を選ぶ どんなキャラクターが 出てきたかが分かる	読んだ本に興味をもっている様子だったが本を選ぶのは難しかった。登場人物の動物やキャラクターをよく見ていた。登場人物の動物やキャラクターのカードなどを準備しておくことで表出につながる。読み聞かせの回数を増やすことで好きな本を選んだり、登場人物を理解したりできると考えられる。
G 2年	遊びのルールが分か り、友達に呼びかけを したり、せりふを覚え たりする	絵本に注目し、教師の読み聞かせを聞いた。電車ごっこでは、促されると「乗せて」と覚えたせりふを伝えることができた。回数を重ねると自分から言うことができたかもしれない。友達の動きに合わせてたり、活動を待ったりできるとよい。
H 2年	国語とタイアップしな がら学習を進める 語彙力を身に付けたり	絵本遊びで読んだ本を国語でも興味をもって読むことができた。本の中で繰り返し使われるフレーズを自分から発言するなど、話の内容に関心を持ち理解もできていた。人数が多いと刺激になるので、

	話の内容を理解したりする	2～3人の少人数で絵本遊びをし、スモールステップで取り組んでいくのもよい。
I 2年	友達と触れ合ったり、本の遊びをみんなでやってみたりする経験をする	まわりの様子は見ている車いすでの活動なので友達とのふれあいには課題があった。絵本には関心をもて、内容の理解もできるが、遊びの中で楽しさを感じているかどうかは評価しづらい。生活の授業が楽しいと感じる授業を今後も検討していく。
J 2年	友達を意識して遊ぶ遊びの中で主体性が出るとよい	友達を意識することは難しかった。電車ごっこでは、教師と一緒に「乗せて」と伝えることができた。自分からすすんで乗ったり、野いちごのしげみに手を伸ばしたりするなど、主体的に取り組んでいた。集団ではなく、友達と1対1で遊ぶことから始めるとよい。

本単元は、絵本を通して友達とのかかわりを持ち、自ら楽しさや遊びたい気持ちを発信できることを目標に設定した。普段は4名ずつの小集団で授業を行っているが、「絵本遊び」は8名の集団で行った。合同で行うことで、より友達を意識できた児童もいた一方で、少人数の方が落ち着いて参加できてよいという意見も出された。また、これらの評価から、単元の設定についてもう少し長く設定することで、自分からの発信が増えるのではないかとということ、友達を意識することが難しい児童には教師を介してじっくりかかわることから始めること、車いすの児童にとっての環境設定や活動内容の選定を事前に十分行うことなどの課題が出された。



・Action (行動・表現) 1回目 (電車ごっこ)



・Action (行動・表現) 3回目 (電車ごっこ)



・Action (行動・表現)

自分がどの登場人物になるかを選ぶ



ふきだしの活用

⑥ 小学部低学年グループの研究のまとめ

情報活用能力についての研究を今年度も行ってきたが、「情報活用能力」を育成するには、児童の実態にあった課題を設定し、情報を得やすい（分かりやすい）環境を整えること、児童の実態に応じて情報の提示の仕方を工夫することが重要であることが改めて確認できた。ICT 活用に関しては、教師が用いることと児童が実際に触れて活用することの2つのパターンで活用が可能であることが分かった。生活の授業においては、教師がパワーポイントなどのスライドで手順や写真や動画などを示したり、生成 AI で作った画像を物語風に加工して絵本にしたり、Teams のチャット機能を使って絵本のデータを児童に送信するなどの活用を行った。児童は送られてきたデータを国語の授業で活用し、実際に iPad に触れページをめくるなど、iPad の操作を行った。生活の授業では写真を撮ったり、動画で振り返ったりする経験を積むことができた。

児童の情報活用能力を高めるためには、実態把握はもとより「情報活用ベーシック」に沿って、適切な課題の設定、情報の収集、整理・分析のプロセスが大切であることが分かった。活用にあたり、小学校版をそのまま活用することは難しかったので、難しい部分は教師が代わりに行ったり、他の方法を試行したりしながら実践した。まとめ・表現の段階において児童が自分の思いや感情を様々な方法で発信することで、私たち教師が評価を行い、振り返りや反省を経て次のステップにつなげていくことができた。より良いインプットがあればより良いアウトプットにつながるということが再確認された。

各教科の関連性については、例えば生活の「絵本遊び」の単元においてはせりふを言うこと、登場人物の整理などの観点からは「国語」、登場人物の順番や数などの観点からは「算数」、動きのある遊びの観点からは「体育」、友達とのかかわりや遊びのルールやマナーの観点からは「自立活動」「道徳」などが大きくかかわっているのではないだろうか。

今後の課題として、授業の集団規模についてメリットやデメリットを考慮し、単元ごとに考えていくことや、短期間の単元設定では発信が定着しにくいいため、単元の設定期間について検討していく必要がある。

7 研究のまとめと今後の課題

今年度は、2年計画の最終年度として生活の授業研究を中心に研究を進めた。1学期は前年度の成果を振り返りつつ、学習会や座談会形式のディスカッションを通して「ICT 活用の困難さ」や「授業構成の妥当性」について活発な意見交換を行った。中・高学年グループでは、生活①グループ、②グループの児童の実態についての確認、それぞれの児童に適切な ICT 活用について情報交換や意見交換を行った。低学年グループでは、児童が情報を得やすい環境について話し合い、スクリーンの画面を注視しづらい児童にどのような支援を行っていくのが良いか検討した。また、生活に限らず授業を担当している CT からの困り感に対して意見を交換し合ったり、設定している単元やねらいは児童に適切か否かなどのディスカッションを行ったりした。

夏季休業中には、特総研での研修報告に基づき、特別支援教育のためのプレゼン教材サイト「TeachU」の紹介や、「Padlet」と「KOMA KOMA」等のアプリの体験を行い、具体的な指導ツールとしての選択肢を広げた。また、「情報活用能力」についての学習会を通して、昭和59年～昭和62年の臨時教育審議会と教育課程審議会において初めて「情報活用

能力の育成」という観点が出され、平成2年に「情報教育に関する手引」が刊行されたこと、平成10年以降、各教科で情報の活用が推進されたこと、平成29年3月に学習指導要領に情報活用能力は「学習の基盤となる資質・能力」と位置付けられたことなど歴史的背景を再確認した。これにより、ICT活用は単なるツールとしての導入ではなく、「情報活用能力」を育むための手段であるという、本研究の根幹となる認識を再定義した。

2学期以降は、「生活」の授業研究を中心に研究を進めた。それぞれのグループで情報活用能力ベーシックの概要を用いて、課題解決に向けた段階ごとにおける支援や情報活用について考察した。

ICT活用に関して中・高学年グループでは実態差のある二人の児童を取り上げ、それぞれの実態に合ったICT活用について検討、実践した。児童の実態から適切な学習場面に応じて活用すること、効果的な活用方法を教師間で確認することが大切であると確認された。一方、低学年グループでは児童が自らICT機器を操作することは難しく、教師側で適切な場面、適切な方法で適宜授業に取り入れる、教師主導の視覚的・体験的な情報定時ツールとしての活用のあり方を明確にした。

児童の“情報活用能力”を高めるためには、実態把握を適切に行うこと、それぞれの児童の「身に付けさせたい力」を明確にし、目標に沿った手立てを考えていくこと、情報を得やすい環境を整えること、評価を基に次の支援について考えていく各プロセスが大切であること、学習プロセスを構造化し、教師側が行う支援と、児童が自ら取り組むべき活動が明確化された。また、「実体験に勝る情報はない」という確信のもと、良いインプットが児童の豊かなアウトプットにつながるということが一連の授業研究で実証された。

今年度は学部全員で話し合いができ良い実践についてシェアできたこと、学習会を行えたこと、情報活用能力育成のプロセスについて小学校版を基に整理ができたこと、対象授業だけではなく、他の教科との関連性の中で情報活用能力を育成する視点をもつことができた。

課題としては、特別支援学校や幼稚園などにおいて先行研究や文献が少なく、小学校段階の指標を参考に研究を行ったが、ねらいに対して達成が不十分な場面も生じたことである。今後は本研究で得られた2年間の成果を土台とし、児童一人一人の実態に応じた支援を今後も行っていく必要がある。教師自身もICT機器を含め様々な情報手段を活用できるスキルを高め、小学部の児童がより主体的に情報を活用し、社会とつながる力を育てるよう、日々の授業改善に努めていきたい。

<参考文献>

一般社団法人 日本教育情報化振興（JAPET&CEC）（2021年3月）「情報活用能力ベーシック小学校版」

松岡達英（2012年）「でんしゃはっしやしまーす」偕成社

いしかわこうじ（2009年）「パンダくんのおにぎり」PHP研究所

かがくいひろし（2009年）「おしくら・まんじゅう」ブロンズ新社

さいとうしのぶ（2013年）「あぶくたった（うたの絵本）」ひさかたチャイルド

「中学部」 研究グループ

1 研究テーマ

情報活用能力に着目した授業づくり
～課題解決に向けた「まとめ・表現」「振り返り・改善」の学習プロセスに着目して～

2 研究テーマについて

今年度の中学部は11名の生徒が在籍している。1年生が2名、2年生が3名、3年生が6名である。知的単一障害、主障害が知的障害の重複障害、知的障害を併せ有する肢体不自由の教育課程にて学習しており、それぞれの理解度や生活年齢に配慮しながらグルーピングし、指導計画に基づき各授業を行っている。中学部主事、教務主任と7名の担任を合わせ9名の教師で生徒の変容や学習状況などについて共通確認を図りながら日々指導にあたっている。休み時間には一つの遊びに「おもしろそう」という気持ちを持ち、学年を超えての参加が見られている。また、学部長を中心に3年生が下級生を思いやるような行動が少しずつみられるようになってきた。

昨年度の研究において情報機器使用を含めた情報活用能力育成について考えてきた。情報機器を使用しながら2名の生徒の「情報発信スキル」について考えていった。発語に課題のある生徒については情報機器の使用が非常に有効であった。その反面、生徒の課題について「どのように伸ばしたいか」、情報機器を使用して「どの力を伸ばしたいか」を教師が明確に設定する重要性もあった。また、情報活用能力のどのスキルを育成するかの見取りの視点をもっていることも重要であると改めて分かった。さらに教師間の見取りのみではなく客観的に評価できるような体系表などのツールの必要性についても課題が残った。

これを受け今年度は情報機器使用を含めた、(あえて使用しようという姿勢とはしない)情報活用能力育成に向けた授業づくり(集団授業)の取り組みを行うこととする。指導についてはこれまでの中学部の教科指導の蓄積から指導の手立てを整理し、情報活用能力育成に有効な手立てを考えていくこととしたい。そして生徒が得た情報をどう受け取り活用するかについて見ていきたい。

可視化したい情報活用能力については「情報活用能力ベーシック」に示された学習プロセスを用いて見ていくこととする。学習プロセスに基づいたどの情報活用能力を伸ばしたいかの可視化つまり、教科における単元の中で必要な情報の整理を行い、どのような情報を生徒へ示すかについて考えたい。その上で可視化されたスキルを育成するための手立ての検証、考察を行う。実践後は、有効であったこと、指導上で大切にしたいことをまとめていきながら本研究の成果と課題を明確にしていく。

3 研究目標

(1) 情報活用能力育成のための手立てを教師間で考察、実践、検証していきながら育成のための手立てを探る。そして手立てが生徒の情報活用能力育成へ妥当であったか検

討し、授業改善を行い、教師の指導力向上を図る。

(2) 指導実践や生徒の学習の様子を教師間で共有して、行った指導に対しての評価を複数の教師で行い、日々の学習場面や生活場面に反映させることで、生徒に対する深い理解を進める。

4 研究内容及び方法

(1) 学習プロセスを明確にし、生徒が「学んだことをどう表現するか」に着目した授業実践を行う。

(2) 生徒が学んだことを表現できるような環境設定、指導の手立てについて整理、検討する。また、生徒の表現(行動)の変容から、研究の成果としてその要因と有効な支援を検討する。

(3) 研究成果を日常生活場面や他教科へ般化させ、成果と課題を明確にする。

5 研究経過

	日にち	内容
研究日①	5月16日(金)	学部研究テーマ、研究体制・対象教科の確認を行う。
研究日②	5月30日(金)	対象グループの実態把握、指導すべきところの抽出、見取りを行う学習プロセス検討する。
研究日③	7月25日(金)	授業実践①授業動画の振り返りを行う。
全体研究会	8月22日(木)	全体研究会
研究日④	8月27日(水)	授業実践②授業検討会(手元教材の検討、動き出しのヒントの出し方について共有する。)
研究日⑤	9月12日(金)	授業実践③「授業づくり」プロセスについての共有。社会「身近な地域について知ろう」の単元計画について共有、育成したい情報活用能力「アウトプット」についていつ、どのように評価するかについて検討する。
研究日⑥	10月23日(木)	授業実践④・授業実践の評価① 社会「身近な地域について知ろう」について生徒の様子の変容の見取りから情報活用能力について評価する。他教科等への般化についての共有を図る。
研究日⑦	11月6日(木)	授業実践の評価② 社会「身近な地域について知ろう」について生徒の様子の変容の見取りから情報活用能力について評価する。他教科等への般化についての共有を図る。

研究日⑧	12月9日(火)	授業実践の評価③・研究のまとめ① 生徒の変容をまとめ、有効な手立てについて整理する。
研究日⑨	12月25日(木)	研究のまとめ② 2年間の研究について総括する。
研究日⑩	1月15日(木)	研究のまとめ最終確認 来年度に向けて方向性の確認をとる。

6 研究実践

(1) 研究対象教科とグループについて

中学部の学習グループについては3つのグループに分かれて学習している。「軽度知的障害」「重度知的障害」「重複障害」となっている。その中でも重度知的障害の生徒への授業づくりはすべての生徒の授業づくりへも般化できると考えた。重度知的障害の生徒にとっての「理科・社会」について考えていき、情報活用能力育成に有効な手立てを考えていくこととした。

(2) グループの実態把握

グループについて
理科・社会 A グループ 4名 中学部2年生 2名(男子1名女子1名) 中学部3年生 2名(男子2名)
<ul style="list-style-type: none"> ・周囲の様子をよく見ている、変化によく気付く、音への気付きがよい。 ・生活と関連付けながら情報を得て行動している、活動を固定すれば理解が進む。 ・発信の課題のある生徒がどこまで理解しているか判断しにくい、「自分から」を増やしたい。 ・提示する情報の精選が必要となり、CTから情報を得ようとする力の課題がある。

授業づくりにおいて教師が心掛けていること
<ul style="list-style-type: none"> ・教材の工夫(写真や画像と文字のバランス)、過集中を防ぐために画像のみの提示 ・選択肢の提示の際に Drop Tap を使用している(意思表示)。手本となる生徒の抽出、見るべき情報を整理している。 ・指示を端的に、わかりやすく明確に出している。 ・単元計画を長めに設定し、繰り返し発展的に学ぶことで自発的な動きを促している。

これらを受け、以下5点に留意しながら授業づくりを行うこととした。

<p>環境設定を丁寧に行う</p> <p>CTの話で行動に移せるように関わるSTの役割についても精選する</p> <p>授業へ向かう力の向上</p> <p>自分から表現する力を育てる</p> <p>単元計画の長めに設定し授業における活動を発展的に繰り返すことで定着させていく</p>

(3) 育成したい情報活用能力、学習プロセスについて

グループの強みと課題を確認しながら育成したい情報活用能力について考えていった。授業づくりにおいて大切にしたい前述の5点についてどの学習プロセスにて育成できるかを「情報活用能力ベーシック」の中に合わせていった。「生徒が学習の中で学んだことをどのように表現するか」つまり、授業で得た情報の「アウトプット」をする情報活用能力を育成し、その評価を生徒の変容を授業者のみではなく学部全体で見取りながら行うこととした。「情報活用能力ベーシック」では「まとめ・表現」「振り返り・改善」のプロセスであることが確認され、理科・社会の授業の中で見取りを行うこととなった。



図 情報活用能力ベーシック小学校版

(4) 社会「身近な地域を知ろう」の授業実践

① 単元計画・評価基準

教科	社会科 Aグループ	単元名	身近な地域について知ろう ～地域の祭～	指導時期 指導時数	9月 5時間
単元	知識及び技能		・身近な地域で行われている祭を模擬的に体験し、名称や大まかな特色を知る。		

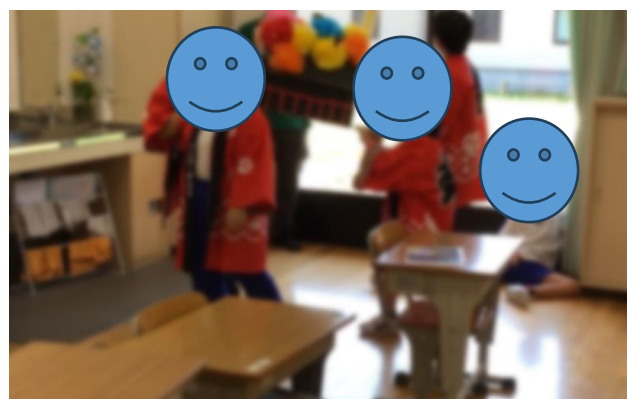
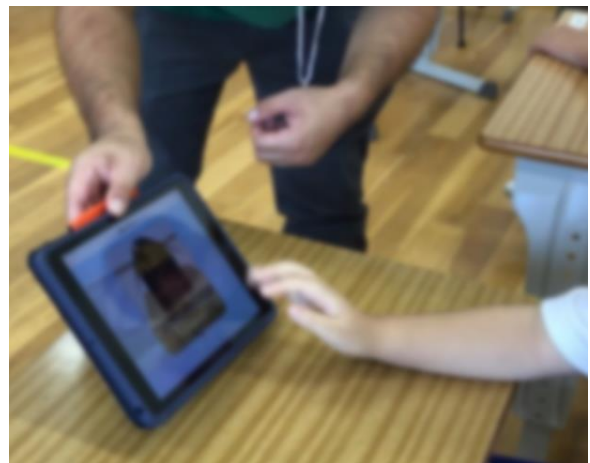
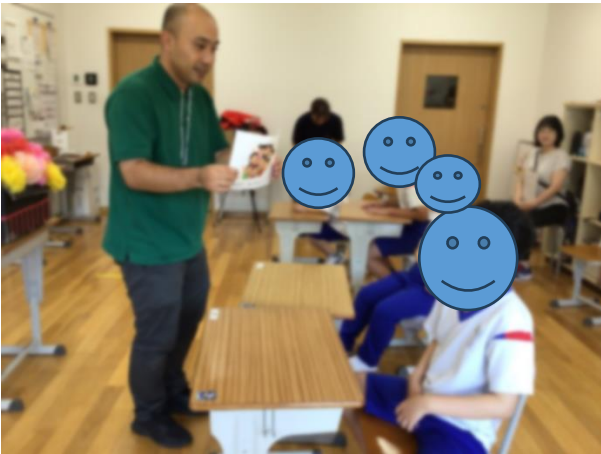
目標	思考力・判断力・ 表現力	・それぞれの祭りの特色に合わせて、体を動かしたり道具を操作したりして表現する。
	学びに向かう力・ 人間性等	・地域で行われている行事に興味関心をもちながら、学習に取り組む。
評価 規準	知識・技能	・身近な地域で行われている祭を模擬的に体験し、いくつかの選択肢から関連する道具やポスターを選んでいる。
	思考・判断・表現	・動画や音楽に合わせて、体を動かしたり道具を操作したりして祭りの雰囲気表現している。
	主体的に学習に 取り組む態度	・地域で行われている行事に興味関心をもちながら、動画を見たり道具を操作したりしている。

時間	ねらい	主な学習内容	評価方法と評価規準
1	<ul style="list-style-type: none"> ・身近な地域で行われている祭りの特色について知る。 ・動画や画像を見て、祭りに関連する道具について、選ぶ。 ・地域の祭りについて興味・関心をもち、それぞれの違いを感じたり表現しようとしていたりしている。 	<ul style="list-style-type: none"> ○大月市・都留市・上野原市の祭 ・動画を見る ・それぞれの祭に関する道具を選ぶ 	<ul style="list-style-type: none"> 知 動画に注目し、それぞれの祭の特色に気付いている。 思 扇子や神輿等、それぞれの祭と関連する道具を選んでいる。 学 自分なりに祭の雰囲気を感じたり、表現しようとしていたりしている。
1	<ul style="list-style-type: none"> ・獅子舞や八朔祭の名称について知る。 ・獅子舞の役割（露払い、無病息災）を表現しようとする。 ・都留市の八朔祭に興味・関心をもち、進んで学習に取り組もうとする。 	<ul style="list-style-type: none"> ○都留市～八朔祭～ ・獅子舞の名称について知る ・獅子舞の役割（露払い、無病息災）について知る 	<ul style="list-style-type: none"> 知 獅子舞や八朔祭の名称について知っている。 知 2つの画像を見比べて獅子舞や八朔祭のポスターを選んだりしている。 思 獅子舞の役割を表現しようとしている。

			<p>学 八朔祭に興味・関心を持ち、自ら進んで学習に取り組んでいる。</p>
1	<ul style="list-style-type: none"> ・神輿や牛倉神社例大祭の名称について知る。 ・友達と協力して、牛倉神社例大祭の雰囲気表現しようとしている。 ・上野原市の牛倉神社祭に興味・関心を持ちながら、意欲的に学習に取り組もうとする。 	<p>○上野原市～牛倉神社例大祭～</p> <ul style="list-style-type: none"> ・神輿の名称について知る ・神輿を飾ってみよう ・みんなで担いで歩こう 	<p>知 神輿の名称や牛倉神社例大祭の名称について知っている。</p> <p>知 2つの画像を見比べて神輿や牛倉神社例大祭のポスターを選んだりしている。</p> <p>思 神輿を飾ったり担いだりして、祭の雰囲気表現しようとしている。</p> <p>学 牛倉神社例大祭に興味・関心を持ち、意欲的に学習に取り組んでいる。</p>
1	<ul style="list-style-type: none"> ・阿波踊りやかがり火祭の名称について知る。 ・かがり火祭の特色を感じ、祭の雰囲気表現しようとしている。 ・大月市のかがり火祭に興味・関心を持ちながら、進んで活動に参加しようとする。 	<p>○大月市～かがり火祭～</p> <ul style="list-style-type: none"> ・編み笠をつくろう ・阿波踊りの名称について知る ・阿波踊りをやってみよう 	<p>知 阿波踊りやかがり火祭の名称について知っている。</p> <p>知 2つの画像を見比べて神輿や牛倉神社例大祭のポスターを選んだりしている。</p> <p>思 音楽に合わせて体を動かし、阿波踊りを表現しようとしている。</p> <p>学 大月市のかがり火祭に興味・関心を持ちながら、進んで活動に参加しようとする。</p>
1	<ul style="list-style-type: none"> ・身近な地域で行われている祭りの特色について振り返る。 ・自分が好きな祭を選んだり、身近な地域との関連について考えたりする。 	<p>○大月市・都留市・上野原市の祭</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分が好きな祭を選ぼう。 ・身近な地域の祭 	<p>知 3つの市で行われている祭りの名称や特色について知っている。</p> <p>知 祭に関連する道具を見て、縁のある祭のポスターを選んでいる。</p>

	<p>・地域の祭について興味・関心をもち、積極的に学習に取り組もうとする。</p>		<p>思それぞれの祭が行われている市やその市に住んでいる友達について発表している。</p> <p>思3つの選択肢から好きな祭を選び、自分なりに表現しようとしている。</p> <p>学地域の祭について興味・関心をもち、積極的に学習に取り組んでいる。</p>
--	---	--	--

②実践の様子



③生徒のアウトプットの様子の変容・手立て・評価

生徒 A のねらい 学習の様子	手立て	評価
<ul style="list-style-type: none"> ・どんな活動をすべきか分かれば教師がいなくても自らできる。 ・教師や友達のやっている様子を一通り見せ、最初は直接的な支援を行う。その後は自分でもやってみようという気持ちをもつことができるようになった。そのことにより見守りでの支援で活動できることも増えている。 ・受け入れられる範囲は広がってきている。 ・場面や人が変わることににより気持ちの切り替えをしていく。 	<ul style="list-style-type: none"> ・順番を最後にする。最初は直接的な支援から行い、段階的に支援を減らして見守る。 ・気持ちが落ち着けるような場面をつくる。 ・本人が参加できる活動を提示する。初回は見学してよく見せる。 ・本人がやろうとしていることを教師と共にやる。 ・好きな声かけ、気持ちを活動に向けることができるようになるような擬音語を使う。 ・聴覚優位であるからこそ言葉かけの精選を行うことが重要である。 	<ul style="list-style-type: none"> ・初めてのことについて、教師と一緒にできた。自分でもできそうというところで、教師が支援をやめても一人でできる。 ・「わっしょい」「まつり」の学習ということは知識としてはつながってきている。 ・自分なりにできるところを探して、自分の中に落とし込みながら行動に移している。 ・授業の中のキーワードはよく聞いており、聞いた言葉を発することが多い。

生徒 B のねらい 学習の様子	手立て	評価
<ul style="list-style-type: none"> ・自発的な動きを増やしたい。活動の切り替え等で自分から動けると良い。 ・教師や友達の様子を見て、自分で表現できるようになってほしい（アウトプット） ・最後の授業の時に自分の気持ちが動いて選んでいる様子が見られた。 ・みんなの様子を見て、阿波踊りの曲が流れたら笑顔で自分から動いていた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・興味をもてるような教材の工夫。着目できるような工夫をする。 ・教材を目の前で提示する。 ・発表の順番について配慮していく。模範となる生徒が先にやる。中盤くらいに活動できるように配慮する。 ・授業の始めと終わりにポスターを提示した。写真等と活動を関連付けられることをねらいとして取り組ん 	<ul style="list-style-type: none"> ・周囲（教師、友達）によく気付き、動くことができている。 ・興味の幅、やってみようというのが広がってきている。関わりたいなど、人にも興味が出てきている。 ・活動に楽しさを感じるが増え、友達の活動に注目することが増えた。それにより何をすべきか見通しをもちながら自ら活動する場面が見られた。 ・興味をもっていた活動に

	だ。「今日はこれをやるよ」で始まり、「今日は何をしたかな」で終わるといった授業展開を行う。また、単元では一貫して同じ教材を提示した。	については最後の振り返りの際に2択で提示された写真を見比べ、自分から手を伸ばして選び取ることができた。
--	--	---

生徒Cのねらい 学習の様子	手立て	評価
<ul style="list-style-type: none"> ・友達の様子をよく見ている。教師の示範を見てやることをよく理解できている。 ・活動に興味をもち、取り組んでいる。最初にやりたいなど意欲がある。 ・祭りとし町村（友達の住んでいる所）のつながりも良く分かっている。 ・文字の理解は難しい。聞き馴染みのなる言葉は分かる。 ・発言等については経験で学んでいるところが大きい。興味の幅が狭い点が課題である。 	<ul style="list-style-type: none"> ・イラスト、写真を提示する。（文字の理解は難しいため） ・イラストと言葉を結び付けていけるように繰り返し取り組む。 ・本人に伝わりやすい言葉の精選を行う。 ・興味のあることをつなげていく。 	<ul style="list-style-type: none"> ・授業の中で理解したことを正しくアウトプットしている。（写真を選ぶなど） ・ポスター（祭りの様子の写真）と祭りが開催される市に住む友達の顔写真とを結び付けてとらえることができた。

生徒Dのねらい 学習の様子	手立て	評価
<ul style="list-style-type: none"> ・教師の見本を見てすぐにやるべき活動に気付くことができる。 ・授業の雰囲気に関心、やるべき活動を理解しながら授業の楽しい雰囲気に沿って活動できている。 ・まとめの振り返りについては友達の写真と住んでい 	<ul style="list-style-type: none"> ・イラスト、写真と文字を合わせて提示する。 ・導入と振り返りでは3つの写真を提示し、授業で取り扱ったこととつなげて考えていけるようにする。 ・言葉との結びつきについては単語程度に絞って伝えていくことは必要となる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・教師の示範を見てやるべきことを理解し、行動に移すことができた。 ・考えながら表出することを教師が待ち、時間を取って理解させることにより自分の言葉で表出することができる様子が見られる。 ・授業で扱う題材について

<p>る町の祭りが結びついている様子であった。</p> <p>・文字が読めるが自分から読もうとすることは少ない。経験したことと言葉と結びつけ自ら表出していけるとよい。</p>	<p>・アウトプットさせたい言葉について、自分の内言語の中のみではなく、新しく授業の中で知った言葉を使って表現できるようにしていく。</p>	<p>「ししまい」などといった言葉でもアウトプットできていた。</p>
---	--	-------------------------------------

7 研究のまとめと今後の課題

以上の生徒の様子から共通していた手立てについて挙げていき、情報活用能力となる「授業で得た情報の「アウトプット」をする力」を育成するための手立てとして本研究において定義することとする。手立ての中で特に有効となったものを成果として以下に挙げる。

(1) 成果

①教材や題材を提示する場所は全体提示と生徒の目の前とする。

生徒が教師から何について問いかけられているか、理解を深めていくことについて有効であった。また、しっかり見ることで問われていることと教師側の意図が結びつくようになり、スムーズに活動を行うことができるようになってきた。

②授業で使用した教材の写真とイラストの提示をする。また、選択肢は2択で行う。生徒によっては写真と言葉との結びつきを図る。

授業の中で取り扱う題材について抽象的なイラストや写真ではなく、実際の教材の写真を提示するよう心掛けた。授業の中では導入と振り返りの際に提示を行うこととした。そうしたことにより活動と実物との結びつきを図り、振り返りの際に「今日やったこと」として選び、表現できた。また、授業の中で繰り返し活動に取り入れることにより、導入や振り返りとして定着してきた。

③授業の中で活動する順番に配慮、友達の様子を見てできる生徒は後にする。

授業の中で活動する場面において、教師の示範の後、生徒が活動するようにし、その中で活動する順番に配慮を行っている。示範を教師のみではなく友達が行うことにより、やるべきことがより明確になり自発的な動きにつながった。順番が先の生徒については、「やってみたい」気持ちを教師がくみ取り、表出させることにより、より意欲的に活動できた。

④言葉の精選、覚えてほしい言葉を絞って繰り返し提示し、定着を図る。

前述の通り音への気付きが良い本グループにおいて、授業の中でポイントとなる言葉を精選しながら生徒へ繰り返し伝えていくこととした。本単元では「おまつり」「ししまい」といった単語を使用しながら学習を行った。取り組みの中で「おまつり」とはこの教材や活動を示すといった授業内での定義を教師が行い、学習を深めていった。

⑤授業展開を固定するとともに、単元の授業を5，6回以上の授業で設定し、じっくり取り組めるようにしていく。

導入、活動、振り返りといった大まかな授業展開を固定し、やるべきことを明確化していった。今やるべきこと、次に行くことを固定化された流れの中で理解し、自分から動くことにつながってきた。また、繰り返し活動を行う中で生徒がしっかりと授業から知識を得ることができた。そして得た知識を教師や友達の様子を手掛かりとし、表現することができるようになってきている。

(2) 課題

単元の中で重要な点を意図して絞り、授業を行う必要性がある。

前述の④にて挙げられている単元の中で生徒に覚えてほしい、定着を図りたい点を教師が精選し、ねらいをもちながら授業の中で繰り返し提示していくことが必要であることが明らかになった。具体的な例を挙げると、光と影を扱う理科の単元において「光」の仕組みではなく光を当てて、できる「影」について理解を深めることをねらいとすることなどである。また、発語のある生徒については影絵遊びのモチーフについては「わに」等の発言により理解が深まっている反面、「かげ」といった単語と結びつけながら理解を深めていくことが難しかった。生徒の実態と課題に応じてねらいを細分化しながらより深い理解へつなげていき、知識を言葉として表現させることも必要となる。

(3) 本研究のまとめ

今年度は「生徒が学習の中で学んだことをどのように表現するか」つまり、授業で得た情報の「アウトプット」をする情報活用能力を育成し、その評価を生徒の変容を授業者のみではなく学部全体で見取りながら行ってきた。生徒のアウトプットの様子に着目する中で生徒が学んだことをアウトプットできる場の設定が必要であることが分かった。そして生徒が学んだことを授業の中でアウトプットできるようにするには情報をどのようにインプットさせるかが極めて重要であった。生徒の学びの様子によりインプットさせたい情報を細分化して精選して繰り返し提示していくことが必要となることが分かった。繰り返し学習することでやるべきことが分かり、周囲の様子を見ながら活動する様子が見られた。このような様子より単元計画の立て方にも工夫が必要となることが分かった。また、インプットのさせ方についても生徒の興味やものの見方に即した方法を考えていくことが必要であった。つまり、学習の中で得た知識・技能を思考・表現・判断させていくこと、特に表現にて生徒の個々の課題に応じてどう表現させるか考えていくことが重要となる。

生徒の実態把握についても同様に重要であり、生徒が得た情報をどのようにアウトプットできるかについて教師が把握することが必要となる。具体的なアウトプットとしては文字や言葉での表出や、選択肢を選ぶ、実際に行動に移すなど生徒によって様々な方法があるであろう。生徒がどのようにアウトプットできるかについて把握し、授業の中でどの方法にて行うか見極める必要がある。このことについては、一つの授業の様子のみではなく、個別学習での様子、他教科での様子について教師間で共有していく必要があるといえるだろう。多角的にかつ複数の目で同じ視点を持ちながら生徒の実態把握を行うことが重要である。

2年間にわたりこれまで中学部が培ってきた「授業づくりの実践」の蓄積に情報活用能力の育成や情報機器活用に視点を取り入れ、生徒の情報活用能力育成とより一層の学習活動の充実に向けて授業改善を行ってきた。今年度はインプットにおいては集団の良さを活用し示範を教師のみではなく友達にも行ってもらい、やるべき活動をより明確化させた。そのことによってどの生徒も活動の流れや今教師から何を求められているか理解でき、自分から動こうとする気持ちを持ち、行動に移すことができたことは大きな成果といえよう。また、教師がアウトプットする場の設定を行い、生徒に合った方法でアウトプットさせることについて考えていくことができた。取り組みの中でどの生徒もそれぞれの方法で得た情報をアウトプットする様子が見られた。次年度以降についてもこれまでの実践の蓄積に様々な視点を取り入れ、生徒にとってより情報をインプットしやすい方法を模索し、それぞれの方法でアウトプットできる場を設定しながら授業づくりを心掛けていきたい。

〈参考文献〉

文部科学省（2020年）教育の情報化の手引き（追補版）

一般社団法人 日本教育情報化振興（JAPET&CEC）（2021年3月）情報活用能力ベーシック小学校版

岩手大学教育学部附属特別支援学校（2024年3月）「情報活用能力育成を目指した授業づくり」情報活用能力育成を目指した授業づくりのプロセス

「高等部」研究グループ

1 研究テーマ

卒業までに身につけさせたい情報活用能力の整理

2 テーマ設定の理由

今年度の高等部は1学年5名、2学年5名、3学年14名、計24名の生徒が在籍している。知的障害単一の生徒から知的障害を主障害とした重複障害の生徒や知的障害を合わせ有する肢体不自由の生徒まで幅広い実態の生徒が在籍している。

昨年度は同じテーマで研究を進め、「教育の情報化の手引き - 追補版 - (令和2年6月) 第2章」にある「情報手段を適切に用いて情報を得る」力や「得られた情報をわかりやすく発信伝達」する力について焦点を当て研究を進めた。療育手帳の等級に応じて研究グループを作り、授業実践を行いグループの実態に応じた情報活用能力の育成についての有効な手立てについて検討を進めてきた。

2019年に文部科学省が提唱した「GIGAスクール構想」によって一人一台端末の整備が進められ、小・中学生年代からタブレット端末に触れる機会が多く、普段の日常生活の中でも多くの生徒が昼休みなどに活用している様子が見られる。

また、スマートフォンをもっている生徒も多く、ICT機器に関して苦手意識をもっている生徒は少ないと考えられる。

しかし、使用状況については自分の好きな動画を視聴している生徒が多く、学習活動に有効活用しているというよりは余暇活動としての使用が多くみられた。また、検索をする際にも多くのサイトの中から自分が必要とする内容を取捨選択できる生徒はほんのわずかである。多くは画像検索をして自分の必要とする情報を得ようとする様子が見られている。

そこで今年度は、「情報手段を適切に用いて情報を得る」力や「得られた情報をわかりやすく発信伝達」する力を育成する手立てを考えていく。それらを受け、本校の高等部の生徒としてどんな力を身につけさせたいか、また卒業後の生活をより良くするためには高等部段階でどのような情報活用能力を身につけておくことが大切であるかに焦点を当て研究を進めていく。本校の高等部の生徒として身につけさせたい情報活用能力を独自の指標を作成しながら、わかりやすく整理していくことが目標であると確認し、今年度も同じテーマで研究を進めていく。

3 研究目標

昨年度は単元計画や授業づくりを中心に話し合いを行い、授業実践に取り組んだ。実際の授業の様子から手立てについての検証を行い、教職員の指導力の向上を図ることができた。しかし、卒業までに身につけさせたい情報活用能力の検証が不十分であるため、引き続きの検証が必要であるとの課題があった。昨年度は山梨県教育委員会の作成した主に「ICT情報活用能力チェックシート」を用いて、研究を進めてきたが項目が多岐にわたっていることや高度な内容まで記載されていることから本校の生徒には少し難しさもあると感じた。そこで今年度は「情報活用能力ベーシック(小学生版)」に示された学習プロ

セスを基に研究を進めることを確認した。また、整理するための目安として「職業準備性ピラミッド」を参考に、同様の形の指標を作成していくことを確認し、今年度の目標を以下のように設定した。

(1) 卒業までに身につけさせたい情報活用能力について、学部で整理するとともに段階的にまとめ、本校で独自で使用している「単元配列表」に基づいて知的障害の状況から「軽度」と「重度」の2グループに分け、実態に応じた情報活用能力を育成するための手立てを授業実践を通して検討する。

(2) 授業実践後に手立てや整理した指標について適切であったかどうかを再度検討し、整理した指標について見直しを行い、実践に活用できるようにする。

4 研究内容及び方法

(1) 昨年度の研究では療育手帳の等級ごとの4グループでの研究を行っていたが、今年度は、今後の活用を見据え本校で独自で使用している「単元配列表」に基づいて「軽度」と「重度」の2グループとする。

(2) 昨年度の研究内容を参考に、研究グループごとに本校の高等部として身につけさせたい情報活用能力を挙げ、段階に応じてにまとめ整理する。

(3) 整理した指標を基に実際の授業場面でこれまでやっている実践等を確認し、表にまとめる。

(4) ①特定の授業を決めずに高等部の全教員が約1か月間多くの授業で実践、検証する。

②現場実習の事後学習として軽度と重度に別れ同じフォーマットの書式で「実習報告書」を作成する。

(5) 検証を経て、再度指標や表を見直し、活用できるようにし、本校として独自の指標の作成を目指す。

5 研究計画

	日にち	内容
研究日①	5月16日(金)	学部研究テーマ、研究計画・内容の確認 指標の検討①
研究日②	5月30日(金)	指標の検討②
研究日③	7月25日(金)	指標の検討③
研究日④	8月27日(水)	指標を受けて、指導方法を検討① 授業実践について
研究日⑤	9月12日(金)	指標を受けて、指導方法を検討②
研究日⑥	10月23日(木)	実践を受けて、指標及び表の検討①
研究日⑦	11月6日(水)	実践を受けて、指標及び表の検討②
研究日⑧	12月4日(木)	実践のまとめ、学部のまとめ①
研究日⑨	12月26日(金)	実践のまとめ、学部のまとめ②
研究日⑩	1月15日(木)	学部のまとめ、来年度に向けてのアンケート

6 研究実践

はじめに、今年度研究を進めていく上での視点の統一を図るために、情報活用能力の中でもどのような点において研究していくのかを確認した。学習指導要領によると、情報活用能力とは「世の中の様々な事象を情報とその結び付きとして捉え、情報及び情報技術を適切かつ効果的に活用して、問題を発見・解決したり自分の考えを形成したりしていくために必要な資質・能力である。より具体的に捉えれば、学習活動において必要に応じてコンピュータ等の情報手段を適切に用いて情報を得たり、情報を整理・比較したり、得られた情報を分かりやすく発信・伝達したり、必要に応じて保存・共有したりといったことができる力であり、さらに、このような学習活動を遂行する上で必要となる情報手段の基本的な操作の習得や、プログラミング的思考、情報モラル等に関する資質・能力等も含むものである。」（特別支援学校学習指導要領解説 知的障害者教科等編 2019）と記されている。昨年度の研究の成果を基に今年度の研究の中では、「コンピュータ等の情報手段を適切に用いて情報を得たり、情報を整理・比較したり、得られた情報を分かりやすく発信・伝達」という点や「情報活用能力ベーシック（小学生版）」にある「②情報の収集」、「④まとめ・表現」に焦点を当て研究を進めていくことを確認した。学習指導要領にある情報活用能力の中で以下の3点については本研究では、あまり考慮しないこととして研究を行う。1つ目の「基本的な操作の習得」は普通の授業や日常生活の中でも取り組んでおり、ある程度の操作ができる生徒が多くみられること。2つ目の「プログラミング的思考」は生徒の実態的に理解が難しく、卒業後の生活でも活用の機会が少ないこと。3つ目の「情報モラル等に関する資質・能力等」については、道徳の授業やスマホ安全教室等でも取り組んでいること。以上の理由から今年度の研究対象としないこととした。

（1）指標の作成に向けた検討

指標を作成するにあたり、高齢・障害者雇用支援機構の「職業準備性ピラミッド」を参考にしながら今回の指標では3つの階層に分け、大項目と小項目を設定することとした。

まずは、一人一人が高等部の卒業までに身につけさせたい力を付箋に書き、貼り付けたものをグループごとに話し合いをしながら構造化し、法を用いてまとめていった。

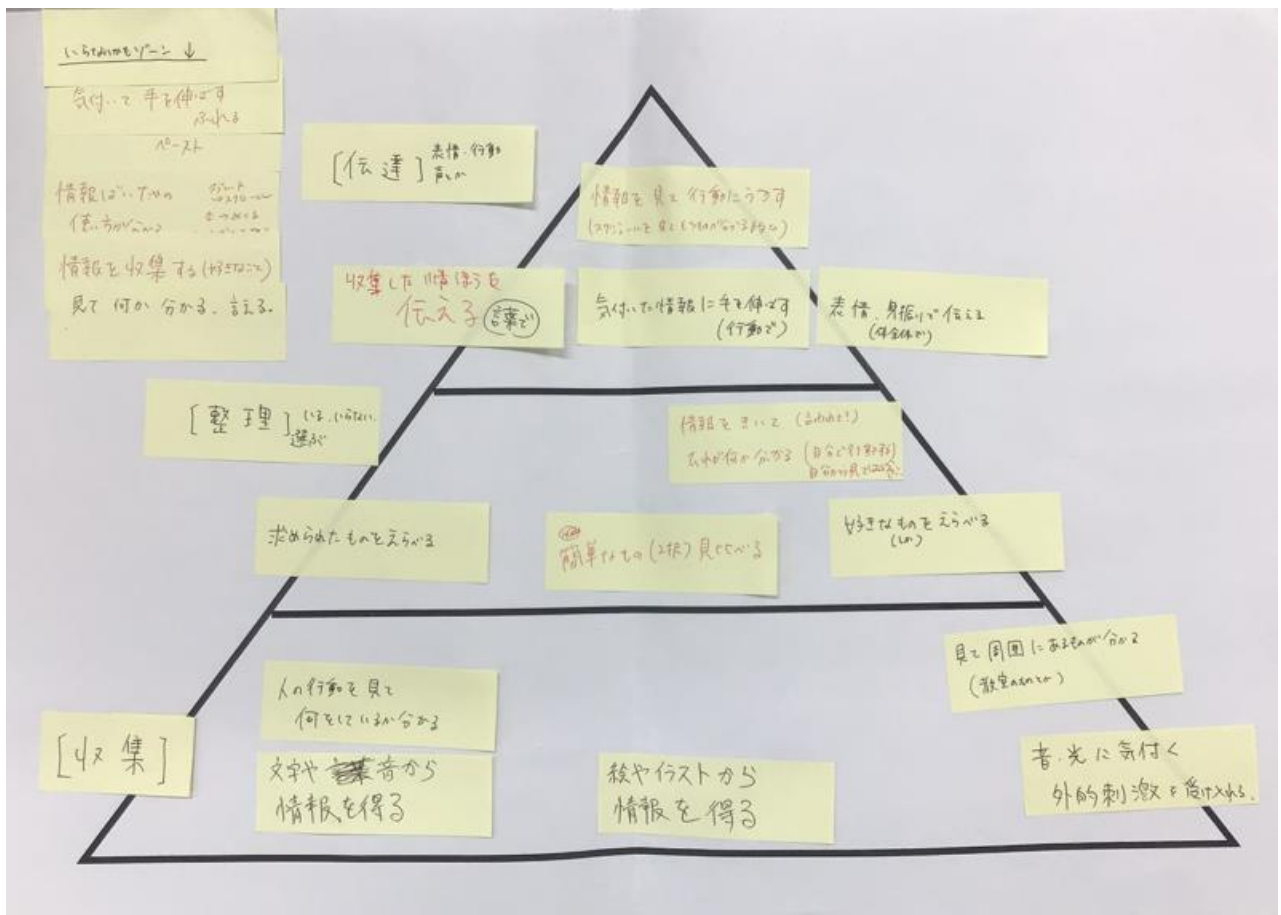


図1：KJ法を基に作成した指標（重度グループ）

重度のグループでは、ICT 機器を用いた情報活用能力だけではなく、「文字や音から情報を得る」や「音や光に気付く、外的刺激を受け入れる」など五感を使って情報を収集していくことの大切さが特徴としてみられる。情報の発信についても「気付いた情報に手を伸ばす」や「「情報活用実践リスト」情、身振りで伝える」、「情報を見て行動に移す（持ち物などを準備する）」など音声言語に頼らないノンバーバルコミュニケーションの方法で発信をすることの大切さが特徴としてみられた。

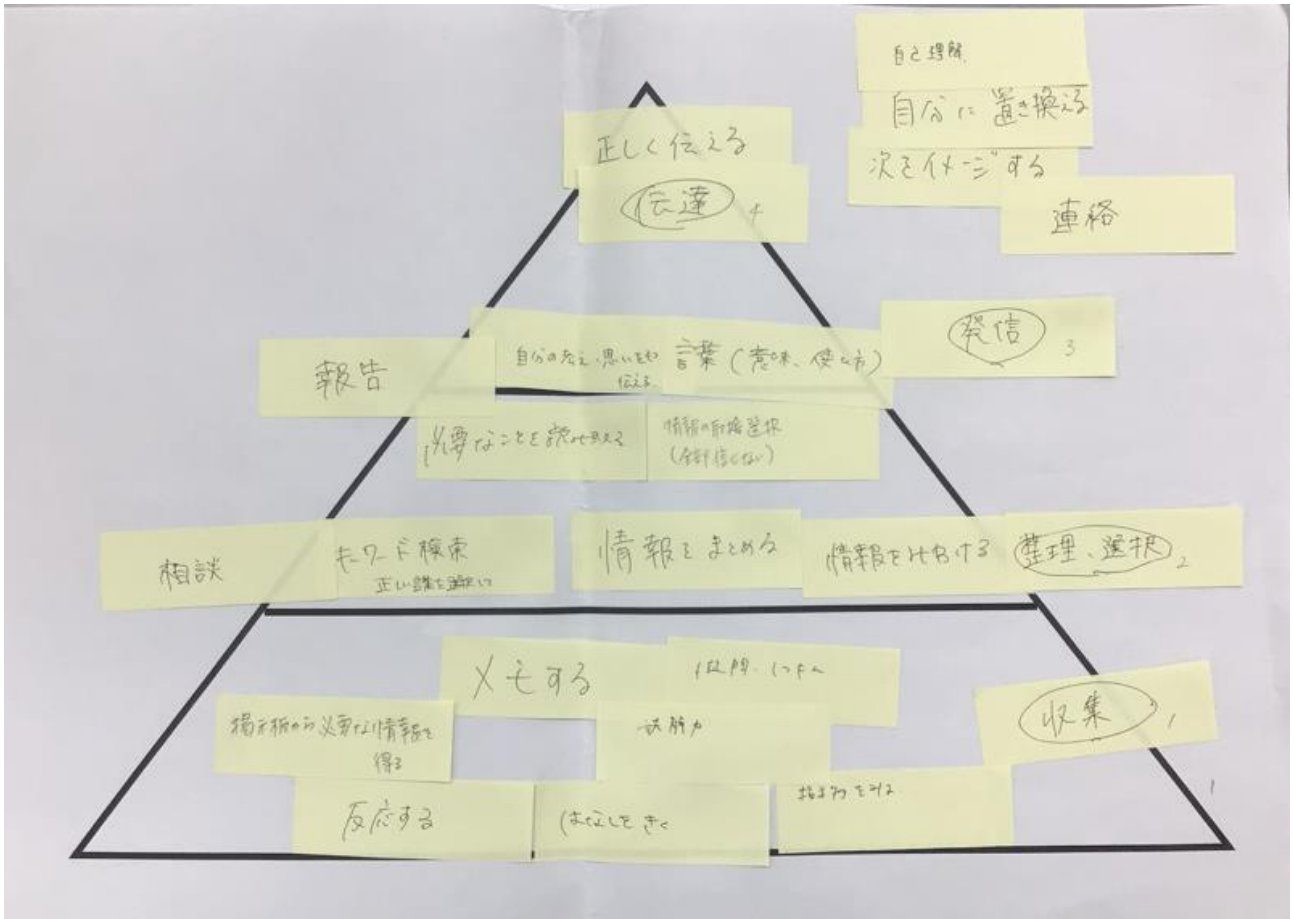


図2：KJ法を基に作成した指標（軽度グループ）

軽度のグループでは、卒業後を見据え視覚情報を読み取り自分で考え、行動することという視点と ICT 機器の活用という2つの視点での話し合いが行われた。「質問」「相談」「報告」などの働くために必要な力が情報活用能力にも含まれているという点が特徴的だった。昨年度のまとめにもあった「情報の取捨選択」や「正しい言葉を選択したキーワード検索」など情報を精選していくことの大切さが特徴としてみられた。

KJ法によって各グループで作成したものを基にデータとしてまとめ、さらに項目の表現についても再考を行った。その中で細かな表現についても見直しを行い、さらに指標のブラッシュアップを行った。同時に授業の中での活用が可能かどうかについても検討した。

情報活用能力

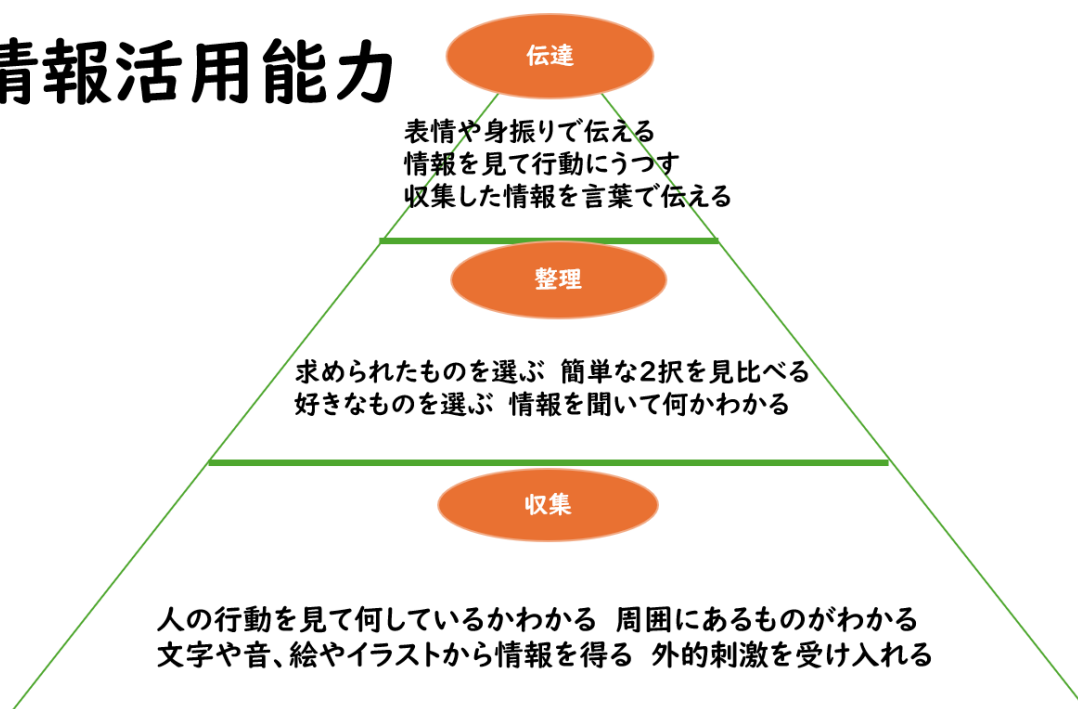


図 3 : KJ 法を基に作成した指標を再検討したもの（重度グループ）

情報活用能力

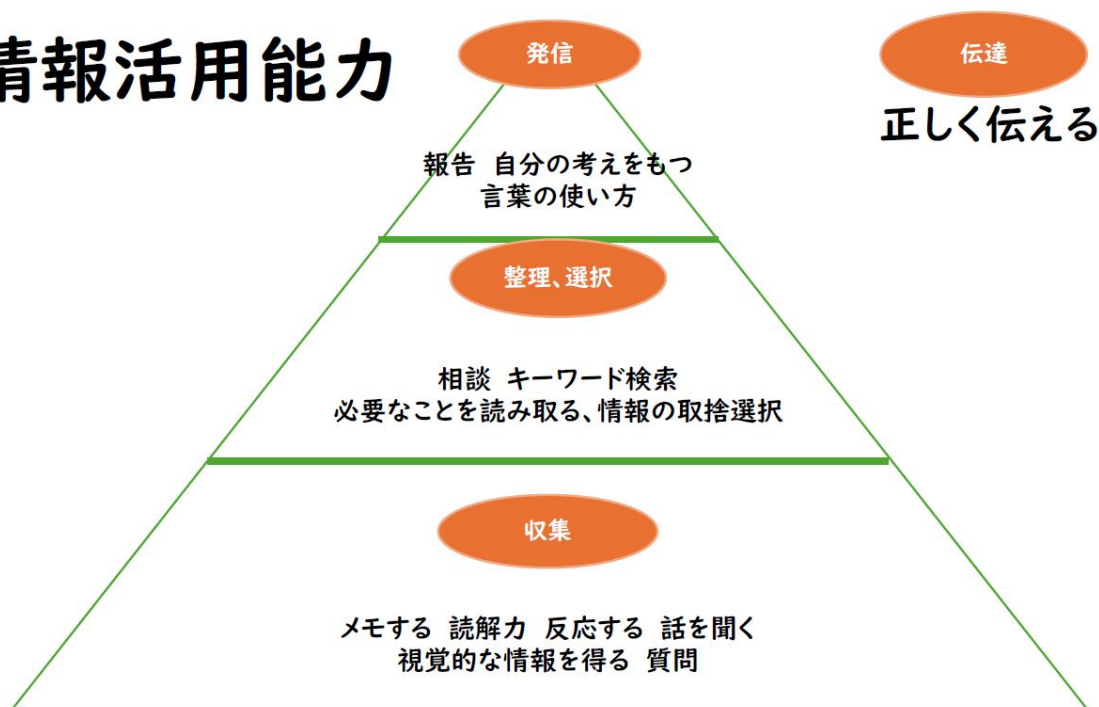


図 4 : KJ 法を基に作成した指標を再検討したもの（軽度グループ）

図 3 の重度グループでは、例えば収集の際に同じ花を見つけてくることや、赤いトマトと緑のトマトを見比べて違いに気付くことなど実際の生活に即した指導内容についても検討することができた。実物を用いるだけでなくタブレットで写真を撮ったものを実物と見比べ、違いや同じところを確認するなど実態に応じて ICT 機器を活用しながら様々な方法で情報収集の仕方について検討を行った。また、伝達においても音を聞いたり、物を見

たりして五感を使って得た情報に対して好き嫌いを伝え、そこから人の手をとってほしいものに誘導する、手をたたいて要望するなど具体的な方法を考えることができた。

(2) 指標に基づいた情報活用能力の実際の授業での手立ての検討

今年度は、ひとつの授業を取り上げ授業実践を行うのではなく、検討された内容を基に高等部の全教員が1か月の間、授業内で情報活用能力の向上を意識して取り組むこととした。その際にこれまでに自分が取り組んできた内容やS Tとして参加している際に他の教員でよいと思った手立てなどを共有し、それを表にまとめ参考にしながら授業に取り組むこととした。

項目は、各グループの大項目とし、軽度グループと重度グループともに「収集」、「整理・選択」、「発信」の3項目での検討とした。授業は国語、数学、自立活動の個別の授業。理科、社会、美術などの集団の授業。調べ学習を主体とする総合的な探究の時間。そして卒業後の生活に直結する職業の授業の4つのグループに分け検討することとした。

表1：指標を基に検討された手立ての表（重度グループ）

	収集	整理・選択	発信
個別 国数自立	教材 今日の予定 写真を見る 好きなものを検索 問いかけの内容を理解	順番の選択 提示物を見比べる やりたいことを選択 (自主的に) 提示されたものの中から選択	つかむ 注視 表情で答える 表情・身振りで発信 選んだものを伝える 書く
集団 理社美音体 家道特外	スライドから読み取る 地図・グラフから読み取る 全体説明で知る、わかる 見本・完成物からイメージする やることがわかり、検索 友達の様子、教師の動きから感じる 言葉の豊かさを高めることが収集・発信につながる ポイントを注視する 環境(音、他者の存在など)に五感で気が付く	どこに何を記入するかわかる 検索した情報からやりたいこと、作りたいことを選ぶ いくつかのパターンの中から選択させる 五感で気が付いたものを選ぶ	調べたもの、まとめたものを発表する 集団活動を楽しむ 実際の行為を録画して伝える しぐさ、声 内言語がある生徒にはボイス機能アプリ
総合	端末で調べ学習 やるべきことが分かる 出た意見を収集	項目ごと整理 自分の好みを選ぶ	資料にまとめる 自分のやったこと、やり方を伝える
職Ⅰ 職Ⅱ	手順表から内容を理解する	時間内で取り組む	終わりやできたを伝える

情報活用スキルを高めるほどに、モラルの面も高めないといけない(例) チームスで学校外の人に連絡してしまうなど。

表1の重度のグループでは、机上の学習ではなく「写真を見る」や「提示物を見比べる」、「見本・完成物からイメージする」など具体物を使用する学習方法が多くみられた。それだけではなく、教師が情報の一部を担い、生徒の情報活用能力の補助をすることの重要性が示された。具体的には「提示されたものの中から選択する」、「いくつかのパターンの中から選択させる」など教師が選択肢として「情報」を提示する方法や「教師の動きから感じる」や「表情・身振りで発信する」などのように教師自身が「情報」となり収集や発信の補助をする方法など教師のかかわりの大切さが改めて明らかになった。

表 2：指標を基に検討された手立ての表（軽度グループ）

	収集	整理・選択	発信
個別 国数自立	国：文章、俳句を読む、聞く ニュースを読む イラストから読み取る 数：メニュー表などから値段を見る タブレットで値段を調べる 自分の体重等のデータ 自立：自分の身体について 全体：教員とのやりとりから情報を得る	国：5W1Hなど基にまとめる メモから文章へ 調べた内容から文章を精選する 数：予算内で注文できるものを選択 データを基に表、グラフの作成 自立：目標と照らし合わせ必要な運動選ぶ 全体：やりとりの中でわかっていることとわからないことを明らかにする	国：相手にわかりやすく話す、伝える 作文で表現する わかったことを発表、他の人は聞いて自分の考えをまとめる 自立：運動の実践 全体：わからないことを伝え、その場でレクチャーし、すぐに実践
集団 理社美音体 家道特外	同じ流れ、同じ提示の仕方 手本や見本を見る 話している人(CT)に注目させる pptなどの視覚支援 インターネットを使った調べ学習 動画の視聴 アプリの活用 動き等を撮影する 教師：席順の工夫(友達から情報を得る)	適切なやり方を選択する ワークシートに書き出し、実践できるか検討する 教師が確認する 自分から教師に質問する 意思表示カードから選択して提示する 視覚支援のイラスト等から選択する グループワークで共有 自分の動きや動作を分析 教師：STとすぐに相談できる雰囲気 チームワーク	発表する ワークシートにまとめる クリップボードに入力 指や文字で書く タブレットを活用する 改善して運動に取り組む 教師：発表順や方法に配慮する
総合	パンフレット 本 HP等から テーマを明確にする 教師：HPを限定することのメリットデメリットを考える	文章の取舍選択 活用するHP等の選択 テーマやトピック事に 体験を伴わせることで自分の得た情報が正しいかを考える	ワークシートにまとめる タブレットでまとめる 模造紙等にまとめて掲示する
職Ⅰ 職Ⅱ	事業所について調べる 作業の様子を撮影してみる 実習のしおりを見る CTの指示を聞く、見本を見る 自分から質問する 必要な言葉(やりとり)を覚える メモを取る 得意不得意に気付く 教師：情報の精選と提示の仕方の工夫	自分に合った仕事を考える 自分の課題から今取り組むべきことを考える 手順通りに作業する 連絡相談をする	より良い方法を考え実践する 報告する お客様目線で考える

【集団】

- ・道徳：PP.教師の話から必要な情報を→自分から分からないことを聞く、自分の気持ちに近いものを選択する→自分の考えを Teams にまとめて、友達と共有する
※場面緘黙の生徒に対応して ICT を昨年度から活用していた。
- 課題：文章にすることが難しい、iPadの充電がないなどのそもそもの取り扱い方(充電の減り方の数値を読み取れていない、家庭に持ち帰ったら充電するなどの習慣があるか、文字入力の能力など)
- ・体育：動きを撮って見て、分析した授業設定を行う 実技系は見本を見せることが情報収集になる。

【総合】

- ・インターネットとパンフレットから情報を得る、実体験を踏まえて発信する。(旅行記の作成、校外学習に向けて)
- ・調べ方は難しさがあつた。情報収集のために情報を精選したら、情報が制限がされている。
- ・経験がものをいう。行ったことない場所を調べても…実体験が伴わないと理解しているのか
- ・教師が意図をもって情報を提示する。
- ・収集したけど、コピーしただけでどんな情報を得たか分かっていない。
- ・収集はできるけど、その後につながる手だてをどうしたら良いか。情報収集はできる!整理・選択の仕方を教えていく。

【職業1・2】

- ・実習報告書の作成、実習でやってきたこと(収集)→成果・課題を整理する→報告書を ICT を活用して作成していく。
↑情報の収集力は課題、メモする力(手だての工夫は必要、メモする内容を明確にしてみる)、正しく評価、正しい課題が自分に落ちているか
- ・サービス班：自分の様子を振り返るときに、まずは気付いてほしいことを指摘する。次から改善。
- ・農園：終わりを提示しても、収集・整理の過程で、教師と意図と食い違っている。
- ・工芸：他の人の失敗を見て、自分自身の行動を見直す。

表 2 の軽度のグループでは、机上の学習や ICT 機器を使った学習方法が多くみられた。また、収集についての手立てが多く、発信になるにつれて手立てが少なくなる傾向が見られた。収集については、資料や ICT 機器を用いて生徒自身が自分で収集するという内容が多くみられた。発信の仕方では、「発表する」もしくは「ワークシートにまとめる」など実態に応じた手立てが見られた。また Teams のチャット機能や ClassNoteBook など ICT 機器を活用した収集、発信の方法もあった。教師のかかわりでは良い情報収集のさせること

が重要であるとの意見が見られた。生徒の実態として検索はできるが、検索後の膨大な情報の中から必要な情報だけを選択することが難しい実態の生徒が多い。そのため、教師が情報の整理や発信の過程を見据えて生徒がわかりやすく探索しやすいような情報を提示することの大切さが明らかになった。

(3) 同じフォーマットを用いた現在の情報活用能力の把握

1 か月間の個々での授業実践とは別に同じフォーマットを用いて、現在の情報活用能力がどれくらいであるのか。またどのような支援が必要かを明らかにするため、現場実習報告書の作成を高等部の全生徒を対象に実施した。しかし、大まかなフォーマットは統一するが、実態差があるためひらがな表記や項目の平易化など4つの段階に分けたフォーマットを用いて作成することとした。軽度のグループには見本と指示書を提示し、指示書を見ながら ICT 機器を用いてアプリで作成するが、わからない場合は自分から質問することを伝えた。重度のグループでは、見本を提示し実態に応じて ICT 機器やプリントを使って教師が支援しながら作成することとした。

実習報告表

高等部 _____ 学年 _____ 名前 (_____)

◆実習先: _____ ◆場所 (市町村) _____

作業の様子 写真を貼る	◆仕事内容
◆目標の反省 (◎・○・△・×)	
目標	
◆頑張ったこと	
◆課題 (アドバイスされたこと)	
◆今後の学校生活で頑張ること	

図5：実習報告書のフォーマット（軽度）

軽度のグループでは、Teams を使ってフォーマットや写真のやりとりを行ったが、セキュリティや PC とタブレットの関係性から生徒のみではうまくデータを自分のタブレットにダウンロードできず、クラウド上で操作、入力してしまいデータが混ざってしまうことがあり、教師の情報の出し方に課題が残った。また、軽度のグループの生徒には全員に指示書と見本がセットになったものを配付したが、データのダウンロード以外の工程でも指示書が読み取れず、一工程ごとに質問をする生徒や困って手が止まってしまう生徒が見られた。

② teamsのチームからファイルを選択する



図 6 : 実習報告書の手順書の一部

実習報告表

高等部 2年 名前 []

◆ 実習先 : コルポート ◆ 場所 (市町村) 八王子

◆ 仕事内容

アイロンビーズの色分け
封筒の型を切る 折る
ナノブロック ピッキング 封筒作り スクラッチアート

目標『うん』ではなく『はい』で返事をする 言葉づかいに気をつける

○ 実習先で言葉づかいに気おつけてちゃんと『はい』で返事ができたからです

そコルポートでアイロンをやって数字を打つ時に手首を痛くしてマッサージをしながらできました

◆ 課題 (アドバイスされたこと)

色に気をつけてね 封筒の線に沿って切ってね 桜を組み立ててしてください
ピッキングのきか桜を数えてください 封筒の次を作ってください 削る先に気をつけてね

◆ 今後の学校生活で頑張ること

ピッキングの時に漢字が読めなくてか作業にがうまうまかかなかったからもうと漢字を読めるように頑張りたいです。

図 7 : 生徒 A が作成した実習報告書

実際に作成した場面で生徒 A は、情報の収集に苦手さがあり、指示書から求められている内容を読み取ることが難しかった。指示されたファイルを開くことができず、「実習報告書改②ひらがな」と示されている違うファイルを開いて作成しようとしていた。自分だけでは違いに気付くことができず、教師のアドバイスを受け、正しいファイルを選択したものの、図 7 のように実習場所の下線が消えてしまっていたり、項目の表題が消えてしまっていたり、枠の間隔が狭まってしまったりしている。見本と見比べて、比較することが難しく、自分から質問することも難しかったため、右のような仕上がりになった。

その一方で実習報告書の作成には指導時数を 2 時間で予定をしていたが、1 時間の中で指示書を見ながら作成できた生徒もいた。

生徒 B は指示書を見ながら素早く作業することができていた。指示書の情報だけで十分にやるべきことが理解できており、特に教師に質問することもなく、1 時間の中で作成することができていた。目標の枠でも行を分けて書いているため見やすく、各項目の中でも行を意識して入力しており、ただ作るだけではなく出来栄えや見る人を意識して実習報告書を作成することができていた。2 時間目では、タブレットを TV につなぎながら、作成時のポイントや注意点について周囲の生徒に説明するなど、得られた情報を自分の中で整理し、周りにわかりやすいような言葉を選びながら伝達することができていた。

以上のような状況から指示書には実際のページの写真を入れて作成したが、この実践から軽度グループの全員の生徒に指示書の内容を正しく伝えるためには、もう少し工程を細かく区切り、丁寧に詳しく説明した指示書が必要であると感じた。生徒 B のように教師が提示した資料や説明を基に、自分で情報を収集し、得られた情報を自分なりに整理し、ワークシートの中に自分の考えをまとめ、周囲に自分が理解したことを言語化して伝達できる姿が今回の高等部の研究で求める理想像である。逆に生徒 A のように情報収集や発信に苦手さがある生徒も現在の高等部には多く見受けられる。そのような生徒たちに対してどのような支援が必要であるのか。今回の指示書を基に検討を深め、よりよい支援方法が検討できるとよい。生徒 A のような実態の生徒に対して、検討を重ねてきた指標や表を用いて情報活用能力を向上させていくことが今後の課題である。

重度のグループでは生徒の発言を教師がシールに書いたり、実習中に見取った様子を教師がシールに書いたりしたものを生徒が貼るなど実態に応じて段階的な支援を行い、実習報告書を作成した。軽度のグループでも情報収集力に実態差があり、段階的な支援の必要性を改めて感じるよい機会となった。1 コマの中で作成できた生徒は、日常生活の中で動画視聴以外にも ICT 機器を活用していることが多く、普段から自分で文字入力を行ったり、様々なアプリを使用したりしているため、苦手意識が少なく資料を見ながら自分で試行錯誤しながら実習報告書の作成に取り組んでいたと考えられる。

この実践を経て、普段の授業の中から生徒との ICT 機器を活用したやりとりを多くすることや文字入力の機会をもつこと、検索や動画視聴以外にもソフトの活用機会をもつこと、通常の授業分けの実態とは別に情報活用能力の実態に応じた支援を行うことの重要性が示唆された。

実習報告表

高等部 3 年 名前

◆ 実習先： 扉 ◆ 場所 (市町村) 富士河口湖町

◆ 仕事内容

客室清掃(ベッドメイク、片付け、掃除機がけ、ゴミの片付け、茶器洗い)

◆ 目標の反省 (◎・○・△・×)

目標
気持ちを整理する時間を作る ←

◎ 休みの日に家族とリフレッシュする時間を作れたから

◆ 頑張ったこと

時間配分を意識して仕事ができた
責任感を持って仕事ができた
体調管理がしっかりできた

◆ 課題 (アドバイスされたこと)

掃除機をかける時は、広いところからかけるとやりやすい
ゴミ袋を持ち歩きながら、ゴミを回収する
角に掃除機をかけるときは、横にスライドさせる

◆ 今後の学校生活で頑張ること

臨機応変に対応できるようにする
リフレッシュする時間を作れたので、今後も自分で考えてリフレッシュする時間を作る

図 8 : 生徒 B が作成した実習報告書

(4) 実践を踏まえての再検討

1か月の検証を踏まえて、再度指標や表を見直すこととした。高等部の教師を対象に1か月間の検証の様子をアンケートで回答してもらった。合わせて、指標や表の名称について Forms のアンケートで回答してもらい、指標は「情報活用ピラミッド～やまびこモデル～」とし、表は「情報活用実践リスト」という名称とすることとした。

アンケートの回答から高等部の教師全員が情報活用能力の育成を意識して授業に取り組んでいる様子うかがえた。その中でも特に多く記載がみられたのが「視覚情報」についてであった。生徒に「何を」「どのように」見せるのかを教師が試行錯誤し、提示する情報を精選することを意識した教師が多かった。合わせてワークシート1枚で要点を見やすくしたり、先に完成系を見せたり、生徒のICT機器にスライドを Teams で送り、手元で見られるようにするなど見せ方も工夫している様子が見られた。それと同様に多くみられたのが、同じ情報を繰り返し生徒に提示することであった。生徒に定着を図る上では、繰り返しの指導という指導方法は従来から用いられているものであるため、多くの教師が実践している様子が見られた。

一方で多くの教師が1か月の間にあまり「情報活用ピラミッド～やまびこモデル～」や「情報活用実践リスト」を見直さなかったとの回答も複数みられた。伝達手段が高等部の Teams のみだったこともあり、共有を図ることができなかった。多くの人が目につくところに掲示することや指導案の書式に最初から入れ込むなどもっと日常的に目にする機会がある場所に保存、明記することの重要性が明らかになった。

以上のような実践例を基に再度、「情報活用ピラミッド～やまびこモデル～」や「情報活用実践リスト」が実際に活用できるものなのか検証を行った。

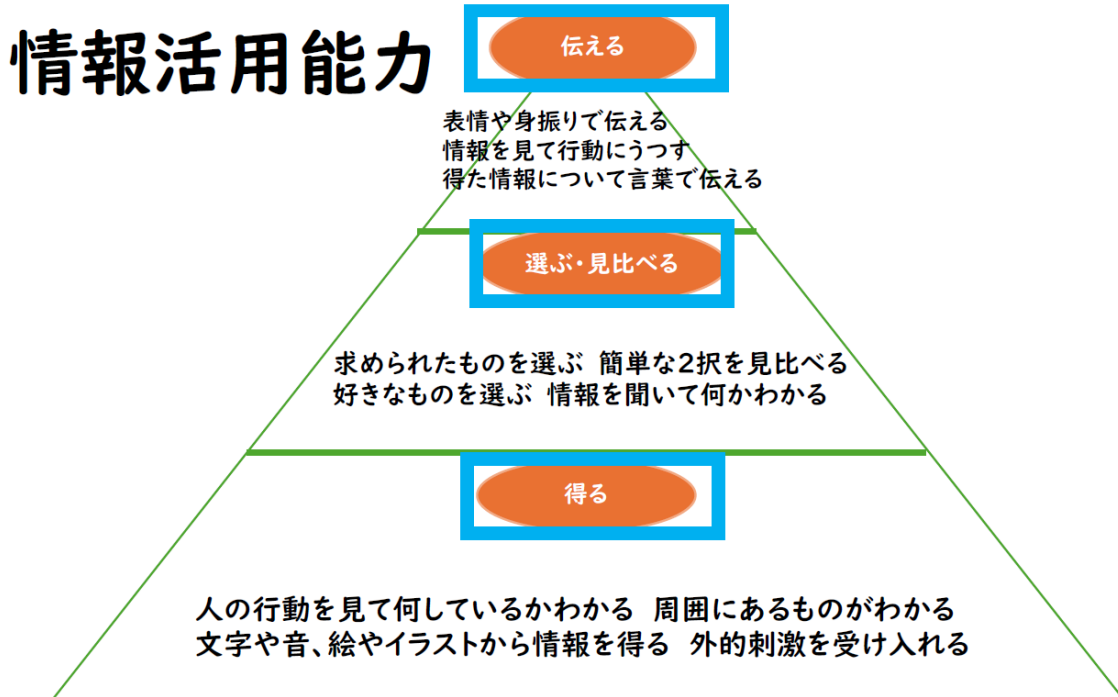


図9：最終的に検討した「情報活用ピラミッド～やまびこモデル～」(重度グループ)

重度グループでは、大項目について変更を行った。「収集」、「整理」、「伝達」という項目であったが、生徒の実態や実際の授業の状況などを踏まえ、「得る」、「選ぶ・見

比べる」、「伝える」といった少し平易な表現に変更した。

表 3：実践を基に再検討した手立ての「情報活用実践リスト」（重度グループ）

情報活用能力 教科等	得る	選ぶ・見比べる	伝える
個別 国数自立	予定表から一日の流れがわかる 教科に合わせた持ち物がわかる 写真を見る 好きなものを検索する 問いかけの内容がわかる	順番の選択する 提示物を見比べる やりたいことを選択する 提示されたものの中から選択する	つかむ 注視する 表情で答える 表情・身振りて伝える 選んだものを伝える 書く
集団 理社美音体 家道特外	スライドから読み取る 地図・グラフから読み取る 全体説明で知る、わかる 見本・完成物からイメージする やることがわかり、検索する 友達の動き、教師の動きから感じる ポイントを注視する 環境（音、他者の存在など）に五感で気が付く	どこに何を記入するかわかる 検索した情報からやりたいこと、作りたいことを選ぶ 五感で気が付いたものを選ぶ	調べたもの、まとめたものを発表する 集団活動に参加する 録画・撮影して伝える しぐさ、声で伝える 内言語がある生徒にはボイス機能アプリを使って伝える
総合	端末で調べる やるべきことが分かる 出た意見がわかる	項目ごとに分ける 自分の好みを選ぶ	資料にまとめる 自分のやったこと、やり方を伝える
職Ⅰ 職Ⅱ	手順表から内容を理解する	自分にできそうな作業がわかる	終わりやできたを伝える 助けを求める

情報活用のスキルを高めるほどに、モラルの面も高めないといけない（例）チャームスで学校外の人に連絡してしまうなど。

情報を得るためには、視覚的な支援や情報の精選などは必要不可欠

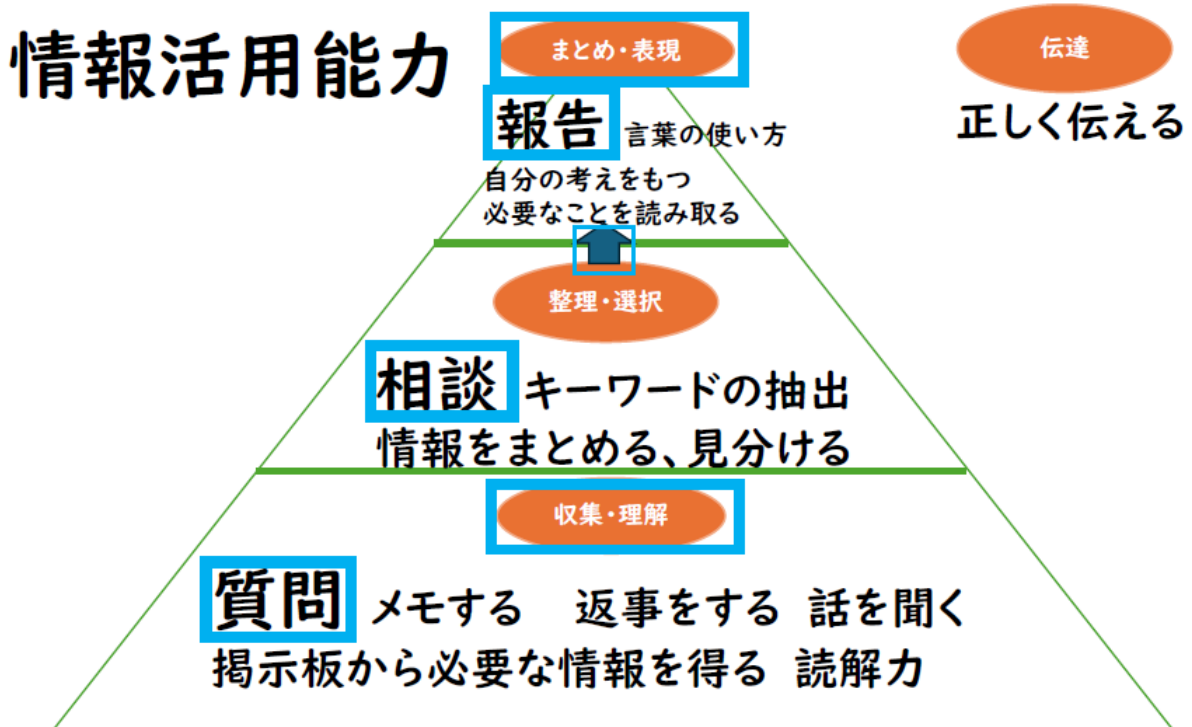


図 10：最終的に検討した「情報活用ピラミッド～やまびこモデル～」（軽度グループ）

軽度のグループでは大きく変更が行われた。大項目では「収集」から「収集・理解」へ、「発信」から「まとめ・表現」と「（小学生版）情報活用能力ベーシック」を基にした変更を行った。また、下位項目では、表記の順番を入れ替えるとともに、職業や実習でもよく使われる「質問」、「相談」、「報告」の表記を大きくし、重要度を表現した。また「まとめ・表現」の下位項目の表記の順番を入れ替え、「整理・選択」から矢印をつけることで階層間のつながりをさらに強調して表現をした。

表4：実践を基に再検討した手立ての「情報活用実践リスト」（重度グループ）

情報活用能力 教科等	収集・理解	整理・選択	まとめ・表現
集団 理社美音体 家道特外	話している人(CT)に注目させる pptや手本、動画などの視覚支援 インターネットを使った調べ学習 アプリを活用させる 自分の動き等を撮影させる 席順を工夫し、友達から情報を得られるようにする 同じ流れ、同じ提示の仕方をする	ワークシートに書き出し、実践できるか検討させる 自分から質問させる 視覚支援のイラストや意思表示カードから選択して提示させる グループワークで共有させる 自分の動きや動作を分析させる	発表の場面を設ける ワークシートにまとめさせる クリップボードに入力させる タブレットを活用させる 改善して活動に取り組ませる 模造紙等にまとめて掲示させる
総合	バンフレットや本、HP等から情報収集させる テーマを明確に伝え、理解させる HPを限定することのメリットデメリットを考える	文章の取捨選択をさせる 活用する本、HP等の選択をさせる テーマやトピック毎にまとめさせる 体験を伴わせることで自分の得た情報が正しいかを考えさせる	発表順や方法に配慮する
職Ⅰ 職Ⅱ	事業所について調べさせる メモを取らせる わからないことを質問させる 必要な言葉(やりとり)を覚えさせる CTの指示を聞かせる、見本を見させる 得意不得意を考えさせる 指示書や実習のしおり等を見て理解を促す 自分から質問できるように発問を工夫する 情報の精選と提示の仕方の工夫する	連絡相談の必要性を考えさせ実践させる 手順通りに作業させる 自分に合った仕事を考えさせる 自分の課題から今取り組むべきことを考えさせる	より良い方法を考え実践させる 必要な情報を報告させる お客様目線で考えさせる 自分の適性から進路を考えさせる
【総合】 ・教師が意図をもって情報を提示する。実体験が伴わないと理解が難しいことが多い。 ・収集はできるが、コピーしただけでどんな情報が具体的に分かっていないことが多い ため整理・選択の仕方を教えていく。	【職業Ⅰ・Ⅱ】 ・サービス班：自分を振り返るときに、まずは気付いてほしいことを指摘、その次に改善。 ・農園班：作業内容の提示の仕方の工夫。終わりの時間を提示し、見通しをもたせる。 ・工芸班：他の人の失敗を見て、自分自身の行動を見直す。 ※情報の収集力は課題、問いに対しての必要な情報を収集できているか 自分を正しく評価できているか、正しい課題を理解しているか		

※国数自立はこの実態に応じて、学習指導要領を網羅していくことによって、育成できると考えられる。

そして、重度のグループ、軽度のグループともに「情報活用実践リスト」については1か月間の実践を経て、表現や内容がさらに具体的で端的になり、実際の授業で情報活用能力を育成するためにわかりやすい「情報活用実践リスト」としてまとめることができた。

(5) 教員へのアンケート

2年間の研究のまとめとして「情報活用能力」について

- ①「卒業後の豊かな生活のために高等部で身につけておくべき情報活用能力は何ですか」
- ②「情報活用能力の指導において大事なポイントや意識していることは何ですか」
- ③「普段生徒に情報を提示する際に意識していることがあれば教えてください」

という3つの質問を行った。高等部全員の教師に質問紙を配付し自由記述で回答していただき、多くの有益な回答を得ることができた。

まず、①の卒業後の豊かな生活のために高等部で身につけておくべき情報活用能力は何

であるか」について質問したところ、表現の方法は様々ではあるが、「情報を収集する力」という回答が14人中7名で半数を占め、一番多かった。これは1年目の研究で得られた結論とも合致しており、今年度作成した「情報活用ピラミッド～やまびこモデル～」でも基礎的な力であるとして両グループともに土台に置かれていることから重要であると考えられる。正しい情報を収集することができるという良い選択、良い発信のための第一歩であるため、情報を収集するためのスキルを高等部段階でたくさん身につけさせていきたいと考えている教師が多いと思われる。上手に情報を収集できるようになると、もっと知りたいという知的好奇心が生まれ、さらに良いサイクルになってくるという能力だけではなく、精神面にも良い影響を及ぼすことが期待できるという意見もあり、単に技能面だけではない重要性もあると思われる。

「情報を収集する力」の次に多かったのは、「情報を発信する力」でこれも1年目の研究のまとめと同じ結果であり、14名中4名に記載があった。今年度作成した「情報活用ピラミッド～やまびこモデル～」では最上位に置かれており、最終的な目標であることがうかがえる。発信についての記載は「様々な方法で」という文言が付随しており、ICT機器の活用に限らず自分のできる方法で発信することが重要であるとの回答が多かった。良い情報収集ができて発信することができないと周囲の人に伝えることができないので、どのような手段でもよいので、発信ができるような方法を高等部段階では身につけさせていきたい。また、その手段が一つではなく、複数あると卒業後の生活がさらに豊かになると考えられる。「情報を収集する力」と「情報を発信する力」の2つで回答の約8割を占めていることから高等部全体の方向性として同じイメージが共有できていると感じた。

続いて②の「情報活用能力の指導において大事なポイントや意識していることはなんですか」という質問を行ったところグループごとに回答に違いが見られた。

重度のグループでは「情報の出し方」に関する回答がほぼ全員から得られた。生徒が自分の目線で見えてきた写真を活用することや普段目にするであろう場に提示し、見る機会を多く設定すること、わかりやすいイラスト、文字の大きさを資料を作成すること、実物に近いものを用意し触覚など五感を使うなど、様々な方法を用いて生徒がより情報を収集できるような工夫を多くの先生方がしていることが明らかになった。

③の「普段生徒に情報を提示する際に意識していることがあれば教えてください」という質問では、生徒自身が情報に気付けるように提示して待つことで生徒の興味関心を高めるという回答があった。重度のグループでは自分で気付いて興味をもつことが活動の第一歩であるため、どのように気付かせるか、興味関心が高められるかが大切である。また情報をそのまま見せるだけではなく、興味関心が高まったところから、次は何をするのか、どうなるのかを生徒自身が考えていけるような情報の提示の仕方が重度のグループでは情報活用能力を高めるために有効な手段であると考えられる。

軽度のグループの教師は、②の「情報活用能力の指導において大事なポイントや意識していることは何ですか」という質問に対して生徒とのやりとりに関する回答が多くみられた。情報を見せるだけではなく、その情報を基に生徒が発信したものを掘り下げたり、質問に回答することで生徒がさらに情報を整理できるようにしたりしてよりよい発信ができるような工夫を多くの教師がしていることが明らかになった。

③の「普段生徒に情報を提示する際に意識していることがあれば教えてください」とい

う質問では、情報を与えすぎるのではなく、生徒自身が考えながら選ぶことができるような必要最低限の精選した情報を提示するなど「提示の仕方」に関する回答が多くみられた。つまり、軽度のグループでは、生徒に思考させるための材料を提示していると考えられる。そのため思考に必要な情報は見やすく残したり、端的な言葉で繰り返し伝えたり、ワークシートの書式を工夫しながら、生徒からの質問やワークシートでのやりとりを経て、教師側の意図やポイントが正しく伝わっているのかを確認していると考えられる。

7. 研究のまとめと今後の課題

(1) 2か年研究のまとめ

高等部として卒業までに身につけさせたい情報活用能力の整理をテーマに研究を進めてきた。卒業後は様々な場所で働き始めるが、その際の生活を豊かにするためにどのような情報活用能力を身につけさせることが高等部段階として求められているのかを2年間かけて明らかにすることができた。1年目では「情報手段を適切に用いて情報を得る」力や「得られた情報をわかりやすく発信伝達」する力が必要であること。生徒の実態として自らICT機器を活用して情報を得る実態のグループや教師からの手助けを受けて情報を得る実態のグループ、ICT機器を使わずに、実感を伴い味あわせながら学習する必要のある実態のグループがあることが明らかになった。

1年目の研究で明らかになった必要な情報活用能力と生徒の実態を基に、今年度はやまびこ支援学校高等部として「情報活用ピラミッド～やまびこモデル～」や「情報活用実践リスト」としてまとめることができた。当初は系統性のある「情報活用ピラミッド～やまびこモデル～」を作成する予定であったが、生徒の実態を踏まえるとなかなか難しく2つのグループの系統性には乏しい。しかし、現在在籍している生徒の実態、今後入学が見込まれる生徒の実態まで踏まえて「情報活用ピラミッド～やまびこモデル～」は似た大項目で作成されているが、下位項目は実態に応じて表現やねらいが大きく異なり、適切な文言の検討を繰り返しながら本校の高等部に適した「情報活用ピラミッド～やまびこモデル～」を作成することができた。

「情報活用ピラミッド～やまびこモデル～」やそれを達成するための手立てとなりうる「情報活用実践リスト」の作成を行ったことで、情報活用能力を育成する際の視点や手立てを高等部の職員で共有できたことが大きな成果である。また一度「情報活用ピラミッド～やまびこモデル～」を作成すれば、今後は下位項目の見直しなど細かな点での修正になり変更が容易になることや、異動したての教師に対しても資料として提示することですぐにイメージを共有することができ、本校の高等部として同じ方向を向いて指導できることが大きな成果である。それとともに、教員間で何度も何度も繰り返し同じテーマで話し合いを進めてきたことで卒業までに身につけさせたい情報活用能力についての意識や方向性が共有できたのではないかと感じる。情報活用能力は一朝一夕で、身につけていく力ではないので多くの教員が意識しながら指導にあたるよう心がけることで、3年間の中で向上が見られると感じる。

卒業後は福祉作業所に就労する生徒が多いのが現状であり、福祉作業所の中ではICT機器の活用というよりはホワイトボード等を活用した伝達が主流である。研究の中で、ICT機器の活用だけに依らず、両グループともに卒業後の生活の場でも活用できる五感を活用し

た情報収集や発信の仕方についても議論されており、「情報活用ピラミッド～やまびこモデル～」の中にも明記されているため検討された情報活用能力を高めることができれば、福祉作業所だけでなく、一般企業においても求められる能力もある程度含めることができているのではないかと感じている。

授業実践としての積み重ねは教師一人一人の活動となり、学部研究としては蓄積できていないが、高等部全体としては実習報告書の作成を同じフォーマットで行い、情報活用能力の育成に関する検証をすることができた。教師の支援の仕方や今回検討した軽度と重度だけでなく、その中間層に位置する生徒に対しても支援が必要だということを改めて明らかになり、有意義な検証となった。軽度のグループの生徒に対して今年度検討した内容を踏まえて、教師が丁寧に生徒に意図が伝わりやすいような情報発信を行っていくことが有効な手段ではないかと感じた。

(2) 今後の課題

今年度は「情報活用ピラミッド～やまびこモデル～」やそれを達成するための手立ての「情報活用実践リスト」の作成に時間をかけたため、授業実践としての検証が不十分であった。今後は一人一人の教師が意識して、今回の研究の内容を来年度以降も実践、検証していくことが課題である。検証していくためにも、前述のアンケートにあったように日頃から目にするところに「情報活用ピラミッド～やまびこモデル～」や「情報活用実践リスト」を記載しておき、先生方が日常的に見えるようにしておくことが大切である。日々の実践を積み重ねながら「情報活用ピラミッド～やまびこモデル～」や「情報活用実践リスト」をブラッシュアップしていけるとよい。

また、実習報告書の作成で見られたように軽度のグループの中にも丁寧な支援を必要とする生徒たちがいることも明らかになった。中間層のグループを意識した手立てや支援の方法も必要なのか検証しながら今後改めて検討していくことが大切である。

実習報告書を作成する過程や研究のまとめから今年度高等部の研究で作成した「情報活用ピラミッド～やまびこモデル～」の方向性は、概ねよいものであると考えられる。しかし、卒業後は学校という慣れた環境から職場という新たな環境で人間関係等を改めて構築していかなければならない。そのような環境下では、卒業後に必要な情報活用能力を身につけている生徒でもその能力を十分に発揮することは難しいことも考えられる。安定した気持ちがあって初めて情報活用能力も活かされるのではないだろうか。今年度は能力に着目して研究を行ったが、それを十分に発揮するための精神面や周囲の支援体制作りなども含めて支援していくことが、今後の課題である。

引用・参考文献

文部科学省（2019）「教育の情報化の手引き-追補版-(令和2年6月)第2章」

日本教育情報化振興会（2021）「情報活用能力ベーシック（小学生版）」

文部科学省（2019）「特別支援学校学習指導要領解説 知的障害者教科等編」

高齢・障害者雇用支援機構（2006）「職業準備性ピラミッド」

「寄宿舍」研究グループ

1 研究主題

興味・関心を広げて社会性を養う
～寄宿舍の強みを生かした生活実践～

2 研究テーマについて（設定の理由）

（1）舎生の実態

本年度、寄宿舍には高等部生4名（男子1名、女子3名）が在籍している。4名のうち3名は入舎3年以上であり生活に慣れた様子が見られるが、卒業を控えた3年生には、卒業後の生活を見据えた支援が求められている。また、新入舎生の女子1名は、初めて親元を離れての生活となるが、日課に合わせた生活や、先輩と共通の趣味を通じた会話を楽しむなど、少しずつ順応し始めている。しかし、今年度の生活開始直後の様子からは、少人数の集団でありながらも、周囲の人や物事に対する興味・関心が薄い傾向が見受けられた。指導員間での実態確認においても、「指示待ちの姿勢が多く、自分からの発信が少ない」「経験不足から活動のアイデアが出にくく、未経験のことへの挑戦に躊躇する」といった課題が挙げられた。

（2）昨年度の課題と本年度のねらい

昨年度は「情報活用能力を生かした余暇の広がり」について研究を行った。その結果、遊びや活動の幅は広がったものの、自分から他者を誘うことに抵抗感を示すなど、対人面での受動的な姿勢が課題として残った。これらの課題と現在の舎生の実態を踏まえ、本年度は、情緒が揺れ動く思春期の心情を大切にしつつ、「寄宿舍での集団生活」という強みを生かした実践を深めることとした。具体的には、他者を意識し、周囲と自分の気持ちに折り合いをつけながら「自分らしさ」を発揮できる姿を目指す。そのためには、日々の生活や舎生会活動を通して社会性をはぐくむことが重要であり、その土台となる「他者や活動への興味・関心を広げる」取り組みが必要であるとの結論に至り、本主題を設定した。

3 研究目標

（1）舎生の成長に向けた環境整備と実践

舎生一人一人の実態に応じたかかわり方を模索し、指導員間での考察・実践・検証のプロセスを通して、適切な手立てや環境整備を行い、舎生の確かな成長に繋げる。

（2）寄宿舍指導員としての専門性の向上

寄宿舍生活の強みを生かした「社会性の育成」に関する研究を通して、指導の幅や見聞を広げ、指導員としての指導力向上を図る。

4 研究内容及び方法

(1) 寄宿舍の強みと支援の整理

寄宿舍生活において養うことのできる「社会性」とは何か、また「寄宿舍の強み」とは何かを再確認し、舎生に必要な支援の手立てや環境構成について整理する。

(2) 事例検討の実施

整理した内容を基に、具体的な指導場面や方法を抽出し、事例検討を重ねながら実践を行う。

(3) 変容の見取りと成果の検証

実践した指導方法やかかわりによって、舎生の行動や意識（興味・関心の広がり、対人関係の変化など）がどのように変容したかを見取り、本研究の成果としてまとめる。

5 研究計画

	日にち	内容
研究日①	5月16日（金）	・寄宿舍で養える社会性を捉える。 ・寄宿舍の強みを確認する。 ・研究方法を確認する。
研究日②	6月6日（金）	・寄宿舍の強みを具現化していくためには ・参考文献を読み、今後の取り組みを考える
研究日③	7月18日（金）	・アセスメントシートの読み取りから事例検討の対象を考える ・中間報告会に向けて ・事例検討
研究日④	8月27日（水）	・事例検討(舎生A→整理用シート①②))
研究日⑤	9月12日（金）	・事例検討(舎生A→整理用シート①②) ・事例検討(舎生B→整理用シート①)
研究日⑥	10月17日（金）	・事例検討(舎生A→整理用シート③④) ・事例検討(舎生B→整理用シート②)
研究日⑦	11月21日（金）	・事例検討(舎生A→整理用シート⑤⑥) ・事例検討(舎生B→整理用シート③)
研究日⑧	12月12日（金）	・寄宿舍研究の成果と課題の確認
研究日⑨	12月25日（木）	・寄宿舍研究のまとめについて
研究日⑩	1月16日（金）	・次年度に向けて

6 研究実践

(1) 寄宿舍で養える社会性や寄宿舍の強みを捉える

研究の実践を開始するにあたり、まず指導員間で「寄宿舍で養える社会性」および「寄宿舍の強み」について協議し、共通理解を図った。

① 寄宿舍で養える社会性

「社会性」という広義な言葉に対し、具体的にどのような力を指すのか意見を出し合い、以下の項目を定義として共有した。

【本研究における「社会性」の定義】

対人関係スキル： 協調性、マナー、コミュニケーション能力（伝える・受け取る・理解する）

状況適応能力：その場に適応する力（周りを見る、TPOに合わせた服装・身だしなみ）

規範意識：場面に応じたルールや雰囲気に合わせて行動する力

この定義を基に、在籍する舎生一人一人の実態と照らし合わせた結果、個別の差異はあるものの、共通した課題として以下の点が挙げられた。

- ・人とのかかわり方や距離感の課題
- ・その場の雰囲気に合わせた行動の困難さ

したがって、本実践ではこれらの共通課題に迫る手立てを重点的に検討していくこととした。

② 寄宿舍の強みを生かした指導

次に、学校併設の寄宿舍という環境特性や、指導員が大切にすべき視点について協議し、『引継ぎ』『異年齢集団』『子供発信』の3つのキーワードに集約した。それぞれの強みを具現化するための指導上のポイントは以下の通りである。

引継ぎ（指導の連続性と深化）

日々の引継ぎは単なる情報の伝達にとどまらず、指導の意図や背景を共有し、「チーム支援」を機能させる場とする。

- ・変容の確認：指導やかかわりの前後で本人の様子がどう変化したかを確認する。
- ・指導の連続性：前日の指導を受け、自分がどのようにかかわるか具体的にイメージして当日の指導に当たる。
- ・学校との連携：学校での様子や指導内容を、寄宿舍の生活指導へつなげる。
- ・舎生への配慮：詳細な情報共有は必須であるが、舎生に不信感を抱かせないように、本人への伝え方やかかわり方には十分配慮する。

異年齢集団でできる経験（ピア・モデリング）

先輩が後輩に教え、後輩が先輩を見て学ぶという「育ち合い」が生まれるのが寄宿舍の良さである。

- ・かかわりの創出：帰舎後の着替えや朝の身支度など、指導員が介入しすぎず、子供たちだけで過ごす時間を意図的に設定する。
- ・効果的なフィードバック：「先輩に聞いたら上手にできたね」「（良い意味で）後輩が真似をしていたよ」など、望ましい相互作用が見られた際には、指導員がその行動を言語化してフィードバックし、異年齢交流の価値を意識付ける。

子供たち発信からの取り組み（主体的活動）

行事や活動においては、単に楽しむことだけでなく、その経験を通して子供たちが「どう変わったか」という視点を重視する。

- ・ニーズの汲み取り：自分の考えを表現することが苦手な舎生もいるため、改まった話し合いの場だけでなく、リラックスした生活場面でのつぶやきや欲求を指導員が拾い上げ、活動へつなげる。

- ・経験の拡充： 経験不足からアイデアが出にくい舎生に対しては、日頃から多様な活動へ誘い、選択肢となる経験の引き出しを増やす。
- ・ハードルの除去： 「やりたい」という本能的な欲求があっても言い出せない場合、指導員がその心理的なハードルを取り除くかわりを行い、主体性を引き出す。

(2) 事例検討

具体的な指導を行う対象舎生や重点目標を選定するために、客観的なアセスメントを実施した。ツールとして、独立行政法人国立特別支援教育総合研究所編著『こころの病気のある子供の教育支援 Co-MaMe ガイド』に掲載されているアセスメントシートを活用し、各舎生の教育的ニーズや課題がどのカテゴリーに分類されるのかを指導員全員でチェック・分析を行った。

6つのカテゴリー名

教育的ニーズの記号と名称、項目の下には実態の例を記載

A 心理		チェック	
		①	②
A1	不安・悩み (不安が強い、悩みが解らぬ)		
A2	感情のコントロール (感情を抑えられない、すぐに怒ってしまう)		
A3	こだわり (一つのことにこだわると他のことが考えられない)		
A4	意欲・気力 (目標がもたない、やる気がおきない)		
A5	自己理解 (何が正しいか自分でも分からない)		
A6	気持ちの表現 (気持ちを言葉・文字に表せない)		
A7	情緒の安定 (嫌なことを思い出し、イライラする)		
A8	気分の変動 (気分の落ち込みがある)		
A9	自信 (自分に自信がない、自己肯定感が低い)		

B 社会性		チェック	
		①	②
B1	集団活動 (集団の中に入ると疲れる、ルールに従えない)		
B2	社会のルールの理解 (学校や社会のルールを守れない、自分で決める)		
B3	コミュニケーションスキル (お礼も言えず、人の話を聞けない)		
B4	同年代との関係 (相手のことを考えた言動ができずトラブルになる)		
B5	家族との関係 (家族との関係がうまくいかない)		
B6	教師との関係 (教師を信用しない、教師とトラブル)		
B7	異性との関係 (異性との関係がうまくいかない)		
B8	他者への信頼 (人が信用できない、人と関わりたいくない)		
B9	他者への相談 (困った時に相談できない)		

C 学習		チェック	
		①	②
C1	学習状況 (勉強の仕方分からない)		
C2	処理能力 (書きながら聞くなど、2つの作業を同時に行えない)		
C3	聞き取り・理解力 (話を聞いても理解できない、指が内)		
C4	読み・書き (文章を読むのが苦手、漢字を正しく)		
C5	記憶力 (すぐに忘れてしまう)		
C6	注意・集中 (集中が続かない、気が散って集中できない)		
C7	学習への意欲 (楽しい教材に出たくない)		
C8	経験 (生活経験が低い)		

D 身体		チェック	
		①	②
D1	身体症状・体調 (お腹痛い、嘔吐、発熱、めまい)		
D4	多動性 (じっとしてられない、静めない)		
D5	感覚過敏 (においに敏感、大きな音が嫌)		

E 学校生活		チェック	
		①	②
E1	見直し (予定の変更を受け入れられない)		
E2	物の管理 (忘れ物が多い、物をなくしてしまう)		
E3	登校・入室への抵抗感 (学校に行きたくない、教室に入れない)		

F 自己管理		チェック	
		①	②
F1	睡眠・生活リズム (規則が守られず遅刻してしまうことが多い)		
F2	食事 (給食が食べられない、外食ができない)		
F3	服薬 (薬が手配できない、薬の管理が面倒)		
F4	病気の理解 (自分自身の病状を理解していない)		
F5	ストレスへの対処 (ストレスへの対処、苦手なことから逃げる)		

①の欄は1回目、②の欄は2回目のチェック欄

○等でチェックを行い、さらに重要、又は早急に取組項目3つ程度に◎をする

図2-3 Co-MaMeの【アセスメントシート】

アセスメントシートの集計結果において、「社会性」に関連する項目に多くのチェックが見られた舎生を事例検討の対象として選定し、重点的な実践を進めることとした。

① 舎生A (高等部1年 女子)

(a) 実態の概要

本年度、地域の中学校から本校高等部に入学した。基本的には人とかかわることを好み、明るく元気な性格である。しかし、自分の思い通りにならない場面では、感情を制御できずに主張を押し通そうとしたり、他者への暴言や手を出したりする行動が見られることがある。対人面ではパーソナルスペースへの意識が薄く、性別を問わず過度な接

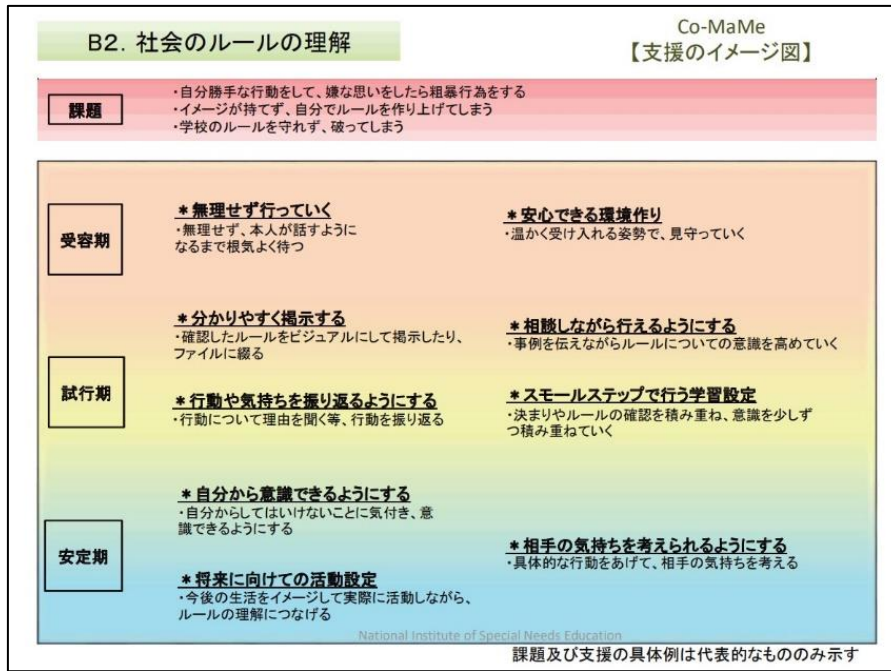
触を好む傾向がある。また、寄宿舎での生活スキル（身辺自立等）は、その時の気分に大きく左右され、意欲が低い時は行動が粗雑になりがちである。余暇時間においては、やるべき活動がないとスマートフォン(以下、スマホ)に依存する傾向があり、日課時間に影響を及ぼすという課題もある。

(b) アセスメントシートの分析

アセスメントシート まとめ								
高等部1年 A								
A 心理								
A1 不安・悩み (不安が強い、悩みが頭から離れない)					○			○
A2 感情のコントロール (気持ちを抑えられない、すぐに怒ってしまう)	◎	◎		◎	◎		◎	◎
A3 こだわり (一つのことにとどまる他のこと考えられない)	○	○	◎		○	○	◎	◎
A4 意欲・気力 (目標がもてない、やる気がおきない)								○
A5 自己理解 (何が得意か、自分でもわからない)								
A6 気持ちの表現 (気持ちを言葉・文字に表せない)				○				○
A7 情緒の安定 (嫌なことや怒りを出してしまう、イライラする)	○				○			○
A8 気分の変動 (気分の浮き沈みがある)								
A9 自尊 (自分に自信がない、自己肯定感が低い)								
B 社会性								
B1 集団活動 (集団の中に入ると疲れる、ルールに従えない)		◎		○				○
B2 社会のルールや規範 (学校や社会の規範を守れない、自分で変更する)	◎	◎	◎	○	◎	◎	◎	◎
B3 コミュニケーションスキル (あいづちがうてない、人の話を聞けない)	○				○			○
B4 同年代との関係 (相手のことを考えた言動ができずトラブルになる)	○		○	○	○			○
B5 家族との関係 (家族との関係がうまくいかない)								○
B6 教師との関係 (教師を信用しない、教師とトラブル)								○
B7 異性との関係 (異性との関係がうまくいかない)		○						○
B8 他者への信頼 (人が信用できない、人と関われない)								
B9 他者への相談 (困った時は相談できない)				○	○	○		
B10 感情理解 (表情や態度から気持ちが読み取れない)	○		○	○	◎	◎	◎	○
C 学習								
C1 学習状況 (勉強の仕方がわからない)								
C2 処理能力 (書きながら聞くなど、2つの作業を同時に行えない)							○	
C3 聞き取り・理解力 (話を聞いても理解できない、指示内容が分からない)								
C4 読み・書き (文章を速く読むのが苦手、漢字を正しく書けない)								
C5 記憶力 (すぐに忘れてしまう)					○			
C6 注意・集中 (集中が続かない、気が散って集中できない)	○	◎	◎	○	◎	○	○	○
C7 学習への意欲 (嫌いな教科に出たくない)				○				
C8 経験 (生活経験が低い)	○			◎		○	○	◎
D 身体								
D1 身体症状・体調 (お腹や頭が痛い、過呼吸や嘔吐が起きる)								
D2 巧緻性(こうせい) (手先を使って操作することが指示どおりできない)				○	○			
D3 動作・体力 (歩力がない、動きがはやくできない)					○			○
D4 多動性 (じっとしてられない、待てない)	○				○	◎		○
D5 感覚過敏 (音に敏感、大きな音が嫌)								
E 学校生活								
E1 退席 (予定の変更を受け入れられない)								
E2 物の整理 (忘れ物が多い、物をなくしてしまう)				○		○		○
E3 学校・入家への抵抗感 (予定の変更を受け入れられない)								
F 自己理解								
F1 睡眠・生活リズム (朝起きられず遅刻してしまうことが多い)								
F2 食事 (朝食が食べられない、夕食ができない)								
F3 服装 (着が手離せない、家の管理が面倒)								
F4 病気の理解 (自分自身の症状を理解していない)								
F5 ストレスへの対処 (ストレスへの対処、苦手なことから逃れたい)	○			○				

指導員全員でアセスメントシート (Co-MaMe ガイド) を用いて実態把握を行った結果、カテゴリー「B 2 : 社会のルールの理解 (学校や社会の規則を守れない、自分で変更する)」の項目に、課題があることを示す「◎」が多くついた。この結果を受け、舎生Aにとっての教育的ニーズは「ルールを理解して守る」と捉え、この課題克服に向けたアプローチを行うこととした。

(c) 整理用シートを用いての実践



同ガイドの「支援のイメージ図」を参考に、具体的な支援内容を「整理用シート」に落とし込み、P D C A サイクルを用いた指導を展開した。実態分析に基づき、舎生Aの現在の段階を「受容期寄りの試行期」と位置付け、まずは指導員との信頼関係を基盤としつつ、少しずつルールを意識させる支援からスタートした。

整理用シート ①		
取り組み期間 6月9日(月)～20日(金)		
項目	記入欄	
① 教育的ニーズの項目	B2	社会のルール
② 具体的な課題内容	スマホの使用時間が守れず、職員に指摘されると強く抵抗する。また、配膳や浴室掃除など全体でやるべき時間に間に合わない時がある。	
③ 支援・配慮等のねらい	スマホ以外の時間の過ごし方ができるように、他の遊びを提案し、興味や関心を広げていく。	
④ 教育的支援・配慮【支援のイメージ図を参考に記入】	【支援の時期：受容期寄りの試行期】 ① ある程度の計算はできるので、その都度スマホの使用時間を自分で計算させて、残りの使用時間を意識させていく。 ② 区切りがつかない時や、スマホの使用がやめられない時は、他の遊びに誘って気持ちを切り替えさせていく。 ③ 他の舎生が配膳を早く始めているので、時間前に来ようが遅れようが本人の中で遅れているという意識が持ち難いのではないかと、他の舎生にも協力してもらい、配膳時間にみんな集合し、そこから手洗いやテーブル拭きを始め、開始時間を明確にしていく。もし、時間に遅れた場合はみんなに待ってもらい、遅れた理由を説明させ、改善へ向けて行動を振り返る。	
⑤ 取り組み期間の様子	① 職員に声を掛けられながらも、使用時間をホワイトボードにを使って計算することで、使用時間を把握する習慣が付き始めている段階である。その取り組みのおかげで、使用時間を大幅に過ぎることはない状況である。 ② 本人だけの力でスマホの使用がやめられない時は、10から数字をカウントダウンして伝えてあげると、それをきっかけに区切りが付けられることが多い。また、UNO やナンジャモンジャ、トランプなどのカードゲームを職員と一緒にしたり、周りに職員がいない時には一人でパズルをしたりするなど、余暇の過ごし方の幅が広がってきている。 ③ 取り組みを始めた時は、4分ほど遅れてきたので、遅れた理由と一緒に振り返り、遅れないようにするために工夫するポイントと一緒に考えた。その際には、ホワイトボードを使いながら本人の言動を整理し、視覚からも訴えていけるように配慮した。その後は、自分で時計を見て動き出すことができていて、遅れることはなくなった。	
⑥ 次の取り組みに向けて	3つの取り組みすべてにおいて、成果が出ていると感じる。支援の時期の段階を上げて、さらに課題に迫っていくとよい。また、本人がスマホの使用時間で注意された際に、手を出すなど激昂する時は、自分の主張が捻じ曲がって受け止められた時がほとんどである。裏を返せば、そのような時は本人の中で正当な理由がある時だと推測されるので、適切な対処法を学ばせていく必要があると感じた。また、歯磨きやドライヤーをしながらスマホを操作していることが多く、そのような行為から時間に遅れてしまうことがあることや、スマホの使用時間を過ぎていても母親との電話はやめられないという、新たな課題も窺い知ることができた。	

整理用シート ②		
取り組み期間 6月30日(月)～7月11日(金)		
項目	記入欄	
① 教育的ニーズの項目	B2	社会のルール
② 具体的な課題内容	スマホの使用時間が守れず、職員に指摘されると強く抵抗する。また、配膳や浴室掃除など全体でやるべき時間に間に合わない時がある。	
③ 支援・配慮等のねらい	本人が納得した中で、スマホのルールやマナーを守るようにする。そこも含めて、全体でやるべき時間に遅れないように、職員や仲間力を借りながら生活を組み立てていく。	
④ 教育的支援・配慮【支援のイメージ図を参考に記入】	【支援の時期：試行期】 ① 不得手なこと(歯磨きやドライヤー、掃除など)と向き合う際に、集中したくないという気持ちもあってか、スマホを操作しながら取り組んでしまう傾向や、スマホ使用時間の換算が曖昧な時がある。そのような状況を受け、もう一度スマホの使用ルールや使用時間の換算方法を再確認し(本人の意向や考えも尊重しつつ)、本人が納得して使用できるようにかわっていく。また、スマホの使用時間が視覚的に確認しやすい支援ツールを作成していく。 ② 配膳や浴室掃除などは、本人の中で遅れないように心掛けている様子が窺えるので、職員からの声掛けを控えながら様子を見ていく。職員からの働きかけが無くても、時間通りに動いた時は、遅れないように心掛けたポイントと一緒に確認し、賞賛していく。	
⑤ 取り組み期間の様子	① 取り組み期間を始める頃にスマホの使用頻度が激減したので、本人に話を聞くと、クラスの友達から、スマホ依存症ではないかと指摘され、それを機に気を付けていると話していたが、2週間程でその効果も薄れ始めた。家庭でのスマホの使用状況を鑑みると、気持ちを継続していくには、違った手立てが必要だと感じた。クラスの友達の話すすなりと受け入れられた理由を推測すると、本生は、同じクラスの中でも人によって態度を変えたり、職員との関係の取り方を見ても女性に対しては強く当たる場面もあり、逆に男性には甘える面が多いなど、人を見ながら行動している様子が窺える。その辺りの特性も今後の指導のポイントとして生かしていけるとよい。また、歯磨きやドライヤーをしながらスマホを操作してしまう件に関しては、職員との約束を理解しているものの、職員を目を盗んでスマホを触ってしまう様子が見られるなど、完全に我慢できていない状態ではない。 ② 配膳に関しては、職員からの声掛けや気付かせるような言動が無くても、自分から時計を見ながら、動けるようになってきている。浴室掃除に関しては、みんなが待っているにも関わらず、母親の電話を優先してしまうことがあった。浴室掃除は、その日によって始める時間も違うので、他の掃除活動と違って優先順位が付けづらいのかもしれない。そのような背景もあるので、周りの人を待たせているという感覚が持ちづらいのだと推察される。	
⑥ 次の取り組みに向けて	スマホの使用は、夏季休業を挟むので、その様子も踏まえて2学期以降の取り組みを考えていく。配膳や掃除に関しては、改善しつつあるので、引き続き様子を見ていく。また、掃除への抵抗感が入学当初より薄れているように感じる。特にお風呂掃除は嫌ではない様子が窺えるので、指導していく手立てとして活用していく。	

整理用シート ③

取り組み期間 9月16日(火)～10月3日(金)

項目	記入欄	
①教育的ニーズの項目	B2	社会のルール
②具体的な課題内容	スマホの使用時間が守れず、職員に指摘されると強く抵抗する。また、配膳や浴室掃除など全体でやるべき時間に間に合わない時がある。	
③支援・配慮等のねらい	スマホのルールやマナーを自分から意識して守れるようにする。また、全体でやるべき時間(特に浴室清掃)に遅れないように、指導員や仲間力を借りながら生活を組み立てていく。	
④教育的支援・配慮【支援のイメージ図を参考に記入】	<p>【支援の時期：安定期寄りの試行期】</p> <p>① スマホの使用時間に関して、使った時間はホワイトボードに記入しているが、それが残り時間に反映されていない状況である。まずは、なぜ時間を守るのかを確認し、自分で意識できる方法を一緒に考え、実践していく。(ストップウォッチの使用など)</p> <p>② 配膳活動は、曜日や時間を意識している様子が窺え、改善してきているが、浴室掃除に関しては、遅れることが多い。10月に中学部の体験入舎があるので、体験生をリードしていきけるようにしていく。そこに向けて、先輩がいる間に掃除の時間や、やり方などを学んでおくように伝える。</p>	
⑤取り組み期間の様子	<p>① スマホの時間を自分で意識できるように、いくつか選択肢を与えると、スクリーンタイムを確認する方法を選択したので、2週間はそのやり方でやってみようと思った。時間が超過しそうな時は職員が気付くような声掛けをし、熱中しそうな時も他の遊びに誘うなどの配慮がありながらも、時間を若干オーバーする日もあった。ただ、以前よりは意識している様子も見受けられているので、2週間の取り組みを振り返る機会をもつ中で、職員の声掛けを減らした状況でも意識していこうと伝え、その1週間はスマホの使用時間に関しては職員からの声掛けをせずに様子を見た。稀にスクリーンタイムを意識する言動が見られたものの、手持無沙汰になるとスマホを操作してしまうことが多く、使用時間を大幅にオーバーする日がほとんどであり、自分の力で使用時間を意識するのは難しく感じた。</p> <p>② 体験入舎で中学部の生徒が宿泊することを伝えられると、嬉しそうの様子を見せていたので、その時に色々と教えられるように、先輩の動きや声の掛け方などを見ておくようにアドバイスした。「来週から先輩が来るから」というセリフも多く、言葉の端々から意識している様子が窺えるので、先輩に対してどのようなかわかりが見られるか楽しみである。</p>	
⑥次の取り組みに向けて	スマホの使用時間に関しては、職員の働きかけがあれば、意識できるが、自分だけの力では意識することは難しい。今までの3つのセッションでは、発達障害の特性に応じた支援を展開していたが、次の取り組みでは、愛着障害の視点からの発達支援も試みていく必要を感じた。いよいよ体験入舎も始まるので、どのような姿が見受けられるか楽しみである。	

整理用シート ④

取り組み期間 10月6日(月)～10月10日(金)

項目	記入欄	
①教育的ニーズの項目	B2	社会のルール
②具体的な課題内容	スマホの使用時間が守れず、指導員に指摘されると強く抵抗する。また、配膳や浴室掃除など全体でやるべき時間に間に合わない時がある。	
③支援・配慮等のねらい	スマホのルールやマナーを自分から意識して守れるようにする。また、全体でやるべき時間(特に浴室清掃)に遅れないように、指導員や仲間力を借りながら生活を組み立てていく。	
④教育的支援・配慮【支援のイメージ図を参考に記入】	<p>【支援の時期：安定期寄りの試行期】</p> <p>(1) 前回の取り組みでは、指導員の声掛けや他の遊びへの誘いなどがあれば、時間を意識できるが、そのような働きかけがないと、スマホに依存してしまう傾向が見られた。今回は、アプローチを変え、愛着の視点からの支援を試みることにする。具体的には、夕食までの時間はできるだけキーパーソンと活動する時間を作り、愛着の絆を深めていく。その際には、感情のラベリング支援をおこない、キーパーソンと一緒に活動をする、ポジティブな感情が生じることを確かめていく。また、今回も月曜日に振り返りの時間を作り、本人と必要な支援を確認し、今回の期間ではできるだけ守れるように働きかけ、良い感情を味わえるように配慮する。</p> <p>(2) 年下である体験生と初めて一緒に生活するので、寄宿舎の日課やルールなどをさらに意識させることを狙いとして、体験生に対して、色々なことを教えたり、かわかりやすい機会を作っていく。その中で、良いかわかりがみられた時は、プラスな声掛けをして、子供たちの自然な行動を言語化して伝えていくことで、異年齢集団の良さをさらに深めていく。</p>	
⑤取り組み期間の様子	<p>(1) 週の頭に、先週までの振り返りと、今週の取り組みについて確認した。その中で、守れていた週(指導員が守れるように声を掛けた週)と、守れなかった週(声掛けをせずに様子を見た週)を本人と比較させると、「わからない」と答えていたので、守っていた週は、スマホ以外にも色々な遊びをしていたことを伝え、そのような時間を増やすために、キーパーソンになるであろう担当の指導員と活動と一緒に行動することを確認した。キーパーソンとの活動は、行動と認知を同一にするために、同じ方向を向いて一緒に作業できる塗り絵(好きなアイドルグループの)を題材として選び、毎日実施した。その中で、同じ活動をする中で生じたであろう感情を放置せずに、感情のラベリングを行い、行動・認知にプラスして感情をつなげていくことも意識してかかった。この週は、体験生が宿泊していたことや、活動の時間も多かったため、スマホの使用時間がオーバーすることはなかった。最終日に本人と担当の指導員で振り返りを行うと、「色々な遊びをしたから」と守れた理由が本人の言葉からも確認できたので、一緒に取り組んだことで達成できたことを実感できるように声を掛けた。</p> <p>(2) 体験生の動きを気にして、配膳や浴室掃除の時に声を掛けたり、遊びの場面でも、いつもはならないボードゲームなどを取り出したなど、体験生を意識している様子が窺えた。また、「舎生B先輩は～してた」という言葉がよく聞かれ、普段から先輩の言動を気にしていたことが確かめられた。</p>	
⑥次の取り組みに向けて	<p>(1) スマホ依存の背景には、愛着形成の問題が潜んでいると思うので、引き続きキーパーソンと一緒に活動する時間を作っていく。また、手持無沙汰になるとスマホを触ってしまうので、ゲームなど色々な活動に誘っていく。</p> <p>(2) 体験入舎生が利用している時に周りにしながら行動するなど成長した姿が見られた。なので、いつも通りのメンバーの中でも、周りや時間を意識して動けるか確認していき、うまくいかない場合は体験入舎中のことを振り返るなどして、意識を向けさせていく。</p>	

整理用シート ⑤

取り組み期間 10月20日(月)～10月31日(金)

項目	記入欄	
①教育的ニーズの項目	B2	社会のルール
②具体的な課題内容	スマホの使用時間が守れず、職員に指摘されると強く抵抗する。また、配膳や浴室掃除など全体でやるべき時間に間に合わない時がある。	
③支援・配慮等のねらい	スマホのルールやマナーを自分から意識して守れるようにする。また、全体でやるべき時間(特に浴室清掃)に遅れないように、指導員や仲間力を借りながら生活を組み立てていく。	
④教育的支援・配慮【支援のイメージ図を参考に記入】	<p>【支援の時期：安定期寄りの試行期】</p> <p>(1) スマホ依存の背景には、愛着形成の問題が潜んでいると思うので、引き続きキーパーソンと一緒に活動する時間を作っていく。また、手持無沙汰になるとスマホを触ってしまうので、ゲームなど色々な活動に誘っていく。</p> <p>(2) 体験入舎生が利用している時に周りにしながら行動するなど成長した姿が見られた。なので、いつも通りのメンバーの中でも、周りや時間を意識して動けるか確認していき、うまくいかない場合は体験入舎中のことを振り返るなどして、意識を向けさせていく。</p>	
⑤取り組み期間の様子	<p>(1) 実習明けたので、実習前の守っていた時のことを振り返り、引き続き意識しながら生活していくと伝えて、取り組み期間をスタートした。前回の取り組みと同様に、キーパーソンと一緒に作業をして、愛着の絆を深める時間を作った。今回は感情のラベリングを行う際に、『誰と一緒に行動したから楽しい気分になった』ことを強調して確認していき、行動・認知・感情をつなげていくことを心掛けた。また、それ以外の時間においても、職員側が主導権を握り、先手をとっての行動の支援(他の活動に誘うなど)を行ったことも、スムーズに行動を切り替えられるきっかけになったと感じた。そのような取り組みが実り出したのか、就寝前に母親に電話をして繋がらなくなった時も、以前は暴言を吐いたり職員に手を出したりしていたが、素直に受け入れられるようになっていた。さらに、すべての日においてスマホの使用時間がオーバーすることはなかった。</p> <p>(2) 体験入舎生が来た時は、お手本となるように意識して行動できていたので、できる力が備わっていることは、見極めることができた。その期間が終わると、先輩との生活が戻ると、周りに合わせながら配膳や浴室掃除に向かう様子が見られている。ただ、周りの舎生が時間より早く動き出してしまうので遅れないという背景も見受けられる。</p>	
⑥次の取り組みに向けて	実習明けは、職員の髪の毛を触ったり、ボディタッチの機会も多く、人恋しい様子が窺えた。取り組み期間を終えてから、スマホの使用時間がルールになってきているので、行きつ戻りつ支援となるが、もう一度ルールの確認やなぜ守らなければいけないのかを伝えていく。	

整理用シート ⑥

取り組み期間 11月10日(月)～11月28日(金)

項目	記入欄	
①教育的ニーズの項目	B2	社会のルール
②具体的な課題内容	スマホの使用時間が守れず、指導員に指摘されると強く抵抗する。また、配膳や浴室掃除など全体でやるべき時間に間に合わない時がある。	
③支援・配慮等のねらい	スマホのルールやマナーを自分から意識して守れるようにする。また、全体でやるべき時間(特に浴室清掃)に遅れないように、指導員や仲間力を借りながら生活を組み立てていく。	
④教育的支援・配慮【支援のイメージ図を参考に記入】	<p>【支援の時期：試行期】</p> <p>(1) スマホの使用時間がルールになっている様子が見られるので、なぜルールがあるのか、守らなければどうなるのか?ということを再度確認していき、依存の背景には、愛着形成の問題が潜んでいると思うので、引き続きキーパーソンと一緒に活動する時間を作っていく。その際には、気持ちの良い感情を共有できるように関わっていくと共に、叱ったり、褒めたりという後手の支援で、指導員全体で先手の支援を心掛けていく。また、本生が企画するイベントがあるので、活動を通して成長できるように活用していく。</p> <p>(2) 配膳時間や浴室掃除など、体験入舎中の様子を見る中で、時間を意識して行動できていたので、引き続き、周りの様子に合わせながらやるべきことの優先順位を判断しながら、行動に移せるように関わっていく。</p>	
⑤取り組み期間の様子	<p>(1) 取り組みのはじめに、先週までのスマホ使用時間の振り返りをおこなった。その中で、スマホ時間がオーバーした時に怒り出したことがあったので、対応した指導員は嫌な気分になったことや、時間を守れなかった指導員も気持ちの良い気分になるように、一緒に生活している友達も良い気分になることを伝えた。キーパーソンとの活動は、前回までの塗り絵に続いて、クリスマスの装飾を使う音だま(好きなアイドルグループをモチーフにしたもの)を紙粘土で作成することとした。前回の塗り絵ほど意欲的ではなかったものの、不器用ながらも頑張って作っていた。また、手持無沙汰にならないように先手を取り様々な遊びに誘ったり、本生と一緒にみんなが楽しめる活動(アイスパーティー)を企画した。活動を企画し、色々な仕事を進めていく中で随所に楽しみにしている様子が見受けられると共に、実施日の近くに先輩が欠席すると、気にする言動がみられた。当日は残念ながら1名欠席者が出たが、参加できた生徒は本生のおかげでみんなが楽しく活動できていた。本生が初めてイベントを企画や進行したことで、周りの生徒の様子を気にする言動が増えてきて、活動を通して日頃の生活に対しても良い影響が出始めている。様々な取り組みが功を奏したのか、スマホ時間もオーバーしないように意識している様子が見受けられている。</p> <p>(2) 配膳時間は、指導員や舎生からの声掛けなど行動を促すきっかけが無くても、自分から時計を見て動けるようになっていて、手を変え品を変え取り組んできた成果が出ている。浴室掃除に関しては、母親からのLINEでの連絡があると、そちらに気が向いてしまう様子が見られた。このような行動の背景には、愛着障害の特性(自分の興味関心より他人に向いてしまう)が潜んでいることも推察されるので、引き続き有効な手立てを探っていく。</p>	
⑥次の取り組みに向けて	スマホの使用時間や掃除などの時間も2学期の初めに比べると、改善されてきている。指導員からの声掛けや動きを促すきっかけが無くても守れるようになってきたのは成長を感じる。引き続き、愛着障害に対しての支援も継続していきながら、課題克服に向けてアプローチしていく。	

(d) 舎生 A の実践まとめ

【課題と初期のアプローチ】

実践開始当初、スマホの使用時間が守れず、指導員からの指摘に対して強く抵抗する姿や、配膳・浴室掃除といった集団での活動時間に遅れるなどの課題が顕著であった。前述の通り、本人の段階を「受容期寄りの試行期」と捉え、ルールの視覚的な提示や、活動時間前の丁寧な声掛けによる意識付けを継続した。その結果、生活全般において一定の改善は見られたものの、スマホ使用に関しては依然として依存傾向が強く、従来のアプローチだけでは限界があることが推察された。

【新たな視点による支援の転換】

学部との情報交換会において、本人の行動背景に「脱抑制型愛着障害」の傾向がある可能性が示唆され、そこに着目したアプローチの必要性を確認した。指導員間において、米澤好史著『愛着障害は何歳からでも必ず修復できる』等の文献を参考に検討を重ね、愛着障害に対する支援を指導計画に組み込んだ。具体的には、以下の2点を重点的な手立てとした。

1. キーパーソンによる愛着の絆の形成：担当指導員をキーパーソンとして設定し、一対一で共に活動する時間を意識的に設けることで、安心感と信頼関係（愛着の絆）の修復・深化を図った。
2. 感情のラベリングと認知の統合：活動中、本人の揺れ動く感情を指導員が言葉にして伝える「感情のラベリング」を実施した。これにより、自身の「行動」や「認知」に「感情」を適切に結びつけ、自己コントロール能力を高めるかかわりを意識した。

【変容と成果】

これらの支援を継続した結果、徐々にではあるが、自らルールを守ろうと努力する姿が見られるようになった。スマホ以外で過ごす時間が増えたことで、他者への関心も広がり、友達や指導員とカードゲーム等で積極的に交流し、盛り上がる姿が頻繁に見られるようになってきている。こうした肯定的な変容の要因には、従来の行動変容を促すアプローチに加え、愛着障害の特性を理解した「心の土台」を作る支援を並行して行ったことが大きく寄与していると考えられる。

② 舎生 B（高等部 3 年 女子）

(a) 実態の概要

地域の中学校から本校高等部に入学し、1年生の時から全泊で入舎している。生活スキルはおおむね自立していて、寄宿舎での日常生活に支障はない。コミュニケーション面では、言葉の意味や名称を間違えて覚えていたり、話の内容が断片的に入っていたりするなど、正しく理解できていないこともある。また、自信のなさからか未経験のことに対して極端に拒む様子が見受けられる。

(b) アセスメントシートの分析

アセスメントシート まとめ									高等部3年 B								
A 心理									B 社会性								
A1 不安・悩み (不安が強い、悩みが深くかられない)	A	B	C	D	E	F	G	H	B1 集団活動 (集団の中にいると疲れる、ルールに従えない)	A	B	C	D	E	F	G	H
A2 積極的コミュニケーション (積極的な発言が少なく、声がかたくなってしまう)		○							B2 社会のルールや規範 (ルールや規範の重要性がわからない、自分で変える)								○
A3 コミュニケーション (一つのことにこだわると他のことが進まない)									B3 コミュニケーションスキル (あいつがうまい、人の話が聞けない)				◎				
A4 集団生活 (集団生活が苦手、やる気が起きない)									B4 社会的な規範 (規範のことを考えず行動がまづらうことになる)		○		○			○	○
A5 自己理解 (自分を知りたがり、自分でわかっていない)				○					B5 家族との関係 (家族との関係がうまくいかない)								
A6 家族との関係 (家族との関係がうまくいかない、意見を言えない)			◎		◎	○	○	◎	B6 学校との関係 (学校生活を楽しめない、教師とトラブル)								
A7 情緒の安定 (情緒が不安定、泣いてしまう、イライラする)									B7 異性との関係 (異性との関係がうまくいかない)								
A8 生活の自立 (自分の生活が自立できていない)			○	○					B8 恋愛との関係 (人が好きなのに、人と関われない)								
A9 自信 (自分に自信がない、自己肯定感が低い)	○	◎	◎	○	◎	◎		○	B9 社会への貢献 (社会への貢献ができていない)	○	◎	◎	◎	○	○		
C 学習									D 身体								
C1 学習状況 (勉強が楽しくない、進歩がみられない)					○	○			D1 身体状況・体調 (お腹痛い、頭痛、吐き気、めまいがある)	A	B	C	D	E	F	G	H
C2 学習意欲 (好きな科目以外は勉強のやる気が起きない)				○		○		◎	D2 行動力 (目標に向かって行動できない、途中で諦めてしまう)				○				
C3 学習方法 (学習方法がわからない、効率よく学べない)				◎	○	○	○	○	D3 動作・体力 (体が弱い、動きが速くない)								
C4 学習習慣 (学習習慣が身につかず、進歩が鈍い)	○	○	○	○	○	○	○	◎	D4 運動 (運動が苦手、体を動かさない)								
C5 学習環境 (学習環境が整っていない、集中できない)	○			○		◎		○	D5 感覚過敏 (においや音、触覚が苦手)					○			
C6 学習成果 (学習成果が実感できない、自信が持てない)									F 自己理解								
C7 学習態度 (学習態度が良くない、授業中に話しかける)									F1 規範・法守り (規範やルールを守れない、ルールが嫌い)	A	B	C	D	E	F	G	H
C8 相談 (相談が苦手、一人で悩んでいる)	○		○		◎	◎		○	F2 自尊 (自尊心が低い、褒められたい)								
E 学校生活									F3 適応 (環境への適応ができていない、不安がある)								
E1 進級 (進級の準備ができていない、不安がある)									F4 成長の理解 (自分の成長がわからない、成長が怖い)								
E2 進級準備 (進級の準備ができていない、不安がある)									F5 社会への貢献 (社会への貢献ができていない、社会が嫌い)				○				○

アセスメントシート (Co-MaMe ガイド) による分析の結果、カテゴリー「A9 : 自信 (自分に自信がない、自己肯定感が低い)」の項目に課題を示す「◎」が集中した。生活スキルは高いものの、根底にある自己肯定感の低さが、未経験のことに対する挑戦を拒む理由の一つではないかと分析した。そこで、自信を深めるプロセスを通じて社会性を養うことを本事例のねらいとし、アプローチを開始した。

(c) 整理用シートを用いての実践

A9. 自信

Co-MaMe
【支援のイメージ図】

課題

- 失敗を恐れ、間違えたときに自分を責める
- 過去の経験から自己肯定感が低く、新しいことなどはやる前からできないと決めてしまう
- 挫折感が強く、目標が決まらず、将来への意欲が持たない

受容期

- * 無理なく楽しい活動を行う**
 - 自信のあることや失敗しない課題を設定
 - ゲーム感覚で楽しく行う
- * 安心できる環境作り**
 - 話しやすい安心できる雰囲気をつくる
 - 失敗しても大丈夫という環境を作る
- * 共感、理解する**
 - 苦手なことを肯定的に受け入れる
 - 気持ちを自由に表現させ、受け止める

試行期

- * 相談しながら進めるようにする**
 - 不安や人間関係等の悩みを定期的に教員と相談する
 - 良かった行動を振り返り、取り組む方法を本人と考える
 - 悲観的にならず、不満や納得する方法を言葉にしていく
- * スモールステップで行う学習設定**
 - 小さな成功体験・達成感を積み重ねて、少しずつ自己肯定感が高まる工夫
 - 適切な負荷で少し頑張ればできることを行う
 - 個別の学習や小集団で少しずつ参加していく
- * ほめられる機会を増やす**
 - 日常の小さなことを沢山ほめて自信を付ける
 - 「頑張ってるね」と声をかけて、取り組んでいる様子もほめる

安定期

- * 自己評価を行えるようにする**
 - 毎日、一週間ごと等にチェック表で自己評価
 - 自己評価から、自分の良さを知る
- * 目標を設定して学習する**
 - できる目標を考えて達成し、達成感を得る
 - 目標を達成するためのプロセスも相談して行う
- * 自分から取り組めるようにする**
 - 活動を選んでも主体的に行う
 - 気持ちを自分から言葉にする

- * 様々な活動を実施する**
 - 様々な活動を行い、チャレンジする意欲を高める
- * 将来に向けての活動設定**
 - 就労に向けて練習をする
 - 今後も悩みは続くが、解決できる力があることを伝える
- * 学力を高める**
 - 集中して学習し、達成感や学力の高まりを感じられるようにする
- * 苦手なことに取り組めるようにする**
 - 苦手なことに取り組む、手だてを準備できるようにする

National Institute of Special Needs Education
 課題及び支援の具体例は代表的なもののみを示す

同ガイドの「支援のイメージ図」を基に、本人の段階を「試行期」と設定し、PDCAサイクルを用いた指導を展開した。特に「失敗しても受容される安心感」を基盤に、段階的な成功体験を積めるよう環境を整えた。

整理用シート ①

取り組み期間 9月16日(火)～10月3日(金)

項目	記入欄	
① 教育的ニーズの項目	A9	自信 (自分に自信がない、自己肯定感が低い)
② 具体的な課題内容	経験したことに対しては積極的だが、初めてのことにに対しては自信の無さからか、消極的な様子が見受けられる。また、実習中に小さな失敗や落ち込んだり、つまずいたりする様子が見受けられたとの報告も受けた。卒業を間近に控えていて、生活スキルも高まっているので、失敗を恐れずに果敢に挑む気持ちや、多少の過ちがあっても気持ちをうまく切り替えられるようになると良い。	
③ 支援・配慮等のねらい	寄宿舎で手軽にできる活動(調理活動や買い物活動など)を計画・実行していく経験を通して、自信をつけさせていく。	
④ 教育的支援・配慮【支援のイメージ図を参考に記入】	【支援の時期: 試行期】 (1) やまびこオリジナルメニュー考案の話し合いを、中心となって進めさせていく。その際に事前指導があると意見が出やすいので、前日などに投げかけておく。 (2) 活動や日頃の生活の様子を自己評価させ、自分を知る機会をつくっていく。自己評価をする際には、プライドが高く全てを○をつける傾向があるので、△や×があっても、大丈夫であることを伝える。	
⑤ 取り組み期間の様子	(1) オリジナルメニューの考案では、使いたい食材からどんなメニューが作れそうか、事前にイメージを持たせた。当日は、真先に自分のイメージを発表したり、自ら書記と司会補助を兼任したりとやる気を見せていた。途中、頭がいっぱいになって座り込んでいたが、最後まで話し合いに参加していた。本生と一緒に振り返りをする時、「みんながどンドン意見を出すから頭が疲れた」と言っていた。担当から、自分では気付かなかったかもしれないけど、良いところがたくさんあったと褒めると、照れ笑いのような表情を見せていて、客観的に自分の良い評価を伝えられることは嬉しいのだと感じた。 (2) セルフチェックシートを使い自己評価を行い、自分を知る機会を作った(別紙参照)。基本的な生活習慣や社会性など、普段からできていることは5(している)をつけていたが、対人関係、コミュニケーション、自己理解は考え込むことが多かった。挨拶について、学校・実習・寄宿舎で指導されているからか、評価も低く、記述式の苦手なことの欄にも書いていて、自分の課題だと自覚している様子だった。他の項目についても、なぜその評価をつけたのか本人に聞く、自分なりにちゃんと理由があり、自信過剰な評価をつけている様子もなかった。長所が思いつかず、一個だけ絞り出していたため、指導員から舍生Bの良いところを伝えたと、照れながらも静かに聞き入っていた。舍生Aに対する気持ち、その対処法を指導員と一緒に話したことで心境の変化があったのか、舍生Aに対して自分から積極的に関わったり、不満を直接伝える場面が増えた。指導員への朝の挨拶は、以前よりもはっきりと聞こえる声で言うようになってきた。友達同士の挨拶はまだ課題が残る。	
⑥ 次の取り組みに向けて	(1) その後の活動(蒸しパン作り)でも積極的な様子が見えたので、実習明けにも都留高校との交流や、本生が企画するそうめん大会があるので、色々な役割を与えながら自信を付けさせていく。 (2) チェックシートの取り組みの中で、今まで出たことがない感情を出せたのか、職員や後輩に対する関わり方が良い方向に変わってきている。そのあたりの変化を本生にフィードバックしていき、さらなる成長に繋げていく。	

整理用シート②

取り組み期間 10月20日(月)～10月31日(金)

項目	記入欄	
① 教育的ニーズの項目	A9	自信 (自分に自信がない、自己肯定感が低い)
② 具体的な課題内容	経験したことに対しては積極的だが、初めてのことにに対しては自信の無さからか、消極的な様子が見受けられる。また、実習中に小さな失敗や落ち込んだり、つまずいたりする様子が見受けられたとの報告も受けた。卒業を間近に控えていて、生活スキルも高まっているので、失敗を恐れずに果敢に挑む気持ちや、多少の過ちがあっても気持ちをうまく切り替えられるようになると良い。	
③ 支援・配慮等のねらい	寄宿舎で手軽にできる活動(調理活動や買い物活動など)を計画・実行していく経験を通して、自信をつけさせていく。	
④ 教育的支援・配慮【支援のイメージ図を参考に記入】	【支援の時期: 安定期】 (1) 都留高校との交流で案内係など役割があるので、その活動をきっかけにどのような変化が見られるか確認していく。また、失敗することがあっても、気持ちを切り替えられるように関わっていく。 (2) チェックシートをきっかけに、職員や後輩に対する関わり方が改善されてきている。実習で2週間のプランが空いたが、引き続き様子を見ながら、良い変化は本人にフィードバックしていき、自信に繋げていく。	
⑤ 取り組み期間の様子	(1) 都留高校との交流で校内内&会長挨拶、おわりの会の司会などの役割をこなす。流れの確認では、何か確認しておくことはあるか聞くけど大丈夫ですと言っていた。舎生会長の言葉は、前に出て話すのにやや戸惑っているように思えたが、紙を見ながら伝えていた。終わりの会の司会では事前に練習はしてあったが、戸惑ってしまう姿もあり、職員が少しだけフォローした。人が大勢いるにも関わらず、「なんて言ったらいいの?」と言葉にして助けを求めたのは珍しい、困ったことをそのままにせず、自分の気持ちを素直に伝えるようになってきたのは良い傾向ではないか。 校内の案内では、急遽学部棟を見学することになったが、「ここが小学部棟です。」とか「カフェをします。」とか多少言葉足らずのところもあったが自分から積極的に伝えようとする姿も見受けらるなど自信を持って話すことができていたと思われる。 (2) 実習明けも舍生Aに対する態度は実習前と変わらず、良いかかり方ができている。舍生Aのことを「妹みたいなものだから」と言っていることもあり、多少イラっとしても「しかたない」と切り替えて面倒を見る方向にシフトできているのではないかと推察される。疲れている時はさすがに舍生Aから抱き着かれるといった強引なかかわりは鬱陶しい様子。無言で手で押しのけたりすることがあったため、指導員から「言っていんだよ」と伝えられると自分の気持ちを素直に舍生Aに伝えることができていた。 朝の舎生同士の挨拶は、はじめは抵抗感が強かったが、少しずつ意識できるようになってきている。気持ちが変化し始めた要因としては、本生の行動のみを賞賛するのではなく、本生のおかげで周りの舎生にも良い変化が見られているという事実を伝えることが功を奏したと考えられる。	
⑥ 次の取り組みに向けて	生活の中で着実に自信をつけてきた様子が見えていたが、交流会という活動を通して、さらに自信をつけたように感じた。また、周りの為に動けるといふ声掛けが効果的だということが分かったので、次の取り組みに生かしていきたい。	

整理用シート ③

取り組み期間 11月10日(月)～11月28日(金)

項目	記入欄	
① 教育的ニーズの項目	A9	自信 (自分に自信がない、自己肯定感が低い)
② 具体的な課題内容	経験したことに対しては積極的だが、初めてのことにに対しては自信の無さからか、消極的な様子が見受けられる。また、実習中に小さな失敗や落ち込んだり、つまずいたりする様子が見受けられたとの報告も受けた。卒業を間近に控えていて、生活スキルも高まっているので、失敗を恐れずに果敢に挑む気持ちや、多少の過ちがあっても気持ちをうまく切り替えられるようになると良い。	
③ 支援・配慮等のねらい	寄宿舎で手軽にできる活動(調理活動や買い物活動など)を計画・実行していく経験を通して、自信をつけさせていく。	
④ 教育的支援・配慮【支援のイメージ図を参考に記入】	【支援の時期: 安定期】 (1) そうめん大会やクリスマス会のボウリング係などを企画・実施することで更なる自信に繋げていく。また、卒業後の余暇生活にも繋げていけるように関わっていく。 (2) 朝のあいさつがすんなりと言えるようになってきているので、引き続き様子を見ていく。また、後輩が企画するアイスパーティーに対しては、良いお膳立がができるように関わっていく。	
⑤ 取り組み期間の様子	(1) 事前学習では当日の職員の役割を自分で考え依頼したり、作り方を確認したりする。当日は、まず職員と一緒に麺を茹でる作業をおこなうと、手順は問題なかったが、茹で時間の計算は難しかった様子である。茹で上がったあとは家で祖母がやっているような麺の盛り付け方を実践していた。会では本人なりにテンションを上げて進行をしていて、他の舎生も楽しんでいる様子が見られた。本人に感想を聞いたところ、ルールを考えたり先生たちの役割を考えたりのが大変だったが、みんなも楽しそうで自分のにも100点の出来だと話していた。職員からも、色々な活動を何回かやってきて、上手に進められるようになっていったこと、色々なアイデアが出るようになったし、本生がみんなのために積極的に準備してくれて素晴らしいことを伝えた。 (2) 舍生A企画のアイスパーティーについて、先輩として盛り上げてくれることを期待していたが風邪のため欠席して参加できなかった。翌々日、登校した際に「舎生Bさんのアイスもあるよ」と舎生Aに伝えられると「昨日、家でアイス食べた」と返答する。その前に伝えるべきことがあることを指摘されると、小さな声で「ありがとう」と言っていて、人から投げかけられた言葉に対して、第一声で否定するようなことを言ったり、自分の話にすり替えたりする傾向があると改めて感じた。その様子を受けて、もう少し周りの人に優しく接していけるといこと、友達が高張っていることを素直に褒められるようになってほしい事を伝えた。自分の言動が人にもどのような印象や影響を与えるかということに理解が乏しく、強がってしまう性格でもあるため、こちらが指摘しても自分の非をすぐに認めないことがある。しかし、言われたことは気にしているようで、職員のない場所や、時間が経ってから態度を改めていくこともある。	
⑥ 次の取り組みに向けて	今年度は食べることに関する活動を沢山企画したことで、自信がついてきたように感じた。その様子を見た周りの生徒も、同じように活動を企画するなど、良い影響を与えている。後輩に対しての関わりや、自分の言動が周りに対してどのような影響を与えているのかということに対しては、まだ課題が残るので、引き続き支援の方法を探していきたい。	

(d) 舎生 B の実践まとめ

【課題と支援の焦点】

経験したことに対しては積極的だが、初めてのことにに対しては自信のなさからか、消極的な様子が見受けられた。産業現場等における実習でも、小さな失敗で落ち込む様子が見られ、卒業後の社会生活を見据えると、「失敗を恐れず挑戦する意欲」と「失敗した際の感情の切り替え（レジリエンス）」の育成の必要性を感じた。そこで、以下の2点に焦点を当てて実践を深めた。

1. 活動を通じた成功体験の蓄積： 役割分担を通じて自信を深める。
2. セルフチェックシートによる自己理解： 客観的に自分を見つめ、課題を自覚する。

【具体的な手立てと内面の変容】

本生は負けず嫌いな性格であり、当初は自分の非を認めにくい傾向があった。しかし、担当指導員とセルフチェックシートに取り組む中で、「△や×（課題）があっても、ありのままの自分で大丈夫である」という受容的なかわりを心掛けた。その結果、過大な自己評価ではなく、自らの課題を素直に自覚できるようになっていった。この過程で、指導員に対して素直な感情を表出できるようになったことが転換点となり、対人面にも変化が現れた。これまで年下との接触機会が少なかったためか、新入舎生（後輩）に対してぎこちなさや嫉妬心を見せるなど、自身でも制御しがたい感情に戸惑う様子があったが、指導員がその揺れ動く思いに寄り添い、時には受け止め、時には改めさせていくというサイクルを繰り返す中で、後輩への接し方が次第に柔らかくなっていった。

【成果】

活動時の司会や様々な役割を任された時も、今までのような緊張から言葉に詰まることなく、肩の力を抜いて冗談を言ったりする様子も見られるようになってきた。思春期特有の複雑な感情を指導員が受け止め、適切にフィードバックし続けたことで、他者を意識しながらも、周囲と自分の気持ちに折り合いをつけ、自分らしく振る舞えるようになってきている。

7 研究のまとめと今後の課題

(1) 研究の成果

本年度は「興味・関心を広げて社会性を養う～寄宿舍の強みを生かした生活実践～」をテーマに掲げ、2名の事例検討を中心に、舎生の成長と指導員の指導力向上という2つの目標に注力した。本研究を通して得られた成果は以下の通りである。

① 多角的な実態把握と専門性の向上

舎生の課題に対し、家庭環境、成育歴、学校での様子など多角的な視点からアセスメントを行った。その結果、従来の発達障害に即した支援に加え、愛着障害の視点や自己肯定感を高めるアプローチなど、一人一人の背景に応じた柔軟な指導を展開することが

できた。また、専門的な文献（米澤好史著『愛着障害は何歳からでも必ず修復できる』等）を拠り所としたことで、指導員間の見解が統一され、より一貫性のある指導が実現した。

② 指導体制の強化と方向性の共有

指導上の困難に直面した際も、「指導の目的」と「研究の方向性」を常に再確認することで、統一した指導につながった。特に、週の初め（月曜日）に指導員全員で前週の振り返りと今週の方針を共有したことが、指導の質を向上する上で極めて有効であった。

③ 寄宿舎の強みを生かした社会性の育成

少人数の集団であっても、指導員を介さない舎生同士の自然なかかわりを「指導の機会」として意図的に捉えた。中学部生徒の短期体験入舎を含む異年齢集団の生活を通じ、他者を意識した行動や感情のやり取りが生まれたことは、社会性を養う大きなターニングポイントとなった。こうした集団生活における「生きた経験」を指導員が効果的にフィードバックしたり、言語化して舎生へ伝えたりすることで、周囲への興味・関心の広がりを促すことができた。

（２）今後の課題

本年度の研究成果を踏まえ、次年度に向けて以下の課題に取り組んでいく必要がある。

- ・アセスメントツールのさらなる活用と定着：本年度試行した「Co-MaMeガイド」等のアセスメントツールを必要に応じて活用し、より客観的でエビデンスに基づいた指導がおこなえるようにしていく必要がある。
- ・「主体性」へのアプローチの深化：社会性の土台となる「興味・関心」の広がりを、どのようにして自分から発信する「主体的な行動」へとつなげていくか、指導の手立てをさらに具現化していきたい。

おわりに

寄宿舎という「生活の場」だからこそできる支援を妥協することなく追求することが、舎生の確かな成長につながることを再確認した一年であった。来年度も舎生の実態を真摯に捉え、寄宿舎ならではの指導の在り方を深めていきたい。

<参考文献>

- ・独立行政法人国立特別支援教育総合研究所 編著（2024年）「こころの病気のある子供の教育支援 Co-MaMe ガイド」ジヤース教育新社
- ・米澤好史（2022年）「愛着障害は何歳になっても必ず修復できる」合同出版

2年次 研究のまとめ

本校においてICT利活用にとどまらない情報活用能力の育成について、その力を着実に児童生徒が身に付けていけるような授業実践を重ねていくことが必要であると考え、2年計画にて情報活用能力育成のための授業づくりに焦点を当てていくこととした。

また、ICT利活用に限らない「情報」を活用することにより学習効果の最大化を目指した授業づくりを探求していき、授業研究を通して、授業の質や教職員の授業力を向上させることをねらいとし、研究を進めてきた。

小学部では昨年度の研究を踏襲しつつ、新たな視点で授業において活用していくことを目指し、本校小学部の児童に必要な“情報活用能力”を育成するための方法や、授業におけるICT活用について検討すること、授業研究等の実践を通して、児童の“情報活用能力”を高めることを目的とし、小学部中・高学年グループと低学年グループに分かれ、それぞれで研究を進めることとなった。ICT活用に関して中・高学年グループでは実態差のある二人の児童を取り上げ、それぞれの実態に合ったICT活用について検討、実践した。児童の実態に応じて適切な学習場面に依り活用すること、効果的な活用方法を教師間で確認することが大切であると確認された。一方、低学年グループでは小学部低学年の児童が自らICT機器を操作することは難しいので、教師側で適切な場面、適切な方法で適宜授業に取り入れ、児童に機器に触れさせる経験をすることが分かりやすい、と確認された。また、児童の“情報活用能力”を高めるためには、実態把握を適切に行うこと、それぞれの児童の「身に付けさせたい力」を明確にし、目標に沿った手立てを考えていくこと、情報を得やすい環境を整えること、評価を基に次の支援について考えていくプロセスが大切であることが小学部で確認された。

中学部ではこれまでの教科指導の蓄積から指導の手立てを整理し、情報活用能力育成に有効な手立てを考え、生徒が得た情報をどのように受け取り活用するかについて考えてきた。生徒が学んだことを授業の中でアウトプットできるようにするには情報をどのようにインプットさせるかが極めて重要であることが確認された。中でも生徒の学びの様子によりインプットさせたい情報を細分化して精選して繰り返し提示していくことが必要となる。つまり、単元計画の立て方にも工夫が必要となることが分かった。情報のインプットにおいては集団の良さを活用し示範を教師のみではなく友達にも行ってもらい、やるべき活動をより明確化させた。そのことによってどの生徒も活動の流れや今教師から何を求められているか理解でき、自分から動こうとする気持ちを持ち、行動に移すことができた。また、得た情報のアウトプットする場の設定を教師が行い、生徒に合った方法でアウトプットさせることについて考えていくことができた。生徒がどのようにアウトプットできるかについて把握し、授業の中でどの方法にて行うか、多角的にかつ複数の目で同じ視点を持ちながら生徒の実態把握を行うことが重要であることが明らかになった。

高等部では「情報手段を適切に用いて情報を得る力」や「得られた情報をわかりやすく発信伝達」する力を中心とした考え方から得られた手立てを基に、やまびこ支援学校高等部の生徒としてどんな力を身に付けさせたいか、また卒業後の生活をより良くするためには高等部段階でどのような情報活用能力を身に付けておくことが大切であるかに焦点を当

て研究を進めてきた。やまびこ支援学校高等部の生徒として身に付けさせたい情報活用能力を独自の指標を作成しながら、わかりやすく整理していくことが目標であると確認しながら研究を進めていった。1年目の研究で明らかになった必要な情報活用能力と生徒の実態を基に、今年度はやまびこ支援学校高等部として「情報活用ピラミッド～やまびこモデル～」や「情報活用実践リスト」としてまとめることができた。「情報活用ピラミッド～やまびこモデル～」やそれを達成するための手立てとなりうる「情報活用実践リスト」の作成を行ったことで、情報活用能力を育成する際の視点や手立てを高等部の職員で共有できた。それとともに、教員間で何度も何度も繰り返し同じテーマで話し合いを進めてきたことで卒業までに身に付けさせたい情報活用能力についての意識や方向性が共有できた。

寄宿舎では情緒が揺れ動く思春期の心情を大切にしつつ、「寄宿舎での集団生活」という強みを生かした実践を深めることとした。社会性を育むことが重要であり、その土台となる「他者や活動への興味・関心を広げる」取り組みを行ってきた。舎生の課題に対し、家庭環境、成育歴、学校での様子など多角的な視点からアセスメントを行った。その結果、従来の発達障害に即した支援に加え、愛着障害の視点や自己肯定感を高めるアプローチなど、一人一人の背景に応じた柔軟な指導を展開することができた。また、専門的な文献を拠り所としたことで、指導員間の見解が統一され、より一貫性のある指導が実現した。少人数の集団であっても、指導員を介さない舎生同士の自然な関わりを「指導の機会」として意図的に捉えた。中学部生徒の短期体験入舎を含む異年齢交流を通じ、他者を意識した行動や感情のやり取りが生まれたことは、社会性を養う大きなターニングポイントとなった。こうした集団生活における「生きた経験」を指導員が価値づけ、言語化して本人へ伝えることで、周囲への興味・関心の広がりを促すことができた。

以上のように、研究テーマのもと、児童生徒の情報活用能力や社会性をどう育成していくかについて2年間を通し実践を重ねてきた。実践を通しての成果、つまり情報活用能力育成に有効な授業づくりの手立てとこれからの課題について以下にまとめていき2年間の研究を総括する。

(1) 視点をもちながらの実態把握を行う

本研究では情報活用能力育成を目指してその手立てや教材研究を行ってきた。情報活用能力の中でも児童生徒の課題に合わせ、育成したい力を明らかにし、現在できることと課題となることを教師が把握し、手立てを考えてきた。小学部、中学部の実践でも触れられていたように児童生徒が「情報をどのように受け取ることができるか」「受けた情報をどう表現できるか」について実態把握を丁寧に行う必要がある。これは情報活用能力といった視点のみではなく、教科の狙いを達成するためにも大切な視点となるのではないか。教師がどの力を育成したいかといった視点をもちながら児童生徒理解をしていくこと、それを授業者と共有していくことが重要となる。

(2) どの「情報」を収集（インプット）させ、どう表現（アウトプット）させたいか見通しをもちながら授業づくりを行う

前述の(1)とも関連付けられることである。授業づくりを行う際にねらいを達成することが目的であることは周知の通りであるが、情報活用能力育成の視点も授業づくりには極めて重要である。全学部で述べられているように、「実態に合った方法で情報を得ること」と「得た情報を正しく表現すること」は両輪を成すものである。情報のインプットの際にアウトプットについても併せて考えていき、児童生徒が学んだことを正しく表現・表出できるように配慮していく必要がある。この際の配慮とは教師の指導の見通しであるといえよう。環境設定を含めた指導に見通しをもちながら学習を進めていくことこそ情報活用能力育成のために必要な手立てとなる。

(3) ICT機器活用については適切な場面、効果的な活用方法を教師間で確認し、体験的な学習の重要性についても周知する

ICT機器の有用性については本研究においても触れている。それと同様に実体験の重要性についても周知の通りである。ICT機器と実体験とをバランスよく合わせることで指導の相乗効果つまり、学習効果の最大化が図れると考えられる。実態に合わせ、使用場面・機会を考えていくことが重要となる。

以上のように各学部での育成を目指す情報活用能力の検討や協議を通し、本校で育成を目指す情報活用能力について明らかにし、授業づくりについて有効な手立てをまとめていくことができた。また、情報活用能力育成のための手立てを考えることにより、情報活用能力の視点の整理につながり、授業内容の再検討や手立ての再構築を行うことができた。

次に、これらの情報活用能力を育むための授業づくりの取り組みを学部のみではなく、学校全体としてどのように取り入れていくかについて考える。中央教育審議会「『令和の日本型学校教育』を担う 教師の養成・採用・研修等の在り方について（答申）」（2022年12月）において「これからの時代には、日本社会に根差したウェルビーイングについて考察しつつ、教師自らが問いを立て実践を積み重ね、振り返り、次につなげていく探究的な学びを、研修実施者及び教師自らがデザインしていくことが必要になる。」とされている。指摘の通り研鑽については自己のものであるといえるが、学校の授業改善は授業者全員のものであると言える。教師の専門性が発揮されるべき場面は日々の授業である。その授業改善を学校全体として取り組むために何が必要か考えていきたい。本校の授業づくりの方法として、授業前に要点を絞りながら打ち合わせをし、授業後に評価を授業者が記入等を行い、単元終わりに最終的な評価をするということがある。この際の授業・単元の振り返りについて意図的に行うことが必要でないかと考える。「意図的」とは、前述の視点をもちながら、「この取り組みは有効だったか」「手立てが妥当であったか」を話し合うことである。

同答申に「教師の学びの内容の多様性と、自らの日々の経験や他者から学ぶといった「現場の経験」も含む学びのスタイルの多様性を重視するということが重要である。この観点からも、教師の個別最適な学びの実現のみならず、協働的な学びを実現していくことが必要である。」とあるように日々の授業の振り返りについて、意図をもちながら互いに意見を出し合い、「見通し、行動、振り返り」を繰り返していき、自ら主体的に学びを深めるAARサイクルを行うことも私たちの学びにつながることで捉えることができる。こうしたAARサイクルを授業者として、私たちが学校全体として取り組む必要があるのではないかと考える。

最後に、本研究の課題についてである。現段階では育成を目指す情報活用能力が教科横断的、系統的な視点に基づくかどうかについての検討には至っていない。今後も本校の育成を目指す情報活用能力に基づいた実践を蓄積していき、児童生徒の情報活用能力育成がどのような状況であるか見ていくことが必要である。

本研究は情報活用能力を育成するための授業づくりについて検討を重ねながら授業実践に取り組んできた。児童生徒が様々な情報を活用していく資質・能力は非常に重要である。本研究を通し、児童生徒一人一人の良さや必要としていた手立てに気づき、深く考えることができた。学校教育目標である「主体性をもって生きる」ことの具現化を図るため児童生徒の「かがやくえがお」を大事にしながら、情報活用能力育成を目指した授業づくりをこれからも行っていきたい。

〈引用・参考文献〉

中央教育審議会答申（2018年）「幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」

文部科学省「新しい時代の特別支援教育の在り方に関する有識者会議報告本文（2021）Ⅳ ICT利活用等による特別支援教育の質の向上」P. 21-24

文部科学省（2018年）「特別支援学校教育要領・学習指導要領解説 総則編（幼稚園・小学部・中学部）」P. 204-209

文部科学省（2019年）「教育の情報化に関する手引」P. 23-24

山梨県教育委員会（2024年）ICT活用チェックシート

一般社団法人 日本教育情報化振興（JAPET&CEC）（2021年3月）情報活用能力ベシク小学校版

中央教育審議会（2022年12月）『令和の日本型学校教育』を担う 教師の養成・採用・研修等の在り方について（答申）」

—研究同人—

校長 小嶋 加津美

教頭 寺西 修 近藤 光彦

小学部 木村 理悦子 渡邊 三弥 小宮 葉月 中澤 真澄 帶野 孝之 佐藤 裕子
有井 友紀 松本 朱実 小林 雅美 久嶋 理恵 市川 弘康 村松 恵子
采野 真佐斗 茂木 直輝 雄長 順子

中学部 上條 三貴 小俣 ゆうこ 上運天 智貴 和智 さおり 小川 紀子
森嶋 将平 小池 淳一 米谷 文直 杉澤 さおり

高等部 渡井 祐二 小野 真太 小澤 理恵子 天野 陽介 飯島 由香利
上武 愛 海野 恭史 矢崎 文昭 小俣 聖麗奈 網野 育美
山口 清美 平井 浩次 高部 瑞希 羽田 浩治 杉本 美恵子
品田 奈保

寄宿舍 今福 健司 大戸 淳 河西 悠介 三枝 麻美 佐藤 智子
中澤 真由美 三井 松江 渡邊 司

〒409-0618 山梨県大月市猿橋町桂台3丁目31番地1

山梨県立やまびこ支援学校

TEL 0554-23-1943

FAX 0554-23-1946

E-mail ymbk-yg@kai.ed.jp

HP <http://www.yamabikoy.kai.ed.jp/>

研究部 小川 紀子 渡邊 三弥

天野 陽介 大戸 淳

教務主任 杉澤 さおり